

すまいるん

季刊
2008 秋

号 (通巻第88号) 二〇〇八年一月二〇日発行◎

創立60年

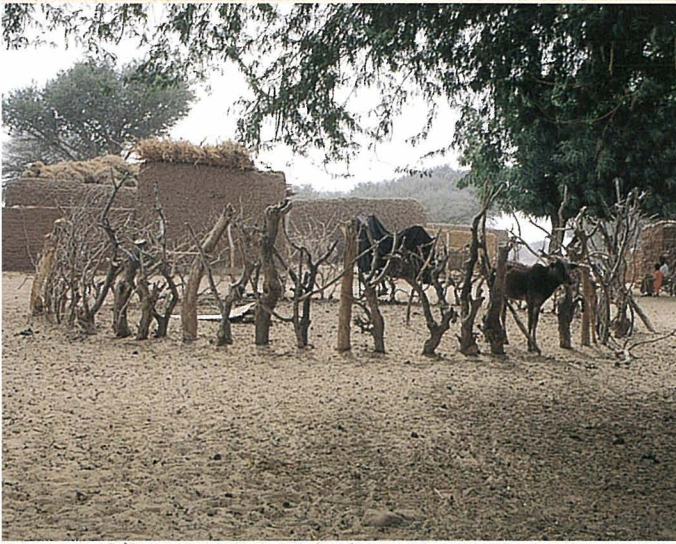
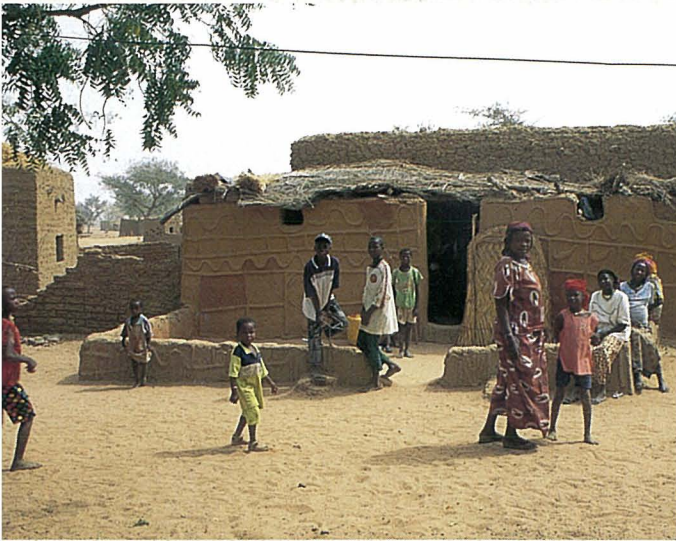
住総研

特集「nLDKもわるくない」

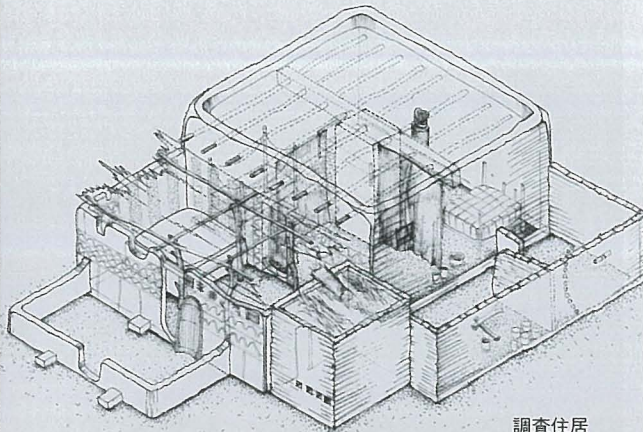
目次

- 〔風紋〕 色土のレリーフ壁のブルキナファソのソンガイ族
藤井明……………2
- 〔焦点〕 nLDKもわるくない……………4
- 家族のあり方とnLDK……………7
- 北浦かほる(帝塚山) + 祐成保志(信州大准教授) 司会||小林秀樹(千葉大教授)……………
- nLDK批判とは何であったのか 江上徹……………27
- ナワバリ学が解き明かすnLDKの真実 小林秀樹……………31
- 記号に過ぎぬnLDKにも水面下の变化 山本理……………36
- 「2DK」がつくるnLDK 橋本直明……………41
- 〔すまいるのテクロジー〕 ハウスメイカ 1から見たnLDKと脱nLDK小間幸一……………46
- 〔私のすまいるん〕 ODK、団地暮らしもわるくない 脇田健一……………52
- 〔ひろば〕 nLDK、ふたつの視点から見える住宅の本質 大川幸恵……………56
- 〔図書室だより〕 蔵書探訪東京大学大学院 関野貞資料 角田真弓……………58
- 〔すまいるんを読む〕 前号特集を読んで 小泉雅生/岩本和明……………60
- 〔すまい再発見〕 今井兼次の自邸 今井兼介……………66
- 住総研ニュースレター……………62 編集後記……………68

丹念に色土を盛り上げてレリーフ状の模様を描いた住居が並ぶ。かつての交易の民ソンガイ族の砂漠の集落。下は木の枝を差しただけの家畜囲い。(風紋より)



風紋

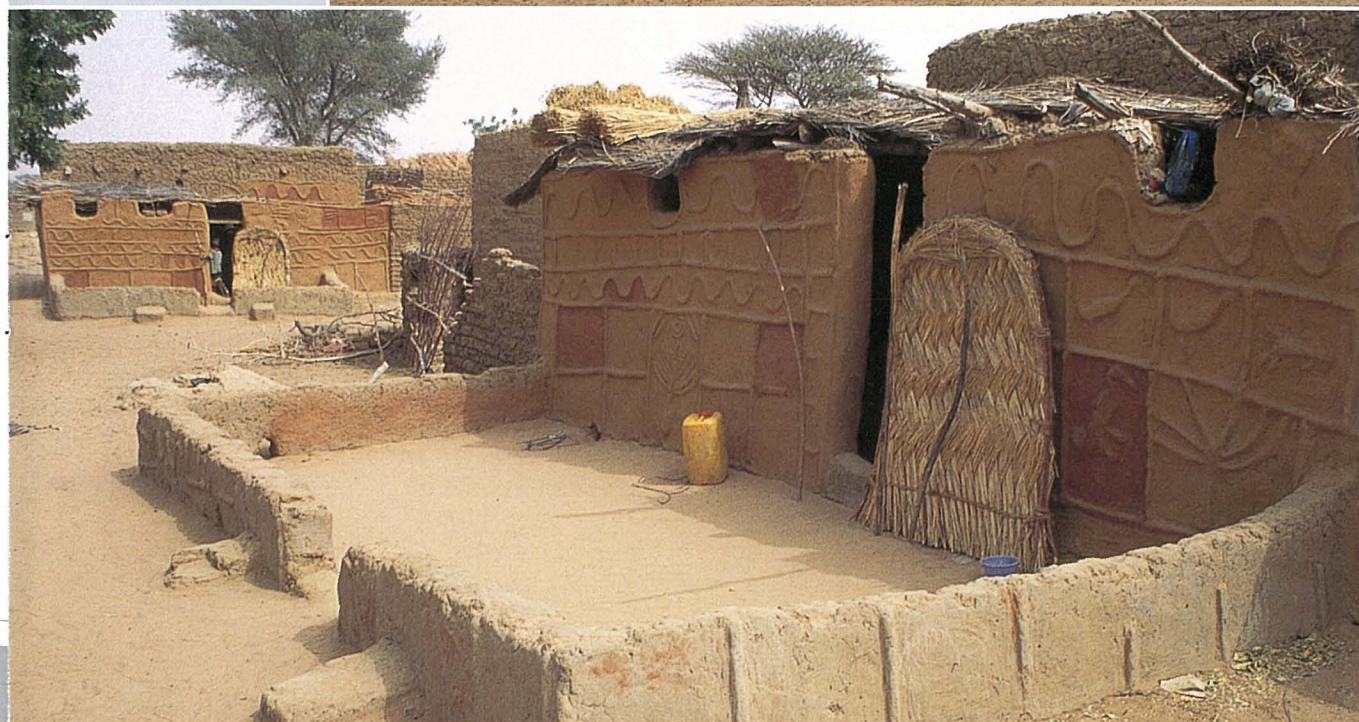


調査住居
アクソメ図



1 | 2
3
4

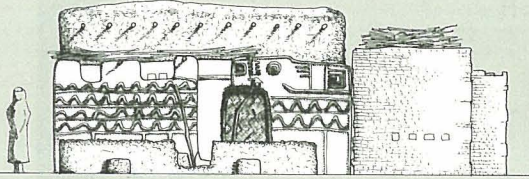
- 1—調査住居の前室に集まった家族。
- 2—前室の土壇を見る。
- 3—矩形の住居とは対照的な、壺状の穀倉が並んでいる。
- 4—色土で幾何学模様のリリーフを施した住居。左端に見える正面をこちらに向けているのが調査住居。



色土のレリーフ壁

—ブルキナファソのソンガイ族

写真と文／藤井 明



調査住居断面図

サハラ砂漠の南縁部をサヘルと呼ぶが、サヘルには大航海時代以前から幾つかの黒人国家が存在していた。そのひとつ、ソンガイ帝国は一五世紀の半ばから一六世紀末にかけての最強の王国で、その版図はニジェール河に沿って現在のマリ、ブルキナファソ、ニジェールに及んでいた。トンブクトウ、ジェンネといった世界遺産になっている交易都市を含み、砂漠の北と南を結ぶ貿易で栄えていた。最後はモロッコ軍の兵器に屈したが、その末裔がソンガイ族として今もニジェール河沿いに住んでいる。

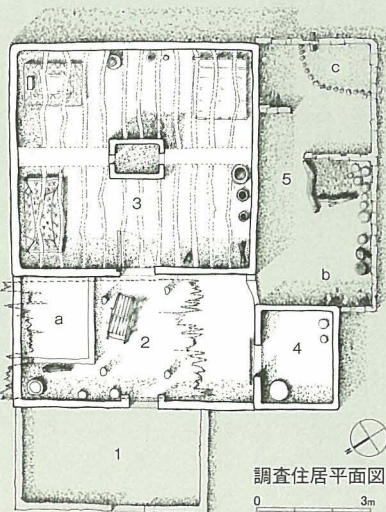
ブルキナファソ北部の町、ドリから更に六〇kmほど北に行った所にドウマン村がある。砂漠の際に位置する村で、飛砂のために景色が黄色く霞んでいる。広場を囲むようにモスクと矩形の住居が並んでいる。広場の中には壺状の大きな穀倉が幾つもある。住居はおおむね列状に並んでいるが、列と列との間隔が広く、散漫な印象の集落である。

面白いのは壁面の装飾で、外壁にレリーフを施している。顔料や泥で絵や模様を描いている住居は時おり見かけるが、この集落のものは、手で色土を丹念に盛り上げてレリーフ状にしてある。波紋などの単純な幾何学模様が多いが、なかには鳥や人間のシルエットやアルファベットの文字などもある。この紋様は外壁面だけでなく、内壁面にも描かれている。

住居の平面形が特徴的で、前面に低い囲いをもつ前庭的な屋外空間がある。入口を入るとパーゴラをもつ半屋外の前室があり、その奥に主屋がある。主屋の中央に泥で固めた太い柱があり、この柱が大梁を支え、それに小梁が密に架けられている。その上に小枝を敷き詰め、土を載せて屋根にしている。柱の周囲には幾つかのベッドと小さい穀倉が置かれ寝室になっているが、半屋外の空間にもダブルベッドサイズの土壇があり、寝所や食事の場所として使われている。半屋外の空間に付属して小さい厨房とカマド、水浴び場、トイレなどのユーティリティがある。

前後三層に明確に領域区分された住居には、農業や牧畜を生業とする集落にありがちな有機的な組成とは異なる幾何学があり、都市的な雰囲気がある。これはかつての大帝国の都市文化の残照であろうか。

(ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所教授)



調査住居平面図

- | | | |
|------|-----------|--------|
| 1 前庭 | 4 厨房 | a 土壇 |
| 2 前室 | 5 ユーティリティ | b カマド |
| 3 主屋 | | c 水浴び場 |



主屋の真ん中にある太い柱に大梁が架かっている。



集落配置図

- | |
|--------|
| 1 調査住居 |
| 2 モスク |
| 3 穀倉 |

nLDKもわるくない

今日の間取りの定型といえる「nLDK」を見直そうとする提案は、住宅・建築界において多様な展開をみせている。本特集では、このような「脱nLDK論」そのものを祖上にのせて、じっくりと考えてみたい。

最初にnLDKを定義しなければならぬが、しかし、この言葉は多様に使われている。そこで、まずは、住宅の近代史を簡単にたどってみよう。

個室の概念がない前近代の住まい

戦前の民家や下級武士の住宅には、個室の概念はみられない(図1)。これら住宅を「個人と家族」の場という現代の視点で解釈することはできない。たとえば、「表と裏」あるいは「前と奥」という別の視点が重要になる。

「表」とは、客を招き入れるなど家の社会性を担う場という意味だ。これに対して、「裏」は家族や使用人の場を意味し、時には、イエの象徴としての先祖の空間を含む。もう一つの「前と奥」は、空間の序列を示している。廊下がなく、襖や障子で部屋が続く構成では、入口から奥へ進むほど部屋の通りぬけがなく安定する。言い換えれば、空間の序列が高まる。そして、重要な客は、「どうぞ、奥へお上がり下さい」と、奥の部屋に通すのが作法だ。

これら二つの視点を組み合わせると、昔の住まいを理解しやすくなる。たとえば、「表」かつ「奥」には、重要な客をもてなす座敷が位置づく。一方、「裏」の空間はどうだろうか。その「奥」には、農家であればナンド(若夫婦の寝室)が位置している。

これら空間構成の背景には、家長を中心とし、女や子どもは自立した権利をもたないとされた封建的な社会構造があったことは想像に難くない。

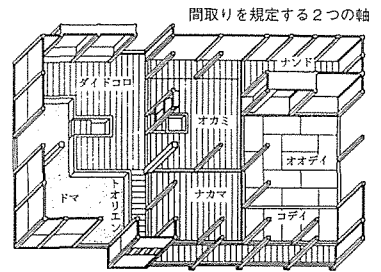
「公と私」を分離した住宅の登場と普及

大正デモクラシーの時代になると、アメリカ帰りの知識人等により、女や子どももプライベートのある個室をもつべきだという主張が登場した。これを具体化した提案が、居間中心型と呼ばれる住宅だ。当時台頭しつつあった役人、銀行家、企業の管理職などの中流階級を意識したもので、家族が集まる居間を中心に配置し、各人の個室を確保した構成であった(図2)。また並行して、中廊下の発生による「前と奥」の序列の希薄化もみられた。

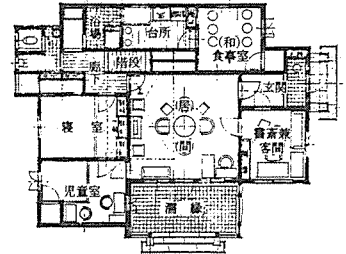
第二次大戦の勃発により、このような風潮は一旦途絶える。戦後は、狭小住宅からの再出発となった。一九五一年には、最小限の面積で「食寝分離」と「就寝分離」を同時に満たす51C型が提案された(図3)。そして、一九五五年発足の住宅公団は、DKにステンレス流し台や椅子式生活を導入し、そこを近代的な空間の象徴に仕立てた。DKプランとそれら住戸が集合する団地は、団地族という言葉とともに世間の主婦のあこがれの的となり、その後、一戸建住宅においてもDKが普及していった。

高度経済成長が進展すると、受験戦争の始まり、戸建住宅の二階化、住宅面積の拡大を背景として子ども部屋が一般化する。さらに、一九六〇年代には、テレビの普及とともに洋室の居間を確保する間取りが増えていった。

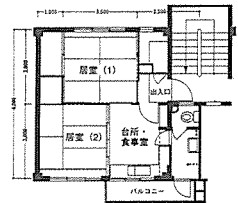
このような流れを受けて、「公私分離」という言葉が使われるようになる。つまり、家族成員の私室を確保しつつ、これとは分離して、家族が集まる居間(公室)を確保する間取りだ。これを、ここでは「公私室型住宅」と呼ぶことにする(図4、5)。



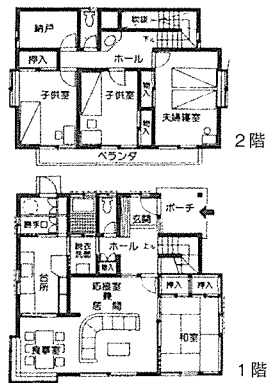
図一 東北地方の戦前の農家(窮地成朋による)



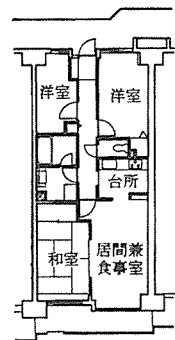
図二 居間中心型住宅の提案(1922)



図三 公営住宅51C型(1951)



図四 今日の典型的な1戸建住宅



図五 今日の典型的なマンション

以上の変遷は、産業化の進展を背景として急速に台頭した、都市の核家族サラリーマン階層にふさわしい住宅像の確立を求めたものと解釈できる。ここに至って、「表と裏」「前と奥」という構成原理に代わり、「公と私」あるいは「個人と家族」が、間取りの構成原理となった。

nLDKという呼称の定着

公私室型住宅が一般化するのには、一九七〇年代以降とみられるが、その少し前から、分譲マンションや建売住宅が隆盛となり、ここでは、間取りを3DK、3LDK、4LDKと呼ぶようになっていった。これら呼称の始まりは定かではないが、恐らく、住宅公団の標準設計において、○DK、○LDKと呼んだことが影響したとみられる。

これらの呼び名が、nLDKとして総称されるようになったのは、さらに後とみられるが、不動産業を通じての呼称の定着は、一方で、もっぱらnの部屋数を競う風潮につながった。ここでは、nは私室を表すのではなく、LDK以外の単なる部屋数を示すにすぎず、また、部屋数を増やすために、部屋サイズの切り詰めを招くという弊害も指摘された。

地方都市における続き間座敷の根強さ

一九七〇年代末から八〇年代になると、高度経済成長の終焉を受けて、住宅の近代化を見直す動きが顕在化する。

まず、大都市を離れて、地方の一戸建住宅をみると、新築住宅においても

「続き間座敷」が根強いことが知られるようになった。それらは、前述した「表」や「奥」の空間が、地方の三世代家族を中心に、依然として重要であることを示唆していた。

また、大都市においても、住宅面積のさらなる拡大を受けて、接客やハレの機能を住宅に取り込もうとする提案が登場した。たとえば、従来の「公室」には、家族向けと来客向けの要素が混在して使いにくいとして、両者を分ける二公室型住宅の提案がなされ、また、住宅メーカーも、ファミリーとフォーマルの二つのリビングをもつ住宅を提案した。

定着したnLDKと単身世帯の増加

一九九〇年代になると、建築家による脱nLDKの提案が話題を呼ぶ。しかし、このような二公室型から建築家の提案に至る見直しの動きとは裏腹に、実社会の趨勢をみると、nLDKで表記できる住宅がますます強固に定着している。

ところが、近年、別の観点から見直しが主張されるようになる。それは、これまで産業社会を支えてきた核家族サラリーマン世帯に代わり、単身世帯が急増していることである。nLDK住宅は、都市の核家族サラリーマン世帯の住宅像として定着してきたとすれば、高齢単身者や結婚しない若者の急増は、その根底を覆すことになる。今日、そのような観点からの脱nLDK論も登場しつつある。

脱nLDK論が示唆すること

以上が、ごく簡単に住宅の近代史をたどったものである。

さて、その中で展開してきた「脱nLDK論」は、単に間取りの議論にとどまらない。社会の変化の中で、家族や住宅がどう位置づけられ、今後どう展開していくのかという関心を共有している。それらを整理する切り口として、ここでは三つ指摘したい。

①nLDKの定義は空間か家族か

前述した近代史を踏まえると、nLDKは、二つの立場から定義できる。一つは、不動産業にみるように、n個の部屋とLDKからなる間取りと定義することだ。このように空間形態だけに着目する立場から見ると、nLDK住宅はとくに問題にはならない。ここでは多様な住み方ができ、単身者n人がシェアして住んでも似合う間取りだからだ。問題になるとすれば、むしろ、住宅の規模や部屋数競争のような不動産市場のあり方、あるいは、部屋の大さや部屋を仕切る壁の可変性などの設計面だろう。

もう一つの立場は、nLDKを「公私室型住宅」と定義するものだ。つまり、nLDK住宅とは、家族成員の個室と家族が集まるLDKを分離・確立した間取りだ。このように定義すると、議論は、住空間の背景にある家族像に及ぶ。さらに、核家族サラリーマンそのものの盛衰を問いつつ社会問題にまで広がっていく。

②伸びゆく少数例か、単なる特殊例か

私を含めて学者や建築家は、社会の先端的な事象を解明したい、あるいは先端を生み出したいと思う癖がある。凡庸な多数例、退屈な一般解よりは、少数の目立った事例、あるいは先進的な住宅を指そうとする。

しかし、その場合、少数例・先進例は、これからの趨勢になりうる伸びゆく少数例なのだろうか、それとも、単なる特殊例にすぎないのだろうか。鈴木成文先生は、その見極めが重要だと指摘している。確かに、「家族はもはや解体している」と言うとき、マスコミが取り上げる特殊例に惑わされていいだろうか。家族の実態は、私たちの想像以上に保守的かもしれない。

③実態か規範か

nLDKは、住み手の実態を反映した空間なのだろうか、それとも、こうあるべきという家族の規範を表現した空間なのだろうか。

3LDKが想定する標準的な暮らしは、夫婦寝室と子ども部屋二つ、それにLDKだ。しかし、今や、子どもを二人もつ核家族は標準とはいえない。子ども無し、あるいは子ども一人の世帯も多く、また単身世帯も増えている。それだから、nLDKを見直すべきだ、という意見にも一理ある。しかし、ここで疑問が生じよう。住宅は、そもそも住み手の実態を反映するものなのかという根本的な問いだ。

住宅は、一度建設されると三〇年、時には一〇〇年近く長持ちする。それに対して、家族は、子どもの成長とともに変化する、あるいは時代によって変化する。時間のスパンがそもそも違う。とすれば、nLDKが示すのは、住み手の「実態」ではなく、家族はこうありたいという「規範」ではないだろうか。たとえば、一夫一妻制に基づき、子どもを平均二人もてば人口は持続可能だ。そこから暗黙の規範が導かれることもあるだろう。さらに、家族の心に踏み込めば、夫婦仲良く寝室を共有したいし、皆が集う居間が大切だと思おうだろう。

つまり、nLDKは、目指すべき規範として、あるいは人びとの憧れとして存在するのかもしれない。そのために、単身者であっても3LDKを購入しようとする現象が起きるのだろう。そして、規範と実態とのズレは住みこなしのいけばよい。単身者によるルームシェアの増加も、nLDKの住みこなしの一例だ。

いずれにしても、多くの論者による説得力ある脱nLDK論とは裏腹に、nLDKの間取りは今日ますます隆盛だ。隆盛であることの意味を前向きに考えてみることも必要だろう。「nLDKもわるくない」のである。

小林秀樹／こはやし・ひでき

千葉大学工学部都市環境システム学科教授。

本誌編集委員長。略歴は7頁参照。



北浦 かほる / きたうら・かほる

帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科教授

大阪市立大学住居学科卒業。倉敷建築研究所（現・浦辺設計）を経て、大阪市立大学へ。助手、講師、助教授を経て、一九九五年より教授。二〇〇四年より現職。大阪市立大学名誉教授。学術博士。専門領域は居住空間学・環境心理学。空間が子ども、特に幼児に与える影響に興味があり、環境心理学的視点から子どもと空間の関係を捉えてきた。

著書に『インテリアの発想』（彰国社）、『インテリアの地震対策』（リパティ書房）、『夜間保育所の保育環境整備に向けて』（夜間保育所連盟）、『台所空間学事典―女性たちが手にしてきた台所とそゆくえ』（彰国社）、『世界の子ども部屋』（井上書院）、『住まいの事典』（共編著・朝倉書店）、『私たちの住居学』（共著・理工学社）などがある。



祐成 保志 / すけなり・やすし

信州大学人文学部准教授

一九九七年、東京大学文学部卒業。二〇〇五年、同大学院人文社会学系研究科博士課程修了。日本学術振興会特別研究員 札幌学院大学社会情報学部助教授などを経て、二〇〇七年より現職。専攻は文化社会学。

現在の研究課題は、近現代日本における住居の社会的構成とその変容。メディア論や福祉社会学論にも関心をもっている。著書に、『住宅』の歴史社会学―日常生活をめぐる啓蒙・動員・産業化』（新曜社）、『文化の社会学』（有斐閣、共著）、『福祉社会の価値意識』（東京大学出版会、共著）などがある。



小林 秀樹 / こばやし・ひでき

司会 〓

千葉大学工学部都市環境システム学科教授

一九七七年、東京大学工学部建築学科卒業。設計事務所勤務を経て、八五年、同大学院博士課程修了。八七年、建設省建築研究所に入所。国土交通省国土技術政策総合研究所を経て現職。スケルトン定借（つくば方式）マンションの開発と実践で、九六年、日本不動産学会業績賞、九八年、都市住宅学会賞論文賞を受賞。著書に、『集住のなわばり学』（彰国社）、『新・集合住宅の時代』（NHK出版）、『スケルトン定借の理論と実践』（共著、学芸出版社）などがある。本誌編集委員長。

特集 ● nLDKもわるくない……

家族のあり方と

nLDK

最近、nLDK論議が再び活発になってきています。ここでは、nLDKを「n個の個室とLDKによって構成される間取り」とひとまず規定しておきます。これについては、過去何度か批判の対象になってきました。

最初に見直しが話題になったのは、地方都市で続き間座敷が根強くあることに触発されて、住宅が接客とか対社会的な場を失っているのではないかと、いう批判だったと思います。

二番目は、一九八〇年代の後半で、子どもの閉じこもりとか非行は、子ども部屋、すなわち個室が問題であるという議論がありました。

三番目は、一九九〇年代で、おもに建築家から脱nLDKの提案が盛んに出されました。「保田窪団地」、「ハイタウン北方」等で、「個室群住居」という考え方も話題になりました。

四番目は、社会学者がそれらに関心をもって議論が始まったことで、建築家・山本理顕さんと上野千鶴子先生の間論争が記憶に新しいところです。

そして、五番目が、2DKの原型とされている公営51C型を提案された鈴木成文先生を引き込んだ論争で、歴史的な経過を踏まえつつnLDKの位置づけを明らかにしようとしているのが、最近の流れだと思えます。

ここでは、nLDK批判がほぼ出そろっているという認識のもとに、nLDK批判そのものを組上にのせてみたいと思います。家族のあり方、社会のあり方からもう一回原点に戻ってnLDKを考えてみようという趣旨です。

(小林秀樹)

子ども部屋の国際比較で見えてきたこと

北浦 かほる

日本において日本の子ども部屋を見ると、あまり問題を感じにくいのですが、外国の子ども部屋と比べてみると、その位置づけや使い方の違いが大きく、問題のあることが見えてきます。

日本における子ども部屋の成立と変遷

日本の子ども部屋は、大正モダニズムの時代に、生活改良思潮から、台所改善とか、主婦や子どもの地位向上が話題になったとき、「児童室」とか「小供室」という表現で当時の図面に出てきます。陽当たりとか衛生的に健康な部屋という趣旨から、子ども本位の住宅ということが建築ジャーナルに取り上げられ始めたのがスタートです。

それが戦後の民主主義教育のなかで庶民層に普及、浸透していくわけです。一〇坪とか一二坪ぐらいの小住宅で、子ども室がとられていました。当時は、子どもが非行にならないために子ども室は必須のものと考えられ、そうした研究がたくさんありました。

高度経済成長の歪みが出始めた七〇年代の後半から、家庭内暴力児とか登校拒否児とかが社会問題化し始めます。『子ども白書80』で、子ども部屋が非行の温床になっており、夜型の子どものつくつていとされました。子ども部屋はドアではなくて襖や障子がいい、子どもに個室は要らない、仕切りのない家から家族の対話が始まる、などと、個室の子ども部屋批判が広まっていったという状況があります。

個室は家族のコミュニケーションを阻害し、部屋への閉じこもりを促すと

して、個室批判が強められました。しかし、現実には子ども室の所有率は八割前後と高く、それは勉強部屋と認識されてきたからでもあるのです。

ちょうどそのころにEDRA（環境心理学会）で、アメリカの研究者と子ども部屋について話し合う機会を得たことで、住総研から研究助成金をいただいた、国際的な比較調査する糸口になったのです。

アメリカでは、経済的に可能なら、子どもが生まれたときから個室を与えるのが基本です。もちろん、寝室ですから、子どもでも異性は別室です。夫婦寝室が中心で、子ども部屋は屋根裏という位置づけです。最もいい部屋が子ども部屋になるという日本の勉強部屋の概念とは違うということがわかりました。

子ども部屋を、物理的空間の問題としてだけでなく、親子関係の問題をはじめ子ども部屋に関わるあらゆる要因、生活行為や社会化など空間にかかわる精神面の問題も含めた総合的視点で検討してみようという計画で比較研究をスタートしました。

親の養育態度の違い

いちばん印象的だったのが、親の養育態度の違いです。母親の入室頻度が低いのはアメリカとかドイツで、日本、中国、ベルギーは非常に高い。特に日本は、子どもがいらないときに入って掃除をしたり、寝具の整理をしたり、衣類の収納をしたりしますが、ベルギーでは、子どもがいるときにも積極的に子どもに話しかけるために入っていく。人生について話すとか、遊ぶとか、おやすみの挨拶をするためとか、母親が積極的に入室するのがベルギーの特徴です。子どもを大事にする点で日本とベルギーは非常によく似ていますが、ベルギーでは子どもは大らかに育っていると感じられます。

中国（図一）

中国は一人っ子政策で、子どもは両親と祖父祖母の六つのポケットをもち、「小皇帝」と呼ばれているように、自己中心的で依存的傾向があり、かなり甘やかされています。立派な子ども部屋で、母親の入室頻度が高く、母親は子

どもの机とカバンを管理して勉強をさせています。半数が、叱るときに子どもを殴ったり、

カバンを調べたり、友だち選びに干渉したりしている。ほとんどが核家族で、

九・五割が高層の集合住宅に住んでいるという状況でした。

アメリカ（図二）

アメリカでは、予備調査をマンハッタンとダブスベリーというマンハッタンから一時間ぐらいの町で行ない、本調査をミシガンでやりました。中国ではほとんど親が子ども室を管理していたのに比べ、アメリカでは子ども自身によ

図一 中国の子ども部屋の例



女の子の専有室



中国の幼児の部屋(1978年から一人っ子政策)



都心では戸建てはなく9.5割が高層の集合住宅(ハルビン)



黒龍江 ハルビンの小学校で



パソコンがあり、勉強部屋になっている中国の男子の専有の寝室



小皇帝というイメージのする男子の専有室

る管理が徹底していました。子どもにも部屋を貸し与えており、親が必要になったときはそれを取り戻して、客用のベッドルームにしたりしている。親の権威が強く、不満があっても子どもは親の言うとおりにするという状況がありました。また、親も子ども過剰防衛の意識が強く、責任が問われるから絶対非を認めないという状況が見られました。

子どもを叱るとき、日本は、子どもに「家から出ていきなさい」といって追い出しているのに対し、アメリカでは「子ども室に閉じ込める」。また、空間の使い方が意思を表している、扉が開いているときは入ってもいい、閉めているときは入室を拒絶していることを表わしています。

養育態度の社会的な一致と多様性がアメリカでは明確にみられました。「自己主張できるように」という目標と、そのためには「ほめて自信を持たせる」という養育態度が、どの親でもほぼ百パーセント一致しています。「なんて素晴らしい子なの」といって自分の子どもをすごくほめる。自己主張できるようにするために、ほめて自信を持たせて自尊心を養っている。

もう一つ、「ルールに基づいた躰」も一致している養育態度です。でもルールの内容はその家庭独自のものです、非常に多様になっているというのが特徴です。たとえば門限の時刻など家によってさまざまです。

幼児期の躰もずいぶん違っています。自己主張に向けての意思表示の躰が重視されています。それから、マナーとかリーダーシップを養う躰も幼児期にされている。日本では幼児期は、身辺自立の躰なのです。

そういうことが空間の使い方にも反映されています。アメリカの子ども室を見ていると、その部屋にいる子の思いが伝わってくるというか、屋根裏の斜めの天井に好きなポスターを隙間なく貼りつめたりして、その空間の中で自己表現をいっぱいしている。部屋の掃除も本人に任されています。何軒か訪問すると、床に紙くずが山のように転がっている家があります。日本だとたぶんお母さんがきれいに掃除して、「はい、どうぞ」という感じになるのだろうと思いますが、アメリカでは「紙くずだらけのところを見てください」というので見せてもらいました。だけど、「写真は撮らないでね」と拒否されまし

た(笑)。それは本人の責任だというふうに割り切っている。

ミシガンは湖があるので、キャンピングカーとボートがほとんどの家の横に置いてあります。子どもが一人なら屋根裏を全部、二人なら半分ずつにして使っているというのが一般的です。

半地下のベースメントには、子どもたちの成長の思い出にといいことでベビーベッドなどを置いている。

肖像画のような写真が玄関やリビングに飾ってあり、家族であるしるしが空間のいろいろなところに見られます。

図-2 アメリカの子ども部屋の例



アメリカでは成人年齢が早く、ある年齢以上になると一人前に扱われるようになって、親も子どもも対等にコミュニケーションをとる努力をしていることがわかります。

アメリカに対してヨーロッパはどうかと興味を湧き、ベルギーとドイツとポーランドを調べました。ヨーロッパも個人主義なのですが、アメリカとは違っていています。

ベルギー(図-3)・ドイツ(図-4)

ベルギーは、子どもをかわいがってよく世話をする点で、日本に似ていません。子どもが麻薬や非行に走ったりするのは全部親の責任だとベルギーの親は思っていて、積極的に自分から子ども部屋に話をしに行くんですね。

日本の親は、子ども部屋に入るのに後ろめたさをもっていて、子どものいないときに掃除をしに入り、机の中を見たりする。それが親子の不信感の元になって、ある年齢になると子どもは自分のプライベートを非常に問題に始める。一時期、日本で、子ども部屋に親のタンスを入れれば良いということがいわれたことがあります。親が収納物を取りに行くという口実で子ども部屋に正々堂々と入れるという理屈なんですね。そのへんがずいぶん違ってきます。

ドイツは日本と同じように、身辺の世話をしていることがコミュニケーションだという意識がある。「世話型コミュニケーション」と名付けたのですが、世話は親から一方的になりがちなので、両方からの働きかけがないと本来のコミュニケーションにはなりません。

下の写真の例(左上2点と左下)は、アントワープの都市型の低層集合住宅で、リビングルームに連続して子どもの遊び部屋をとり、反対側の小さな庭の古い木を子どもの遊び場にしていました。五歳と三歳で、異性ですけれど、一緒に部屋にしています。

また、ヨーロッパは家具の国で、新しいデザインから重厚なものまで、子ども部屋のクロゼットは必ず家具でした。アメリカは完全に造り付けで、家具が置いてあるのは少ないです。

余った一部屋を子どもたちの共有の図書室にして、そこに客用のベッドを置いていた例もありました。部屋数に余裕があるときには子どもたちは自分の寝室のほかにも部屋を持つていることがあります。

父親が新聞の国際版をつくる支配人の息子は、一人っ子で、自分の部屋を五室持つていました。まず自分のベッドルーム、その上にロフト、その隣のシャワー室、楽器や古い道具を置き子どもが自由に楽器を弾いたりできる地下のバー、そして、母親が本の装丁の仕事をしているの

図-3 ベルギーの子ども部屋の例



居間につながる子どもたちの遊び部屋



母親はコンサルで共働きのキャリアウーマン
おやすみの挨拶をしにきた居間でお父さんと



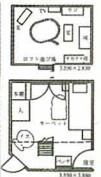
重厚な家具のある7歳の女の子の屋根裏部屋



アントワープの都市型集合住宅
平凡な3階建ての外観からはリッチな室内が想像出来ない



ベルギーの9歳(男)のロフトのついた寝室。この他に彼専用のシャワー室・アトリエ・バーの3室がある



で、母子共有の工作室兼アトリエがあって、そこに客用のベッドを置いています。合計五室が子どもが自由に使える部屋になっていたというすごい家でした。

また、感心したのは、ヨーロッパにはまだ子どもの時間帯があるということでした。夜八時半にもなると、子どもはガウンを着て寝る用意をして、おやすみの挨拶をしにくる。日本では三歳ぐらいでも一時間ぐらゐまで起きていますから、そういう意味で、日本では子どもの生活時間帯は失われてしまっています。

そしてもうひとつ、ドイツの子ども部屋では、おむつを替える場所がセッティングされていたことです。その後に私は世界の保育園の調査をやってきましたが、日本では、保育園でさえおむつを替える場所がちゃんと設定されています。ベッドで替えています。物や装備で機能づけされている西洋の空間の本質を見た思いがしました。

ポーランド(図15)

ポーランドは、一九八九年に社会主義政権に終止符を打ったということで、日本の戦後のように住宅事情が悪く、二部授業で宿題も重視されていて大変な状況でしたが、親子の仲が良くてうまくいっていました。暮らしの豊かさは、空間の広さでも経済の豊かさでもないのだ、という思いを強くしました。狭い空間を利用するために、壁一面を造り付けの棚にして、ソファアベッドを入れています。子どもは自分で空間を調べています。ある姉弟二人の部屋では、机は二つあるけれども、狭くてソファアベッドが一つしか置けない。一人はリビングのソファアで寝るといっていました。

比較的恵まれている家庭の例でも、住宅の面積が平均四〇㎡程度で、日本の戦後のちよつと落ち着いた住宅事情の時期のものに相当します。

文化の枠組みによる子どもの発達

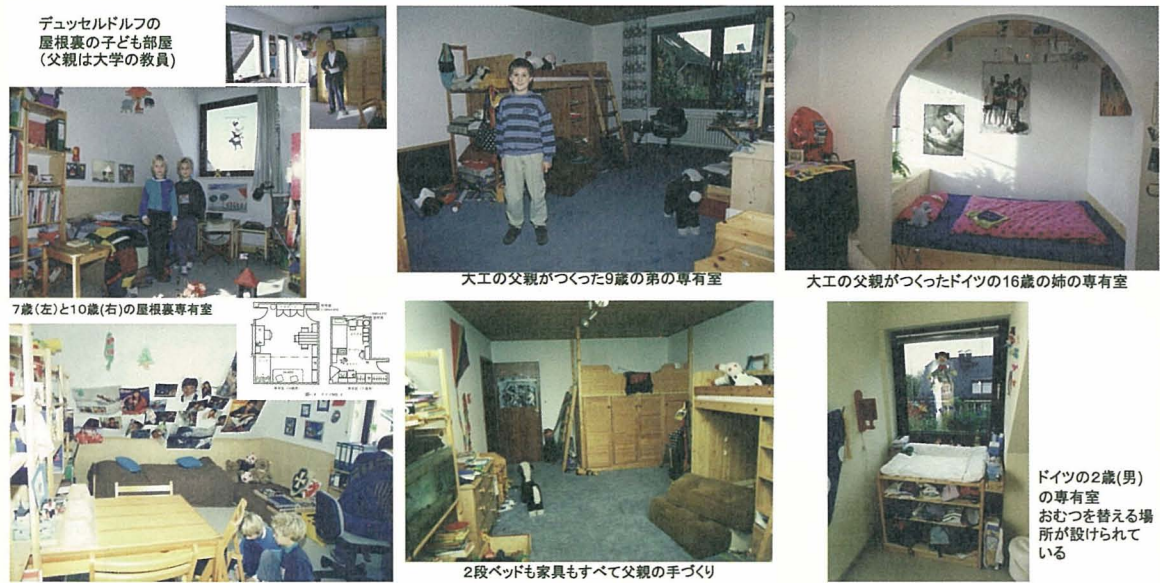
これらの比較研究のなかで言えることは、当たり前前のことですが、文化の影響を非常に強く受けていること。それが空間の使い方、家のつくり方、物

のセッティング、人の習慣、心理に組み込まれてしまっているという状況が見えてきます。叱るとききの空間の使い方、寝室の与え方、対人関係の枠組み、育て方、子どもの発達の目標というものが根本で、文化という大きな枠組みにしばられているということです。

たとえば、イギリスでは生後一年で入眠時の母子分離が達成されているのに、日本では接触下で寝かせているというように、母子分離のしかたも全く違っているということがあります(図16)。

「個人主義文化」と、日本のような

図一4 ドイツの子ども部屋の場合



デュッセルドルフの屋根裏の子ども部屋(父親は大学の教員)

大工の父親がつくった9歳の弟の専有室

大工の父親がつくったドイツの16歳の姉の専有室

7歳(左)と10歳(右)の屋根裏専有室

2段ベッドも家具もすべて父親の手づくり

ドイツの2歳(男)の専有室 おむつを替える場所が設けられている

「家族集団主義」というなかで比べてみると、親の子育て目標の違いが目立って感じられます。独立心を養って自己主張できるようにする。個の確立に向けて子どもを育てて、それを補強するために子どもをほめて自信を持たせている。個が単位であるということですので。個が単位なので、家族を結びつける努力をすごくしているということです。

個人主義の厳しさ——いろいろなことが個人の責任として問われる厳しさのなかでは、ベルギーの親子密着関係は子どもの精神的な安らぎを高め、親への信頼を深めるという意味で、子どもの精神面の安定にプラスになっています。

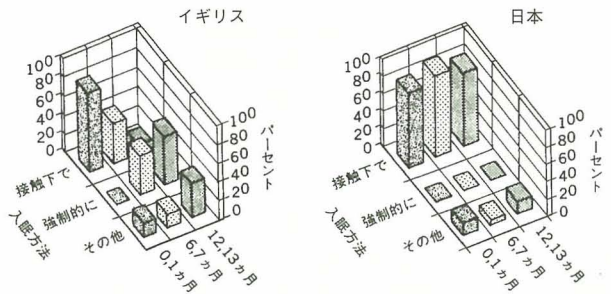
それに対して、日本の子育ての目標は曖昧で、個の確立を目指しているわけではありません。むしろ自己主張が強く他人と異なると、いじめの対象にされやすい傾向があります。日本では母子密着関係が強く、子どもの様子が見えていることで母親は安心するわけですが、それは親のほうの一方通行的な関係であって、双方向のコミュニケーションにはなっていません。また、自立が求められる環境下での親子密着関係は親への全面的なパラサイト現象を生んでいます。

それから、日本の文化の「空間機能の重層的使用」、一つの空間でいろいろなことができてしまう畳の部屋の融通性も、その傾向を助長させています。空間の機能的な使い方とはずいぶん違うわけです。

子どもの精神面の成長・発達

肉体的な成長というのは目に見えてわかるのですが、精神面の成長・発達

図—6 文化にセッティングされている空間の使い方—入眠方法



を、「自立」でとらえています。子どもの精神面、生活面、経済面の社会化としてスタートしたのですが、最終的には広義のプライバシー意識、すなわち個の確立の問題を避けて通ることができなくなりました。

日本ではプライバシーの概念は、見るとか見られないという非常に狭い範囲でいわれていますが、個の確立は、もつと大きい意味でのプライバシーの確立なのです。これはマキシン・ウルフの研究の主張ですが、「子どもの発達は、独立した自己の存在と社会的な自己の存在の獲得、す

図—5 ポーランドの子ども部屋の例



なわち自我の確立と協調性の獲得の両面が達成できるときにはじめて精神的な成長が得られる」としています。そして自己形成過程において物理空間をコントロールする経験が非常に大きい意味をもっている。具体的には、人間関係の問題を自室をうまく使うことで克服し、自我を獲得して成長していくわけです。日本の文化のなかでは、意識しないと自我の獲得は難しい。気配のわかる空間や、プライバシーが軽視されやすいこと、母子密着や川の字就寝が肯定されている状況下では、なかなか独立した自己を獲得しにくい。個の尊重が欧米では文化で守られているが、文化にも子育て目標にもなっていない日本では、子どもの精神面の成長を促すことができるのは、親の養育態度だけなのです。

社会科学の視点から池田謙一は二者間のコミュニケーションを質的に三つに分けています。①「リアリティー形成の相」と、②「説得達成の相」、③「情報環境形成の相」の三つです。①は行為の共有、②は直接会話をするということです。そういう積極的なコミュニケーションが日本には少ない。食堂の大きいテーブルのそばに家族がみんな座っている「場の共有」だけでは意味がありません。携帯に気をとられていたり、新聞を読んでいたりと、テレビを見ていたり、心は何も通じていません。コミュニケーションは二者間の交流ですから、お互いのやりとりが必要だという意味では、「行為の共有」が非常に大事です。

そういう意味で、個人主義の文化は個人が単位なので、家族といえども積極的につながらないと離散に至ってしまう。みんなで積極的に家族になる努力をしているなどというのが、子ども部屋を見ていて非常によくわかったことです。

子ども部屋とは？

親の養育態度を実現するための部屋が子ども部屋です。違った言い方をすると、子どもの精神的な成長のために、独立した自己と社会的な自己を獲得するための場所、すなわち「一人になって考える時間と空間を持てる場所」

なのです。いまは一人になっても、携帯電話がある限り一人にはなれないということがあります。

「空間は道具」であって、人が空間をどう使うかということでその空間の効力はずいぶん違ってくるし、どの文化でその空間を使うかによっても違ってくる。最終的には「子どもが悲しいときや腹が立ったときに閉じこめられる空間であること」。それは非常に小さい空間でいい。たとえば押入れだったら、二つに区切って一段だけあれば、子ども部屋になり得るということです。

子ども部屋の国際比較で見えてきたこと

養育目標をもたない日本の親

子ども部屋は親の養育態度を実現させる場であるはずなのに、部屋の扱い方が子どもの自立、成長を妨げている。日本の親は、見たり、気配のわかることで心理的に安定しているが、気配のわかる子ども部屋は子どものプライバシーを無視し、個の確立を妨げていることに気付いていない。子育ては子離れの過程である。

日本の親子の信頼関係の危うさとパラサイト現象

他方、子育ては、親子の信頼関係を強める過程でもある。ここでは「子どもの自立心を育てる」とともに「親子の絆を強く結びつける」ことが求められている。家族づくりを重視する欧米では、積極的なコミュニケーションの必要性和子どもへの自己主張のための躰が社会通念になっており、文化としても受け継がれている。日本ではそうした文化規範がなく、親子や家族員を自己と一体化してとらえる傾向がある。親子密着が子どもの自立を阻み、成人後もパラサイト現象を生んでいる。幼児期から親は子どもを一人の人間として受け止め、親子の信頼の絆を結ぶ努力をする必要がある。それには行為共有型のコミュニケーションが効果的である。

ハードとしての空間を過大評価しすぎ

空間を過大評価しすぎている。空間は単なる道具なのだから、道具の使い方が問題なのです。立派な子ども部屋がたくさんつくられていても、子ども

不在時に親が室内を掃除したり、机の中まで片付けているようでは、子ども部屋本来の意味はありません。

親は自分で考えずマニュアルを求めすぎる

家族づくりと家づくりを切り離して考えられないように、子育ての方針と子ども部屋づくりは表裏一体の関係にあります。正解や一般解はありません。自分たちはどんな子どもに育てたいのか、そのためにはどうしたいのか、考えることが最も重要です。

文化における空間の力

部屋や家など、子どもの生活する物理的、社会的セッティングには、その国の文化に規定された空間の使い方が受け継がれています。子育て慣習や養育する母親の心理や心情にもそれらは受け継がれており、子どもの精神面の成長とも大きくかかわっています。そのため、自我の確立が文化にはめ込まれておらず、子育て目標にもなっていない日本では、子どもの精神面の成長を促す文化の力は非常に乏しく、親の養育態度に委ねられています。

小林 ありがとうございます。実は私は「気配がわかる子ども部屋」はいいなと思うのですが、それはあとの議論にとっておきまして、簡単な質問を一つ。先ほど親が子ども部屋に入室するという点に関して、国際的にいろいろ違うというお話があって、非常に面白いなと思ったのですが、そうするとベルギーとかドイツの子ども部屋には鍵はないのですか？

北浦 鍵は家を建てる時に付けていたり付けてなかったりします。要はそのれを使っているか使っていないかです。日本でもそうだと思いますけれど。

小林 アメリカは鍵があつて、かつ使っていると理解すればいいのですか？

北浦 いえ、使っていません。だけど、ドアを閉めていることを入っちゃだめということになっているのですから、ノックするとかそういうことがあるということですよ。

小林 続いて祐成さんにお話しいただきます。おもしにnLDKを生んだ社会とはどんなものだったのかということを中心にお話しただけだと思います。

住空間の社会学の観点から

重装備化した住宅からの脱却を

祐成 保志

私は社会学のなかでも文化社会学と呼ばれる領域を専攻しています。そのなかで、社会学の視点から日本の近代住宅について考えてきました。私とnLDK論との直接のかかわりということでは、一九九九年、上野千鶴子先生が中心となって行なわれた熊本県営「保田窪団地」のフィールド調査に、大学院生として参加しております。ご承知のとおり、同団地は山本理顕さんが設計された、脱nLDK住宅の先駆例といわれる公共住宅です。学生、院生合わせて総勢五〇名ぐらいで、住民の皆さんや行政担当者を対象に、アンケートやインタビューを行いました。

住宅は社会学のなかであまり取り上げられてこなかったテーマですが、まったくなかったというわけではありません。とくに都市社会学では、七〇年代の末から八〇年代の初めごろにかけて注目されるようになります。この時期に森反章夫先生が発表された「住空間の戦後的変容」(似田貝香門編『都市社会と都市計画』文部省科学研究費中間報告書、一九八三年、所収)が、私が見た限りでは、「nDKモデル」、あるいは「nDKⅡ家族モデル」という言葉を社会学のなかで最初に使った論文ではないかと思えます。

森反先生はこの論文の中で、「女性身体の権力力学」「性の増殖」「L室の成立」の三点に着目されています。具体的にいうと、女性身体というのは、ダイニングキッチンと専業主婦の関係です。性というのは、この場合、夫婦と子どもの寝室を分離することです。そして、L室すなわちリビングルームの定着を、森反先生は家族の「自己監禁」という非常に重要な論点が、二五現されています。戦後家族の内閉的な性格というかなり重要な論点が、二五

年前の論文ですでに提出されているという点、これは強調しておきたいと思
います。

さらに森反先生は、「戦後住宅供給体制の成果が蓄積されるにつれて、居住
家族は、ますます（空間）装置にとりこまれる」とおっしゃっています。言い
換えると、空間の構成理念としてのnLDKと家族の住まい方あるいは感覚が
一対一に対応してくる。こうして戦後日本に登場した特異な家族の姿が「n
DKⅡ家族モデル」であるというわけです。その後、「神戸市住宅政策の分析」
（蓮見・似田貝・矢澤編『都市政策と地域形成』東京大学出版会、一九九〇年、所収）では、
具体的なデータをもとに、都市の住宅政策がnDKⅡ家族モデルを前提にし
てつくられて、家族がそれにどう対応しているのかを分析しておられます。

脱nLDK論の問題提起

そういう前提をお話ししたうえで、今回の主題である脱nLDK論ですが、
まず九〇年代前半から、上野千鶴子先生の住宅論が、山本理顕さんとの共同
作業のなかで生み出されてきます。それらをまとめたものが二〇〇二年の
『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』（平凡社）という本です。そして、二
〇〇四年に鈴木成文先生も加わられて、大規模なシンポジウムが行なわれま
した。のちに『51C』家族を容れるハコの戦後と現在』（平凡社）という本に
なっています。さらに、工学院大学で開催された連続シンポジウムにも上野
先生と西川祐子先生が参加されて、『私たちが住みたい都市』（平凡社）とい
う本になっています。

上野先生は、マンションであろうが、一戸建てであろうが、注文住宅であ
ろうが、建売住宅であろうが、結局nLDKの規格、バリエーションの範囲
に納まってしまっている、つまり、「個室空間＋家族全員のためのコンノー
ム」という間取りが定番になっている現状を指摘したうえで、その前提が崩
壊しつつあると主張されます。住宅のコンセプトが変わらないうちに、その
中に住む家族はとっくに変わってしまっている。もはやnLDKは「現実に
合わないモデル」、「形骸化したモデル」である、というわけです。

上野先生は、この主張の根拠を四点ほど挙げておられます。第一に、nL
DKの前提には夫婦は一体という規範がある。夫婦は同じ部屋に寝るので、
個室の数は家族人数マイナス1でいい。これが理念であるはずだけれども、
実態は違う。そこで、n+1、つまり家族人数分の個室をつくることを提唱
されます。

第二に、高学歴・高経済階層の既婚女性のライフスタイルが、もはや家庭
志向ではなく自分志向になってきている。専業主婦で仕事を外でしていない
場合でも、情報機器を備えた「ラボ」のような個室を通じて独自のネットワ
ークとつながっていく。そういう家族のあり方にとって、nLDKモデルは
合っていないのではないかとことです。

第三に、家族というのは安全な場所に見えてじつは危険な場所、場合によ
っては無法地帯なのではないか。従来は理念によってこの現実が隠蔽されて
いた。しかし、抑えきれない力が漏れてくる。それが九〇年代に表面化して
きたドメスティック・バイオレンスとか幼児虐待のような「家族の病理」で
はないか。密室のようになった家族を社会に向けて開こうとするときに、n
LDKという住宅のあり方は足かせになるといわれています。

第四に、現代の家族は、いざれ座礁が運命づけられた「積みすぎた箱船」
ではないか。住宅には、そうした無理を覆い隠してしまうような性質がある。
その一つが介護の問題。もはや介護というのは私領域の内部で完結できない。
九〇年代というのは、その意味でも家族の危機の時代だったのではないかと。
高齢化が進む団地での孤独死の問題などもこれにつながってくると思います。

脱nLDK論の核心

以上要約したような脱nLDK論の問題提起のなかで、何が中心なのでし
ょうか。ちよつと距離をとって考えてみます。上野先生は、「もはや家族はn
LDKを超えつつあるので、その現実に合ったモデルをつくるべきだ」と主
張されているように見える。もちろんそう読むこともできるわけですが、実
はその裏に、いまだ家族がnLDKに囚われていることへの批判というか憤

りがあるのではないか。建築家の方々の議論のなかでは、「超えつつある」という側面が強調されていたように思うのですが、上野先生が書かれているほかのものも見てみると、「囚われている」という側面のほうが核心であるように思えます。そもそも、四つの根拠のうち、前の二つと後の二つは

かなり性質が違います。私は後の方が大事なものではないかと考えています。山本理顕さんも、「nLDKにとって本当に革命的だったのは、住戸の内側の問題ではない」とおっしゃっています。住宅を一つのユニットにする。それを鉄の扉一枚で外側から隔離し、プライバシーの概念を植え付けていくこと。これはさっきの森反先生の指摘ともつながる部分だと思っておりますけれども、鉄の扉の内側につくられたnLDKという空間の中に家族という単位がすっぽり納まってしまふ。つまり、隔離された家族のあり方と密閉性の高い

住宅が強い親和性をもっていることこそが問題であるというわけです。さらに、山本さんはこんな指摘もされています。「家族のための専用住宅というビルディングタイプは、もともとはイギリスやフランスで労働者のためにつくられた」。専用住宅は労働者自身にとって快適な住まいだったはずですが、一方で、社会を安定化させるためにたいへん有効なシステムであった。家族単位で住まわせて、その内側のさまざまな問題を彼ら自身に解決させる。そういう、いわば社会を運営する側にとつて効率のいいシステムとして、専用住宅というものが二〇世紀の世界において広がっていったのではないかと、ここで展開されているのは、権力によって仕組まれた囚われの状態というのがあって、その呪縛から解放するために新たな住宅像を提示しなければならぬ、という論理です。これこそが脱nLDK論の核心だったのではないかと。そのように見ると、脱nLDK論は、理想的な社会の状態というものを明示的でないにしても想定して、それを実現するためにはどういう住宅が必要か、という問題の立て方をしていくわけです。つまり、「多くの家族がnLDKを脱しつつある」という現実をベースにしているというよりは、「nLDKから脱出せねばならない」という、理念的で規範的な議論だったのではないかと思えます。

建築家の役割

上野先生の発言で目を引くのは、建築家に対する厳しい追及です。「標準世帯に当てはまらない家族というのが増えてきている。しかし、なぜモデルが半世紀も変わらないのか。それは建築家の怠慢ではないか」、あるいは、「nLDKの呪縛を解くのは建築家の責任である」とおっしゃっている。こうした姿勢は、建築家への大きな期待感の表われともいえるでしょう。

実際、建築家に新しい住宅の規格あるいはモデルを考案することを要望されています。すなわち、①住宅のモデルの多様化、住み手にとつての選択肢の多様化を図る。②選択肢を複数含み、家族縮小期に対応し得る、汎用性が高いモデルをつくる。③生産的なアクティビティの空間（ラボ機能）を組み込む。④育児、介護の社会的機能を組み込んだコモンの空間と組み合わせる。これらの条件を満たすものがこれからの社会にふさわしい住宅であるというわけです。

一方で、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』に収録された隈研吾さんとの対談を読みますと、隈さんがかなり批判的なことをおっしゃっています。「住都公団がスタートした時代というものは、まさにスタンダードとかマスというものが現実にも存在して」いた。そういう条件のもとで、公的な主体が大衆に向けてモデルを提供していた。「建築家のメンタリティというのはいまだにその時代のところにとどまっています、nLDKは今や過去の規範だから、これからは個室群が規範であるという考え方をしましょう」。つまり、公的な主体が新しい規範を社会に広めていかなければならないという考え方が旧態依然ではないかと。

住宅のデザインだけではなくて、建築家がモデルを示すという手法自体も問い直すべきではないか、という指摘に対して、上野先生ははっきりとお答えになっていない。本当はここが大事なところなのではないかと私は考えています。

nLDKの六つの水準——どこに焦点をあてるのか

さて、「nLDK」と一言でいうと、いろいろなものが含まれてしまう。それぞれの論者が違う水準を想定している場合、同じ「nLDK」という言葉を使いながら話がかみ合わない。nLDK批判には、少なくとも、六つぐらいの水準の議論が交ざっている。それらを一度分けたほうがいいのではないかと考えました。

一つ目は「平面形式」。平面のあり方、間取りです。

二つ目が「型計画」。先ほどから出ている家族構成と住宅形式の対応関係。家族構成が変わると、住み替えをしていく、あるいは増改築をしていくというふうなあり方です。技術的にはこれは「型計画」というふうに呼ばれるものかと思えます。

三つ目が「閉鎖性」。パッケージ化された住戸。先ほどの「隔離された家族」という論点と対応しています。

四つ目が「私的所有」。世帯ごとに所有する、あるいは世代ごとに所有する。そこにいろいろな法律とか金融の技術が絡んできます。

五つ目が「都市構造」。職住が分離されるなかで、居住という機能に特化されたニュータウンのような空間が現われる。そこにはジェンダーもかわってきて、昼間は男性がいなくて女性と子どもしかいないようなニュータウンのようなものが批判されるわけです。

六つ目が「権力様式」。これがいちばん抽象的なのですからけれども、国家とか企業というのは、住宅という資源の分配を通じて、国民とか従業員の身体を管理している。

こういういろいろなレベルがあるnLDKのうち、いったいどこを変えれば「脱nLDK」と呼べるのか、ということを考えてみる必要があるのではないかと思います。つまり、どの水準に焦点を当てるかで脱nLDKの意味が変わってくる。一つ目の平面の話だけでしたら非常に単純なのですが、事はそう単純ではない。あるいは、それだけで終わるなら、社会学的に議論す

る意味はそれほど大きくないと思うのです。

一つ目の「平面形式」。これはある意味で使い方次第という面がある。間取りがどうなっているか、実際にどのように使うかは住んでいる人次第です。ただし、間取りの影響を受けやすい人と、それをねかえす力をもつ人の違いには注意する必要があります。

二つ目の「型計画」。もともと、どの規模の住宅をどの時期にどの程度供給しなければいけないかというのを計画するための供給者側の論理から生まれた技術だったと思うのですが、実際の住宅市場のなかですでに対応関係は崩れてしまっている。たとえば家族用としてつくられた住戸が老朽化して相対的に家賃が安くなれば単身者の方も住めるわけです。

三つ目の「閉鎖性」。私はこれを中心に考えてみたいと思うのですが、鉄の扉、コンクリートの壁、広くとられた住棟の間隔、便所、台所、風呂といった設備を個別に付けることで生活の秘匿性が高まる。家電製品や自動車普及して、家事、娯楽、移動が世帯単位で行なわれるようになってくる。家族の生活の閉鎖性というのは、住宅そのものというより、住宅を含む耐久消費財がどうやって生産され、消費されているか。その背後にある私生活を中心とする生活の広がりというものを見なければいけないのではないかなと思います。住宅というのはその結果というふうに見ることもできるわけです。

四つ目の「私的所有」に関しては、各世帯が細分化された空間を長期的に占有していく。そのなかで長期雇用とか年功賃金を前提とする労働者の財産形成の核として住宅が商品化されていく。そこには公的な住宅金融とか年金とか生命保険といったいろいろな技術がかかわってくる。これも住宅個々のレベルの問題ではなくて、社会のシステムの問題ではないか。そのなかで、住宅の経済への組み込まれ方がさらに深まっている面もある。

五つ目の「都市構造」。「ベッドタウン」という言葉に代表されるような居住専用の空間が普遍化すると、住宅の質や価値が、広さと都心からの距離によって決まってしまう。このへんもかなり根深い構造があるのではないかと思います。

六つ目「権力様式」という点でみると、近代の国家は、基礎単位が近代家族、核家族である。その核家族の器として住宅がつくられていく。それは国民に住む場所を与えて、休養させて体力を回復する。そして子どもを養育させる。二つの側面で労働力を安定的に再生産させるといふ側面があるわけである。近代の権力は、それ以前のように、何かがあると見せしめに処刑するといふふうな死の恐怖を媒介にした権力ではなくて、「生きさせる権力」である。つまり、労働力の再生産機能さえ担っていれば、国家は住宅内部のことには干渉しない。国家を企業に替えてもいいわけです。住宅のようなものも同じような構造をもっています。

住宅を階層化して、ある時期は住宅、ある時期は公団住宅、そのあとは持ち家といふふうな上昇志向をあり、それが勤労意欲を支える。このようなシステムのなかで住宅というものが商品として、あるいは政策的に供給されてきました。もつとも、現在のグローバル資本主義は、そういう遠回りともいえるやり方を破棄しようとしているのかもしれませんが。

たとえば全国から人を集めて工場に送りこむ人材派遣会社は、3LDKの部屋を寮として使うことが多いのですが、そこでは出身地も背景もまったく違う人たちが生活をしています。彼らは日勤と夜勤のシフトもあって生活時間がずれている。共同生活というよりは最低限のかかわりしかないわけです。そうなると、「脱nLDK」という場合、「脱出する」という方向だけではなくて、「脱落する」という方向についても考えなければいけないのではないかと。一家族3LDKにありつけるだけでもありがたいという現実もあるわけです。そういったものを脱nLDK論でどうやって受けとめていくのか。

nLDKの由来——社会史的素描

ところで、nLDKの六つの水準にはそれぞれ歴史があります。たとえば「平面」については、住宅改善の機運のなかで、大正時代に間取りが重要であるという議論がなされる。「型計画」は、一九三〇年代から四〇年代にかけて、

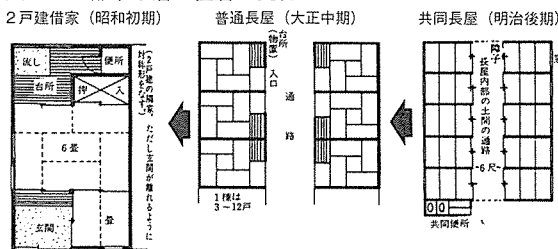
総力戦体制のなかでつくられてきた考え方です。ここでは時間も限られてい

ますので、三つ目の「閉鎖性」を中心に見ていきたいと思います。社会学と経済学がオーバーラップする領域に「生活構造論」という分野があるのですが、その第一人者である中川清先生が、非常に印象的なことを述べられています。東京に暮らす貧困層の生活史を見てみると、大正のころまでは家の前にいろいろな炊事道具を置いていたのが、昭和になってくるとあまり置かないようになる。いま月島に行ったらあるような、植木鉢だけを玄関先の外部通路との間に置く。「植木鉢で柔らかく公的な空間を遮断して、住居の奥を形成していく、内部空間を形成していく」(下層からの都市イメージ」文化科学高等研究院編『都市・空間・建築の根拠をさぐる』飛鳥建設開発事業部、一九九一年、所収)。

それを図示されています(図一)。明治時代には、「共同長屋」と呼ばれる形式で、内側の廊下を挟んで住戸があり、各部屋は三畳しかないわけです。その三畳の中にならずしも一世帯というわけではなくて、何家族も住んでいる。それが大正期になると、「普通長屋」といって、通路が建物の外部に出てくる。ただし、ここでも炊事道具などは入口側にある。台所は家の前の方にあるのです。それが昭和に入ると、かなり貧困層が住んでいる借家であっても、台所は奥のほうに引っ込んできて、各住戸に便所が付いてくる。同じ時期に家計、すなわちお金の使い方もかなり違ってきます。

少し時代が進み、一九六五(昭和四〇)年に出版された『日本住宅公団一〇年史』のなかでは、3Kという間取りについて解説されています。本当は公団としては3DKにしたかったのだけれども、コストの面でできなかったため、3Kという形にしたといいます。

図一 都市下層の住居の変化



文化科学高等研究院編『都市・空間・建築の根拠をさぐる』より。

これはもともとどのようなものだったかという、公団が発足して三年目である一九五七年の平面図では、約一五坪の中に居室が三つあって、真ん中に台所。台所の左側の部屋との間に流しがあります。その右端に「居室(3)」と書いてありますが、この部屋はかなり独立性が高いので、「1余室」と呼んだうえで、ここには「異分子が収容される」という言い方をしています。異分子とは面白い表現ですが、「老人や青年期に近づいた子ども」のことを指しています(図-2)。

図-2 公団標準設計3K(当初)

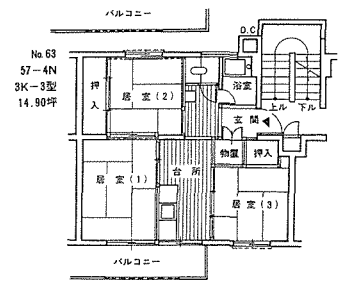
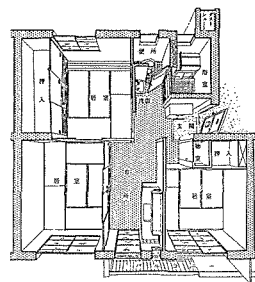


図-2、3とも、『日本住宅公団10年史』による。

これをちょっと改良したプランになると、流しが右側に移動している。そうなる、台所と居室の関係が変わる。左側の「居室(1)」となっていたものと台所が一体化し始めるというのです。公団の文章をそのまま引用してみます。「ダイニングキッチンを一まわり大きくしたりリビングルームに台所を一緒にしたような形で使われることが出来るようになった。事実、この6畳に洋風の応接セットやテレビやステレオが持込まれ、その用途は寝室としてよりもむしろ居間としての使われ方で固定しているような住い方がかなり多く見受けられるようになった」。当初想定していた使い方とすこし違ったものが居住者自身によってつくられてきたということがある種の驚きとともに伝えていきます(図-3)。

図-3 同3K(変更後)



さらに、こういう住まい方は、もともと3Kに三人とか二人とか、想定している世帯人数よりも少ない人数しか住んでいない場合に起こってきた。ところが、家族人数は四人とか五人いたとしても、残りの二つの部屋に過密就寝をすることを忍んでもリビングルームを確保するというふうな住まい方が見受けられるようになった、というふうな指摘しています。

リビングルームを見出したのはなにも住宅公団だけではありません。当時の電電公社は、家に居ながらにしているいろいろなことができるようになる、家の外にいても家電が動かせるようなサービスを始めようとしたことを「昭和六〇年のビジョン」として、昭和四四年(一九六九年)に打ち出しています。家族単位で快適に生活する、そのために情報通信技術を役立てていこうという方向性が示されているといえます。

私が社会学の視点から考えたいと思うのは、リビングルームはどうして定着してきたのかという点です。電電公社の視点もそうですが、メディアの発達というのが大きな役割を果たしているのではないかと思います。この点について、イギリスのメディア研究者のR・シルバーストーンは、郊外住宅地という空間の成立と、放送という情報技術の発達が、セットになった現象であると述べています。彼によれば、二〇世紀に登場した新しいライフスタイルは、「移動性の上昇」と「住居の中心化」という二つの矛盾する傾向をもっている。移動性が高いと同時に住宅を中心とする生活。こういう傾向が根強く社会のなかにあつて、その結果として先ほどのような住宅のあり方、リビングルームというものができてきたというわけです。

何を更新するのか——住宅の重装備を解く

以上のような視点から、最後に私からの問題提起に入りたいと思います。まず、「脱nLDK」といった場合に、「何を更新するのか」ということです。パッケージとしての住宅の形を変えるだけならばあまり意義は大きくないのではないかと。「建築」というのはそれ自体では大きな変革を引き起こすことではない。空間の変化はそれ自体では社会変革に影響を与えることはない」というのは建築史家D・ハイデンの言葉です。私はこの視点は重要だと思えます。「空間帝国主義」というのは上野先生の造語で、空間の規定力あるいは影響力を高く見積もる建築家の思考の特徴を一言で表わした、とてもインパクトのある言葉です。「人間の用のために空間があるのではなく、空間の特定の配置に合わせて人間の生き方がつくられる」というわけです。この概念につ

いて、「空間」という言葉が少し曖昧すぎるように思います。「空間」という抽象語は、一方で「住宅」という単位空間を指します。他方で、それを成立させるような「社会システム」まで含意してしまう場合があるわけです。

もし後者の社会システムの話だとすれば、個々の建築家にそこまでコントロールする力があるのかどうか、疑問です。ところが、脱nLDK論の議論のなかでは、この社会システムの側面と単位空間の側面が、ともすれば混同される傾向があったのではないかと。単位空間さえ新しくすれば、システムまで変革できるというのは、端的にいえば幻想でしょう。こういう幻想をふりまいてしまったとしたら、脱nLDK論には意図せざるマイナス面があったと言わざるを得ません。

私たちの思考は、たしかに住宅という単位空間に囚われています。そこから距離をとるためには、あえて「住むこと」と「住宅」を区別するほうがよいのではないのでしょうか。人間にとって、よりどころとしての住居というのはとても大事だと思うのですが、それが個別の住宅である必然性はありません。先ほど「nLDKからの脱落」ということを言いましたが、住宅にしかよりどころを求められないような社会では、脱落したあとの受け皿がない。いったん住宅からはじき出されると生活の質が極端に低下してしまいます。

近代においては、単位空間としての住宅が重装修備化されてきました。それが「閉鎖化」であるとか「リビングルームの発達」ということに現われています。たとえば、nLDKが「n+1」LDKに変わっても、重装修備の住宅という点では同じかもしれない。むしろ、住宅の重装修備を解除しながら、いろいろな資源の間をつないで、いわば生活のための「領域」の形成をうながすような仕掛けが大事になってくるのではないかと思います。

そうなると、こんどは領域を形成する力の格差が表面化するでしょう。うまく領域をつくれる人もいれば、うまくつけれない人もいます。地域の経済的、文化的な蓄積によっても差がある。そういう現実はどうかわっていくかという問題があります。そうなれば、私たちが考えるべき課題は個別の建築の域を超えているのではないかと思うわけです。

小林 森反先生よりはわかりやすいのですけれども、やっぱりわかりにくい（笑）。「パッケージとしての住宅」という言葉があったのですが、もうちょっとわかりやすく説明してもらえませんか。

祐成 パッケージということは、いちばん単純にいうと、商品としての単位で売り買いされているということです。住宅とその付属品としての耐久消費財群が、一つのもつた商品としてパッケージされているということです。

小林 わかりました。ある種住宅を一つの単位として見たときに、それを変えるだけではあまり意味がないということです。案の定お二人の先生の話が全然違うので、どうやってかみ合わせるか。思案して討論に入りたいと思います。

ディスカッション



小林 北浦先生のお話は、nLDK論に引きつけると、実はnLDKはまだ成立していないという主張に近いのだろうと思います。「個室がある住宅」をまだ日本では十分使いこなせていない、脱nLDKをいう段階ではない、という議論ではないかと私なりに解釈しました。祐成さんのお話は、nLDKという間取りの話だけを議論すると本質を見失うのではないかと。その背景にあることとして、六つの視点が重要だというお話だと思います。最初に両先生の議論をかみ合わせるために、まず脱nLDKと呼ばれる間取りの例を私から二、三紹介します。それに対して両先生のご意見を伺うことから始めたいと思います。

脱nLDKの間取りの提案

岐阜県営住宅「ハイタウン北方」きたがたは、脱nLDKを主テーマとしており、

図1は、そこで高橋晶子さんが設計された棟です。この設計思想は、住宅というのは「がらんどろ」でいい。それを好きなように間仕切って住むことができるものがないというものです。すべて襖ですから、かりに個室をつつたとしても、「気配がわかる」子ども部屋になるということだと思います。

もう一つ、今度はまったく逆の提案を紹介します。図2は、大阪ガスの実験集合住宅「NEXT21」の中の「自立家族の家」と名付けられた住戸で、家族それぞれの個室がすべて共用廊下に直接出る玄関口をもっています。LDKはむしろ個室の裏側にあつて、家族が選択的にそこへ出ていってふれ合うような場所だという考えのものです。

これに近い考え方はいろいろあり、山本理顕さんの保田窪団地のダイアグラム(図3)も、「個室(私)」が直接廊下に面していて、その奥にLDKがあつて、さらにその奥に閉ざされた中央広場があるという図式です。これらは家族が個人化しているので、一人一人の個室が外部と直接接点をもつように入出口を設けるという考えのようです。

これらが脱nLDKと呼ばれるものの両極端の二つの例です。それらの建築家が批判の対象としている「nLDK」というのは、LDKというものが家族の中心にあつて、個室がそれらを囲むという図式のようなです(5頁「焦点」の項の図2参照。一九二三年、大正時代の住宅改善運動で提案された居間中心型住宅)。

しかし、実際は、このような間取りが日本で定着したわけではなく、一般的なマンション

脱nLDKの間取りの例

図-3 保田窪団地ダイアグラム

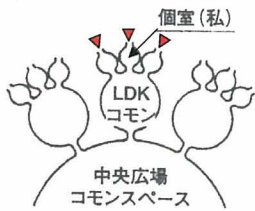


図-2 NEXT21「自立家族の家」

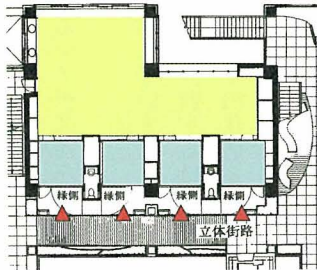
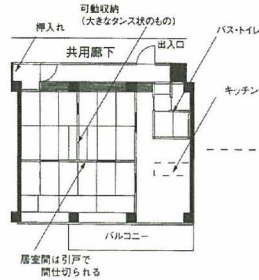


図-1 ハイタウン北方 高橋晶子棟



や一戸建住宅では、居間は端っこにあります。玄関から廊下を通つてすぐに個室に行けるようになってるのが現状です。これに対して、本来の居間中心型をつくらうという提案もあります。わざわざ居間を通つて二階に上がるようにする間取りなどです。

ということ、まず両先生に、以上のような間取りについて、どのような感想を持つかということからお伺いできればと思います。

空間は道具——使い方次第で評価は異なる

北浦 日本の昔の住居は、たぶん高橋さんの「北方」タイプで、田の字型で、隣にいて音は聞こえていたけれども、聞こえないふりをして生活してきた。

しかし、現代では、そういう生活の仕方がなくなつてしまつたということがあります。

小林 北方のような「気配がわかる」空間を使うには、それなりの配慮の仕方とか気遣い、さまざまルールが必要で、今はそれらの気遣いが失われているので、うまくいかないということでしょうか。

北浦 その間取りを、どんな家族が使うかに拠るんです。高齢の家族で、それなりにコミュニケーションをしたい、プライバシーがほとんど要らないような家族ならうまく使えらると思います。住む人を無視して、プランが良いか悪いかという話にはなりません。

小林 NEXT21のほうは各部屋に玄関が付いていますけれども、この玄関を使うか使わないかは住む人の使い方にかかわっている。だから、実はあまり重要な問題ではない、という趣旨になりますね。

北浦 はい。もともとnLDKというのは、nは二寝室、三寝室という意味で、単に住宅規模を表わす言葉であつたのだと思います。そのnを、寝室イコール個室というふうに解釈して議論するとすごく不自然に聞こえるんです。そういう意味で、NEXT21のプランでも、平面タイプとしてはnLDKといえるわけです。玄関が各室に付いているかどうかと、ほんとうにこれを全員が使っているかどうかとは違うんです。空間タイプというのは、最大公

約数的なものとして供給されるものだと思います。それに合わせてみんな住んでいるというよりも、逆にそれをどう自分に生かして使っているかが重要で、空間は道具なんです。使う人間のほうの主体性をあまりにも無視した議論になっているんじゃないかというふうに思います。

使いこなす力、リテラシーが大切



祐成 「住宅は道具である」という北浦先生の指摘は私もまったく同感でして、北方の住宅は、道具のあり方としては非常に使いづらそうだなという……(笑)。たとえば一般的な3LDKだと、ここにはこういう家具を置けばいいんだなというのはだいたい想像がつかますけれども、この場合は少し想像がつきにくいとあります。

結局、自分自身に力、想像力がある人にとっては面白い住宅ですが、そうではない人には使いにくい。この話は、メディアの、たとえば携帯電話を子どもに持たせていいのかとか、有害テレビ番組を子どもに見せるべきでない、ということと似ています。実際に問題が起こることもあるし、一方で、皆が同じように問題行動をするとは限らない。

問題は、メディア・リテラシーということになるわけですね。つまり、使いこなす力みたいなものが必要になる。その観点からみると、この住宅はかなりの高いリテラシーを必要とするのではないか。それが、公営住宅という制度的な住宅の性質からして、はたしてうまく合っているのかなというのが気になるところです。

また、リテラシーといっても一人だけで身に付くものではありませんので、空間だけ提供してあとは自由にいうのではなくて、その空間の使い方をアドバイスする人とか、そういう仕掛けが必要ではないかと思っています。

小林 公営住宅だと選んで入居できるわけではないので、「リテラシーを必要とする」住宅には問題があると。メディア・リテラシーに対して、スペース・リテラシーとでも言うよさそうですね。NEXT21のほうはどうです

か。これは夫婦が別々に個室をもっています。

祐成 実際に想定どおり使われているのか、それとも実は想定とは違うように使われるようになったのかという、その後のことが気になります。

北浦 奥さんが、ある雑誌に書いていらしたんですが、最初はびっくりしたけど住んでみるとそれなりに住みやすいというご意見だったと思います。子どもたちも中学生で大きいし、このぐらいの年齢の家族なら、うまくいっているようですね。やはり、住む人との対応で空間の評価が異なるのだと思います。

保田窪における建築家の意図とのズレ

祐成 私が上野先生たちと保田窪団地を調査したのは九九年です。上野先生が何度か取り上げられていることですが、住み続けたいという意向をもっている人ほど評判が悪い。いずれ移りたいと言っている人にとっては評判が悪いということですね(笑)。いずれ移ることができるので若いうちはこういう面白い住宅もいいかなという人と、ここにしか住めない高齢の方というふうに二極化している。それは、建築家が想定されていた近代家族うんぬんという話とはかなりズレがあると思いました。

それともう一つ、保田窪団地はこの場所に建っていてもおかしいというか、どここの場所に建っていてもおかしくないというか(笑)、熊本でなければならぬ必然性はありません。しかし、建築行政の方にお話を聞くと、HOP E計画の一環として熊本ならではの先進的な住宅をつくりたいという意図で山本さんが呼ばれたと。その点が意外で興味深かったです。

小林 保田窪団地が高齢者に評判が悪いというのは、間取りの影響が強いということでしょうか。

祐成 脱nLDKの間取りというよりも、個室とリビングの部分が渡り廊下でつながれていることが嫌だとか、水まわりが分かれたところにあって冬は寒くて嫌だとか、そういうところでした。

また、行政でこの団地の計画に携わった方が、この保田窪団地というのは

「スケルトン供給に近い」とおっしゃっています。つまり、内部では結構自由に住むことができる。この方は、「住まい方というものをもっと指導ができるような態勢があったら、もう少し豊かな生活ができたのではないか」と。建物だけ建てて、その後あまりケアしていなかったもので、いろいろ誤解を生んだのではないかとおっしゃっていました。

子どもの自立に子ども部屋が必要か

小林 北浦先生、お話の後半で、家族集団主義的な「気配がわかる」というようなあり方を否定されて、個室をしっかりと使いこなすほうがいいという主張をされましたが、なぜ家族集団主義が悪いのでしょうか。



北浦 建前では家族のコミュニケーションが重視されていますが、現実には、家族のつながりや親子の信頼関係が弱くなってしまうという状況がみられます。気配が知りたいのは、親子の信頼関係が築かれていないから親が不安なのです。親子の信頼関係が成立していれば、親は気配がわからなくても、不安ではなくなる。個人が単位になっている欧米のほうが、その点、家族が強く結ばれていると感じられます。

小林 子どもが何歳くらいのことを想定されていますか。たとえば幼稚園児に自立しろと言っているわけではないですよね。小学生くらいですか、それとも思春期を過ぎた中学、高校くらいの話でしょうか。

北浦 それはゼロ歳からです。とくに、三歳ぐらいまでの子どもに真剣に向き合っていることが、親への信頼を強めていく基盤になります。幼くても親の付属物と考えず、未熟であるが一人の人として真剣に接していくことが子どもの信頼に応えることであり、親子の信頼関係をつくっているということに気付かなければいけません。

岡本宏（住総研） 戦前の住宅には子ども部屋はなかったわけですが、戦前の方がおられたら、昔も自立できていたぞ、とたぶん皆さんおっしゃると思う。戦後、子ども部屋ができ



たから、自立した子どもができたのかどうか。

北浦 それは住宅の外の環境の違いだと思います。昔は、一歩外に出たらどこか隠れるような自然の場所がいっぱいあったわけですね。そのどこかに隠れて自分自身を見つめることができた。しかし、いまは都市の中にそういう空間がなくなりました。それならば、住宅の中に必要だということになります。

祐成 個の自立、個の確立、自尊心、そういったものは、その国の文化というだけではなくて、ある階層の文化であるとか、ある地域の文化という言い方をしたほうがいい面があるのではないかと思っています。

北浦 この研究については、欧米では白人の中流階層ということで焦点を絞ってきましたが、個の確立や自尊心という概念は、ある階層では評価されていないとしても、最終的には階層や地域を超えた人間の本質を表わしているとして見ていく必要があると思うのですが。

住宅の重装備化に耐えられない人がでてくる

北浦 祐成さんが指摘された「nLDKの六つの水準」の最初の二つは何と分かるとして、三つ目以降はさっぱり分からないんです(笑)。

祐成 私が指摘した六つのうち、三つ目の「閉鎖性」以降は、nLDKというよりは、近代の住宅という商品というか、装置というか、そういうものをもっていった性質だとご理解いただければいいと思うんです。

最小限住居という概念がありますよね。最小限住居というとはほんとうは身一つでもいい。そこから始まるはずですけども、実際に提案された最小限住居は、家族が誰にも邪魔されずに住めるいろんな設備がコンパクトにセットされた空間です。そういうものを最小限住居と呼ぶところに、近代の建築の発想があると思っただけです。その最小限住居が徐々に拡大していくなかで、いまではnLDKという形でモデル化されているというふうに理解しているんです。

北浦 nLDKは、建築の分野ではそんなに確固とした概念としてつくられ

てきたものではないと言えます。脱nLDKという言葉がつくられてからそれに合わせてnLDKの意味づけがされたと思います。

小林 nLDKというのが、たとえば核家族サラリーマンの消費生活を想定して計画されたとすれば、核家族サラリーマンの生活そのものを問い直すということは、当然議論としてはあってもいい。

萬羽俊郎（萬羽設計室） 今日の家庭生活でマイカーの比重は大きいと思います。そこで、車をnLDKの記号の中に含めて、nLDK+Cみたいな形もあるのでは。

祐成 自動車も含めて家電製品のほとんどは、人びとの日常生活の需要、必要を満たすというセルフサービスの道具として肥大化してきたわけです。その一環として、住宅が重装備化している。しかし、自動車がないとどうなるか、あるいは耐久消費財が揃わない場合にどうなるか。高齢者などの人口が増えてきたときに、そういった住宅に耐えきれない人たちが増えてくる可能性があると思います。

nLDKは住宅の大量供給時代の言葉

小川玄（㈱新都市開発機構） 私は、役所に勤めてずっと町づくり、住宅政策みたいなものをやってきました。公団がnLDK型の提案を含めて、いろいろやっただけに日本の住宅のレベルが上がったという面もあると思います。

小林 公団は型計画という方法を実践しましたが、型計画というのは、家族と住宅の対応関係を一对一で規定したのではなくて、ある間取りについて、いちばん典型的な家族や住まい方は一応想定する。しかし、実際は、それより人数が少ない家族とか、多い家族にも対応できるように柔軟性をもたせて設計した。その点、さきほどの祐成さんのお話は、型計画を固く考えすぎているなと思ったのですが、どうですか。

祐成 限られた資源の中で、どのぐらいの住宅を、どのぐらいつくればいいのかを選択する場合に、人口構成や住宅規模についての根拠がないと、つく



れなかった。そういう場合の一つの理論として登場したということで、供給した後でどう住むのかまでは規定してないと思います。ただし、社会的には、空間というのが、ある理念とか思想とともに登場しているという点が、非常に興味深いところです。

海老塚良吉（都市再生機構都市住宅技術研究所） 私は、nLDKとは、標準設計で大量建設する時代の言葉だという理解をしています。だけど、今日のように新規供給が大量に必要な時代では、もうnLDKは無用の長物といえますか、

ほとんど論じる必要がなくなった。多様な家族タイプに応じて、皆さんが一品一品設計される時代になってきていると思います。標準家族が少なくなるなかで、単身者の住まいが重要で、それも1Kがいいかという時代から、ルームシェアという形態もある。そこで脱nLDKになっていくのではないか。

小林 nLDKを大量供給の方式とみる場合は、今日では意味を失っているという指摘もあると思います。単身者については、「今、なぜシェア居住か」という特集（本誌二〇〇七年春号）がありましたので、そちらに譲りましょう。

住宅は何を表現しているのか——建て前か本音か

高山登（㈱ボラス暮らし科学研究所） 建物は長く使わなくてはいけない、その一方で、居住者のニーズは多様になっていくので、これからの脱nLDKは、簡単なパーテーション、仕切り家具で、何LDKにでも仕切れますよという住宅だと思えます。

小林 上野千鶴子先生が「建て前と本音」というお話をされていて、社会学は本音を調査して実態をえぐり出して、それで建て前とか規範のおかしさを変えていくのだ、というような趣旨を述べておられます。しかし、住宅というのは、生活の本音にすぐに応じるのではなく、そもそも建て前を表わすものと主張したいのです。なぜ、3LDKがこれだけ普及したかというの、かりに子どもが二人いなくても、そういう家族モデルがいまでも社



会的な規範として主流だからだと思います。

祐成 上野先生は、おそらく家族がnLDKを超えつつあるという文脈で話されたのだと思います。私は、九〇年代前半ぐらいまでは、そう言えたと思いますが、その後、揺り戻しがあったような気がします。実は本音の部分でも、まだまだnLDK的な住宅のモデルであるとか、家族のモデルに魅力を感じる人はかなりいる。誰の言葉に耳を傾けるかによって、「本音」ということの意味は変わるでしょう。

実際は、社会学も規範的な議論に重きをおいて、社会というのはこうあるべきだということを考えていますので、上野先生がおっしゃりたかったのは、変化の徴候をとらえたうえで、新しい規範を生み出す必要がある、ということではないかなというのが私の理解です。

脱nLDKはプランではなく社会現象を対象としている

鈴木成文（神戸芸工大名誉教授） きょうは祐成さんの理論

に感心しました。というのは、私は脱nLDKというのは単にプランを言っているわけではなくて、そういう社会現象を扱っていると思っているからです。「複数の水準」ということ

で六項目を挙げられましたけれども、それはまったくnLDK批判としては当を得ている。上野千鶴子さんは意外に大ざっぱで理念偏重型で、理論を先にもってくるのに比べると、祐成さんのはとてもいい（笑）。

nLDKというものは、型計画から出てきたというよりも、これは社会がつくったものだと私は思っています。その証拠に、いちばん最初にそれが出たのは戦後すぐです。いわゆる普通のリビングがあり個室があるというプラン、あれはたしか伊藤ていじさん、磯崎新さん、川上秀光さんが八田利也という筆名で書いた「小住宅はんだい」（現代建築愚作論 彰国社、所収）という中にもあったと思います。西欧型のリビングと個室があるという住宅が、これからのモデルになるんだという考え方だったと思います。

ですから公営住宅よりも先にそういうものが出てきたわけで、何も公団や



何かnLDK型をつくったわけではない。もともと社会が要求したものだとは私は理解しているわけです。そういう意味では、社会が移り変わっていくと

きにnLDK批判があるのは当然です。ただし、そのような社会の移り変わりに対して、いったいどう考えるかということが問題です。建築学の中でも、建築計画という分野は社会学といってもよいのですが、建築学でも社会学でも、こうあるべきということを示すことが大切だと思います。

北浦 nLDKというのは日本の社会がつくったものだというより、欧米の住宅規模を表わす「〇寝室の住宅」と同等の表現であり、特別の意味をもつたものではなかったはずですよ。

「気配のわかる空間」や「リビング階段」がまだ疑問を持たずに支持されている現代の日本の住宅では、nLDKでも、NEXT21型脱nLDKでも、ハイタウン北方型脱nLDKでも、容器としての住宅のもつ意味はほとんど変わりません。nLDKには今でも空間帝国主義といえるほどの強制力はありません。今の人びとの暮らしの多くの部分はマスメディアのつくり出す虚像に支配されています。そして、人びとがマスメディアに流されず住宅という道具を使いこなせるようになったとき、初めて、「脱nLDK」といえるのではないのでしょうか。家庭や暮らしを楽しむ心を育み、住宅という道具を使いこなせてこそ、戦後の日本の文化の第二ラウンドが始まるといえます。

しかし、そうなる前に、いまや大前提の核家族が減少し、シングルや欠損家族、高齢家族など住宅の前身である家族が急速に大きく変質してきました。第二ラウンドでは多様な価値観が求められています。

祐成 鈴木先生がおっしゃったなかで、「社会現象としてとらえなければいけない」ということについて、私もかねがねそう思っていました。今後の社会を考えていくうえで、特にストックとして積み上げてしまった膨大な数の重装備の住宅をどうするか、という問題に注目していく必要があると思っています。

小林 どうも、ありがとうございます。

（文責＝編集部）

nLDK批判とは何であつたのか

江上徹

はじめに

nLDK批判には、かつての近代建築批判に似たところがあるように思える。ひよつとすると若い方々には、「近代建築批判」という言葉がピンとこないかもしれないが、ずいぶん前に私はこの問題に関して、次のように述べたことがある*。

さて、近代建築やその機能主義への批判の中心点はそれが生み出す建築形態の貧しさということであつた。つまり、近代・現代建築の表情や都市景観の貧弱さ、混乱は、それらが機能的に(のみ)つくられて来たという点に主要因があるものと捉えられていた。確かに我々をとりまく環境の視覚的欠陥は至る所に存在している。表現など未だ問題となり得ないような、しかしそれ故にこそその非人間性が問題となる数々のアパート、建売り住宅、およびその集積としての団地や住宅地、そして個々の建築ファサードやコマーション・サインが我先にとその存在を主張しながらも、結局は混乱した全体の中に埋没してしまつた都心部の景観等、自らが生活している空間の視覚的惨めさは誰しもが経験していることであろう。しかしそれは本当にそれらが機能的につくられて来たが故の結果なのだろうか。

*白石和也編『デザイン概論・第三版』所収。gezuid社、一九九六年。この文章自体は、一九八〇年の「ドルフ・アルンハイム博士来福記念シンポジウム」での講演録を元にしてゐる。

そして、『現代建築事典』(鹿島出版会、一九六五年)の中の、ピーター・ブレイクによる機能主義の項を引用した後、果たして、この混乱は建築が機能的に形づくられたが故の結果なのだろうか。決してそうではない。それは建築の持つべき複雑な機能の一部にしか考慮が払われて来なかつたということであり、しかもそれはブレイクの引用文に示されるように商業主義によるものである」と続けた。

実際に我々が目のあたりにする建築やまちの姿の多くは審美的観点から見て、疑問多きものである。何故そうなつてゐるのかについては、アーリー・モダン以来の「安く、早く」という意図をはじめとしてさまざまな要因が絡んでいよう。しかし、「形態は機能に従う」や「機能的なもの美しい」といったアフォーリズムに拠つて近代建築をとらえる感性は、上記のように、機能に従つて形づくることへの批判に向かい、結局のところポストモダンリズム建築に帰着したのではないだろうか。極端な言い方をすれば、この批判は、近代建築とは機能に従つて形づくられたものであると定義しつつ、実際の近代建築の多くが美しくないという現実を根拠に、だから機能に従つて形づくるとはよくないと結論づける、一種の循環論法になつてゐるのではないかと

いうことである。

nLDK批判が近代建築批判に似てゐると書いたのは、このような循環論法を想起させるという点においてである。たとえば、nLDKという言葉には、既にコノテーションとして——あるいはデノテーションとしても——画的・一時的というイメージが付着しており、そうしたものとしてこの言葉を使いつつ、nLDKの画一性を批判するといったことである。nLDK批判との関連では、「51C」は呪縛か」という重要なシンポジウムが二〇〇四年二月に開催された。「nLDK」をいかにしてつぶすかを「現代の建築界の課題」と意識してこのシンポジウムを企画した山本喜美江自身が、「51C」nLDKと思つてゐた」という旨のことを語つてゐるが、nLDKという言葉の解釈はそれほどあいまいなのである。本稿に与えられた課題は、「nLDK批判と

は何であったのか」というものだが、その前にnLDKとは何なのかを考える必要がある。そうである。

nLDKへの出発点

右に「51C」=nLDKと「思っていた」という山本の述懐を引用したが、むしろこれは誤解である。51C型が提案された一九五一年にはnLDKという言葉や観念は存在しなかった。しかし、そうした誤解が生じるのには訳がある。51C型をはじめとする戦後の住宅革新期に提案された諸理念が、確かに一面ではnLDKにつながっているからである。これらの理念、提案は、一方では大正時代からの生活改善運動、住宅改善の流れや昭和の戦中期に誕生した住宅計画学の方法を受け継ぎつつ、他方では戦争による膨大な住宅不足の解消や、戦後の民主化に応じた新しい住生活像を目指すという動きの中で生まれたものである。

この時代には51C型、モダンリビング、公私室型という三つの代表的理念の提案があった。51C型や公私室型は住宅計画研究者から、モダンリビングは建築家から提案されたという性格の違いはあるが、いずれにも共通するのは生活の重視、生活に対応した空間構成を志向していた点である。上記のように、これらは結果的にnLDKにつながり、今日では、近代家族を容れるハコとして計画されたもの」という認識や批判がまかり通っているが、原初においては決してそのような抽象的なものではなく、具体的に住生活をとらえ、それに対応しようとしたものである。

たとえば一九五一年の「モダン・リビング」創刊号では池辺陽ほか五人の建築家が「住みよい部屋の構成」を論じているが、その論点は「家族みんなが集まる部屋」・主婦の働く場所・寝室・便所・浴室・洗面所・子どもの部屋・玄関・物をしまふ場所・老人の部屋」の八項目であり、これらとは別に「設計のまとめ方」や庭の設計にも触れている。そしてこの「住みよい部屋の構成」の前文には、「家族本位で、生活本位であること。……この二つの条件があなたの暮らしに近代性を持たせるかどうかの重要な鍵なのです」

と書かれている。「家族本位で生活本位」といっても、収納や玄関にも目配りがなされ、老人室に一項が割かれているように、核家族、近代家族だけを対象とした狭い思考ではなかったのである。

51C型も、戦前からの動きを一定受け継ぎつつ、戦後間もない時期の厳しい条件下で、食寝分離や親と子の就寝分離を主軸としながらも、プライバシーの確保、動線の合理性からバルコニーや物置き等にまで配慮して提案されたものである。公私室型は、一九五五年の日本住宅公団設立以降の、つまり高度経済成長期に入った頃の、ホワイトカラー層を中心とした住生活に新しい傾向が現われていたにもかかわらず、住戸計画の考え方は2DK以来の食寝分離や就寝分離を主軸としたものであるという矛盾を突いて提案されたものである。それは、計画理念としては食寝分離・就寝分離を主軸とする空間構成原理から一歩進んだ、公室・公的空間と私室・私的空間を明確に分けるという空間構成原理を持っていた。ただそこには、生活の実態としては子ども部屋等の私室・私的空間が優先されるという問題、また、理念の上では「公室」即ち居間・リビングルームを、一方では家族の集まり部屋ととらえ、他方では接客も含めたノン・プライベートな生活の場ととらえる等、ややあいまいさを残していたという問題があった。

nLDKという言葉への途

前述したように、51C型、モダンリビング、公私室型ともに、その出発点においては具体的なレベルで生活を重視し、それに対応した空間構成を考えようとしていた。しかし小住宅であるが故に、その構成要素は限られている。また、マスハウジングというシステムの下では主要室を記号化して表記することが行なわれた。台所はK、ダイニングキッチンにはDK、リビングルームはL、寝室となり得る部屋は数字で表わされ、2寝室+ダイニングキッチンの場合は2DKと表記された。

このような記号化は供給者の側からだけでなく、建築家や研究者の側からもなされた。戦後の住宅革新に対する非常に早い時期の批判として伊藤てい

じ、磯崎新、川上秀光による「小住宅ばんざい」(『建築文化』一九五八年四月号)がある。その中で彼らは、戦後の小住宅設計家たちがつくる住宅のプランは結局、L-B×n」と図式化できるものであり、こうなつては小住宅設計は建築設計などというほどのものではあるまい」と批判した。このような議論を受けつつ、黒沢隆はより大きな史的パースペクティブの中で近代住居をとらえ、その一般解を「L+B+nC」と表した(『建築文化』一九七一年六月号)。

51C型の提案者である鈴木成文は「公団アパートにおける公私両空間の分化について」(『日本建築学会論文報告集』第69号、一九六一年)や「公的住居における住戸設計の現状」(『建築年報』一九六二年)の中で、nLDK型や、nDK型、という言葉をを用いている。『日本住宅公団10年史』の中には、nというアルファベットこそないものの、一九六〇年代半ばには3LKとか3LDKといった表記が既に見られる。

ここからnLDKという表現へはほんの一念という感じがするのだが、この言葉が用いられるのはずっと後のことである。前記の「51C」は呪縛か、シンポジウムでもnLDKなる言葉がいつ発生したかについては不明という結論であった。私が調べた範囲で最も早い使用例は小原二郎ほか編『インテリアの計画と設計』(彰国社、一九八六年)である。しかし、この言葉が専門家の間で一般的に使用されるのは更に後で、おそらく一九九〇年代以降である。いずれにせよ、戦後の住宅革新期に提起された住居理念は、こうして単純な記号によって表現されることとなった。そしてそのことによって空間像やその構成の原理はより抽象化され、パターン化されて理解され、伝えられることになったのである。それがnLDKの画一性の要因の一つになったであろうし、近代家族を容れるハコ、等の抽象的なとらえ方にもつながったと考えられる。

nLDK批判の四類型

nLDK批判は内容的には、①Lでの接客と関連した批判、②画一性・固定性への批判、③閉鎖性への批判、④家族との関係からの批判、の四つに大

別できる。51C型はその厳しい住戸規模条件に縛られ、対社会コミュニケーション即ち接客への配慮は全く希薄であったし、公私室型には上述のようにLに関して、一方では接客も含めたノン・プライベートな行為全般の場ととらえ、他方では家族の集まり部屋ととらえるというあいまいさがあった。一般的な都市住宅のLに大きな影響を与えたと思われる住宅公団のLは家族の集まり部屋、だんらんの部屋として計画されたものである。しかし、生活の実態としてはそのLが主たる接客の場ともなり、当然そこにはあつれきが生じ、接客絡みの批判はLが普及し始めた初期の頃からなされてきた。ただ注意すべきは、この矛盾は従来からよく指摘されてきたLの客間化、Lでの接客を意識するため家族のだんらんに使われていない、使いにくいという性格の問題というより、Lを家族が日常的に使い、散らかしたりしているため接客に使いにくいという逆方向の問題であるという点である。

画一性・固定性への批判も一九七〇年代半ばには既に現われているが、九〇年代に入り、nLDK」という言葉が使われ出すと、この傾向は更に強くなったように思われる。例えば上野千鶴子は「住宅金融月報」一九九三年四月号で、日本の住宅は、一九五〇年代の集合住宅の登場以来、nLDKの規格に固定されている。戸建てのフロアプランも、集合住宅と同じ規格を踏襲し、nLDKで個性がない」と述べ、「GA Japan」35号(一九九八年)では、
「不況だというのに、新聞には毎日、おびただしい住宅広告が入ってくる。その間取りはハンで捺したようにワンパターンである」と批判している。

閉鎖性への批判は一九八〇年代に登場したものである。その批判の主たる対象は子ども部屋であった。一九八〇年代前半には反子ども部屋キャンペーンとも称してよいほどに子ども部屋への批判・否定が広がった。その一つの契機となったのは松田妙子の「家をつくって子を失う」(『文藝春秋』一九八二年四月号)であり、同年には「子供に個室はいらぬ」というサブタイトルを持つ宮脇檀の『新・3LDKの家族学』(テロビュ社)がベストセラーとなった。松田妙子の「子供部屋が普及したことで、親と子供とのコミュニケーションがなくなり、親子不和・断絶が起きている」という言葉がその問題意識

を端的に語っている。一九八〇年代末以降には少年による凶悪な犯罪がマスメディアで大きく報道されるようになり、閉鎖性の問題は専門分野だけでなく、一般誌でも取り上げられるようになった。例えば「サンデー毎日」一九九九年七月十一日号の表紙には、住宅nLDKタイプが家族引き裂く¹という大きな文字が躍っている。また、鈴木成文は「住居の閉鎖化」(『建築雑誌』一九八四年四月号)等で、対社会との関係も含めたより広い視点から、この住居の閉鎖性の問題を論じている。

既に一九六〇年代末に、黒沢隆は家族論的観点から近代住居の崩壊を説き、個室群住居への展望を語ったが、こうした家族との関係からのnLDK批判が広がったのは一九九〇年代以降である。そうした批判を押し進めて来た一人として上野千鶴子を挙げることができよう。上野は『家族を容れるハコ』(家族を超えるハコ)〔平凡社、二〇〇二年〕の中で、住宅メーカーがつくる住宅も、前衛的といわれる建築家がつくる住宅も基本は同じ。素材やデザインのユニークさはあつても、結局のところは「nLDK」で成り立ってきました。……このnLDKの基本プランが完成したのは一九五一年、公団住宅の51C型でのことです。とか、思えば戦後の住宅建築史は、食寝分離からはじまって、夫婦寝室と子どもの寝室とを分離するための長い道程であつた。nLDKは、その戦後家族の理想を実現した究極のモデルであり、一九五〇年代に完成して以来、いまだ耐用年数を保っている²等と書いている。51C≡nLDK³と思っていたのは山本喜美江だけではないのである。それはともかく、この四番目の批判で問題とされているのは、端的に言えば、家族は多様化、個人化しているのに、住宅の設計は相変わらず近代家族を容れるハコとしてのnLDKのままというのをおかしいだろうということである。

様式化の可能性

さて、上にnLDK批判の四つの類型について述べたが、これらは全く的はずれの議論というわけではなく、各々に当たっている所がある。しかし今日のnLDK批判はその個々の問題を、どうすればよいのかと具体的に追究

するのではなく、多少極端に図式化して表現すれば、nLDKだから接客に上手く対応できない、nLDKだから画一的になる、nLDKだから閉鎖的になるといった形で批判し、それ故脱nLDKを目指さなければならぬと結論づけるといふ、(はじめに)で述べた、脱近代建築を目指した近代建築批判によく似た構造となつている。しかも、その脱nLDKなるものの空間像は不明瞭なままである。nLDK批判がこれだけ旺盛になされてきたにもかかわらず、上野千鶴子が指摘するように、建築家が設計する住居も含めて多くの住居がnLDKと呼べるものであるという現実、一面ではnLDKなるものが持つ力を示しているが、他方ではこうした批判の仕方に困っているのではないだろうか。

ここでは二つの方向が考えられよう。一つは個々の問題の解決を具体的に図っていくというものであり、もう一つは様式化、秀れた定型化の可能性を考えるというものだ。前回、本誌で執筆の機会を与えていただいた「三丁目の暮らしぶりを支えるもの」(『すまいる』81号、二〇〇七年冬号)でも述べたが、今日は五〇〇年を経た近代の大きな転形期ではないかと思うのである。かつてH・ルフェーブルは様式の不在を軸に近代批判を展開した。進歩⁴や個性⁵に捕われた近代では、新しさ⁶や個性⁷が至上の価値となり、前近代のような大量の時間をかけた洗練や成熟、定型や様式はあまり評価されなくなった。しかし、今日を上記のような大きな時代の転形期ととらえるなら、この様式化、定型化に価値を認めていくという方向は、それこそ新しい⁸ものとも言えよう。近世の書院造のような、多様な具体相を持つ様式化の可能性はないだろうか。

江上徹／えがみ・とおる

九州産業大学工学部建築学科准教授。

一九七四年、九州大学大学院博士課程単位取得退学。八五年より現職。専門分野は住宅計画、建築計画。共著書に、『住まいの二〇〇年』

(ドメス出版)、『暮らしのシステムと環境』(九州大学出版会)、『国際化と文化の多様性』(九州大学出版会)、『デザイン概論 第三版』(デザイン社)。

『住まいの二〇〇年』(ドメス出版)、『暮らしのシステムと環境』(九州大学出版会)、『国際化と文化の多様性』(九州大学出版会)、『デザイン概論 第三版』(デザイン社)。

ナワバリ学が解き明かすnLDKの真実

——住まいの支配者は家父長から母親に変わった。夫婦平等の理想は未成立

小林 秀樹

はじめに

昨今、nLDK論が話題となっている。その議論を深めるためには、家族関係と住空間の対応という、住み方調査だけでは把握できない家族の心理的関係に迫ることが必要だ。しかし、その実態を、どのように調べればよいのだろうか。この疑問に答えるために、「ナワバリ学」の方法を駆使してみたい。以下は、それを通して見えてきた、nLDK住宅の意外な真実である。

住まいのナワバリ学とは

私たちは、間取りを語る時に、部屋を「誰がどのように使うか」からみることが多い。しかし、このような使われ方だけでは説明できない場面も多い。たとえば、子どもが個室で寝て勉強していても、もし、その部屋の家具配置を母親が決め、母親が自由に出入りしているとしたら、その部屋は、子どもの場所ではなく、母親の場所かもしれない。これは、使われ方ではなく、「その部屋を誰が支配しているか」、言い換えれば「誰のナワバリか」、から住空間を理解しようとする見方である。

ナワバリとは、人びとが自分あるいは自分たちの場と思い、そこを「支配」(コントロール)するところの一定の空間を指している。たとえば、花見の

席取り争い、国と国の領土争いなども、ナワバリの一つの表れだ。

そして、「住まいのナワバリ学」とは、家族の一人一人が、住宅の中で、どのようにナワバリを形成しているのか、という観点から住宅を考える分野だ。このことを通して、住空間に表出された家族の心理的関係に迫ることができ。そこに、nLDK論を深めるための知見が隠されているはずだ。

順位制とナワバリ制に基づく住まい

ところで、住まいを、個人のナワバリから解き明かそうとする発想は、家族一人一人がナワバリをもつ権利を認める点で、すでに「近代的な家族像」に縛られている。

この限界に対して、ナワバリ学はうまい回答を用意している。それは、集団には、順位制とナワバリ制があるという見方だ。動物生態学の知見によれば、動物が社会を形成するときに、大きく二つのタイプがあるという。一つは、群れ生活を基本とするタイプだ。群れ生活では、餌を食べる順番、メスと交尾する順番など各成員の順位が定まっており、これにより互いの無用な争いを避け、安定した生活を実現している。これを「順位制」の社会という。

一方、「ナワバリ制」の社会は、各個体はナワバリを持ち、互いにそれを侵害しないように尊重することで無用な争いを避ける仕組みだ。皆が一国一城

の主だから、いわば平等社会だ。このような順位制とナワバリ制という視点は、住空間を理解するために大いに役立つ。つまり、伝統的住宅の背景には順位制の家族関係があり、nLDK住宅の背景には、ナワバリ制に基づく平等な家族関係があるのではないか、という視点である。

個室のない伝統的住宅——順位制の空間原理

戦前の民家や武家住宅では、廊下がなく、また個室に相当する部屋もない間取りが普通だ。農家では、唯一、壁で仕切られた部屋としてナンドがみられるが、そこは若夫婦の夜の営みの場といわれ、個人に帰属する個室の概念とは異なっている。

当時は、家父長制の時代であった。家父長を頂点とした家族内の順位が明確であり、その順位の尊重によって共同生活を円滑に運営していた。たとえば、家父長が食べるまでは他の家族は食事を待ち、また、囲炉裏を囲む座や風呂の順番も決まっていた、さらに夜は声を上げない等、順位制に基づく気遣いや礼節が発達していた。このため、個室がなくても、あるいは固い壁によるプライバシーがなくても、円滑に暮らせたのである。

このような順位制の家族像を背景として、伝統的住宅では「個人と家族」の場を分ける原理はみられない。それとは別の原理、例えば、「表と裏」や「前と奥」などの原理が重要であったと考えられる(4~6頁〔焦点 参照)。

nLDK住宅——ナワバリ制の空間原理

これに対して、今日では、個室とLDKで構成された間取りが多い。言い換えれば、「個人と家族」、あるいは、それを空間に置き換えた「私室と公室」(公室はLDKのこと)によって規定された住宅のことだ。これを、本稿では、nLDK住宅と定義しよう。

nLDK住宅は、ナワバリ制の典型といえる。個室は各人のナワバリであり、LDKは家族共有のナワバリだ。さらに、この住宅は、一人一人のプライバシーを認めようとする点で、いわば各人を自立した個人とみなす平等的家

族像に対応している。

以上が理念的な説明である。しかし、本当にそのような単純なナワバリ構造で、現代の住まいを理解できるのだろうか。たとえば、夫婦は二人で一人なのだろうか、小さな子どもはナワバリをもつのだろうか。さまざまな疑問が生じる。そこで、実態を調べてみよう。

ナワバリの意外な実態——LDKは母親の場

人びとは、自分のナワバリを、自分が思うとおりにしつらえ飾ろうとする。これをパーソナライゼーション(個人化)という。逆に言えば、しつらえの決定者を調べれば、住まいのナワバリ構造が見えてくる。具体的には、各部屋の「家具配置やしつらえを決定しているのは誰ですか」という質問である。

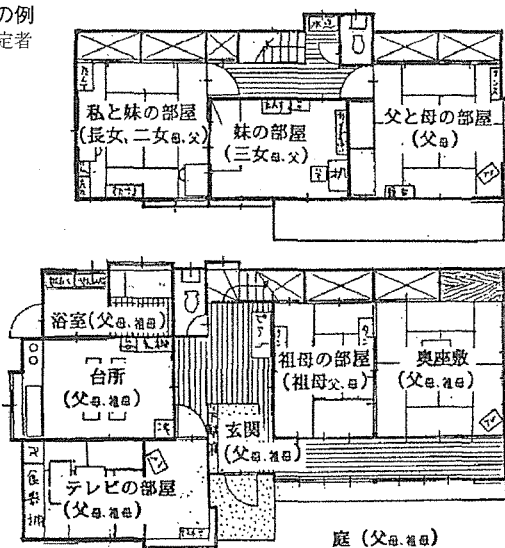
栃木県の大学生約百人の自宅を調べた結果は、nLDK住宅の理念的な説明を覆すものであった。まず、夫婦のナワバリ関係について、典型的な4パターンを紹介しよう。

1 定着層に多い

「父主導型」

典型の一つは、茶の間や居間など、家の大

図一 父主導型の間取りの例
()内は部屋のしつらえの決定者



伝統的続き間型

居住階層 保守的定着層
支配形態 父主導型

立地 栃木県矢板市
建築 昭和62年新築
家族 祖母76、父50、母44
長女19、二女17、三女14
職業 会社員(専業主婦)

家全体のしつらえの決定権は父親にある。祖父母と同居する保守的定着層では、父主導型が多い。

部分のしつらえを父親が決めているパターンだ。これを「父主導型」と呼び、全体の二八%を占めていた。そのうち七割は、保守的定着層と呼ぶ階層に属し、農家や商家などの自営業が多い。保守的定着層とは、いわゆる三世同居で家を代々受け継ぐ階層のことだ。おそらく、今日でも家長制の生活様式が残っている世帯なのだろう。しかも、住宅の間取りは、「続き間座敷」（和室が二間続く空間）をもつものが九割を占める。「続き間座敷」は、今日でも地方では、親戚が集まる法事の場合などイエの象徴として位置づいている（図一）。

このタイプにおいて、母親の支配が表れるのは台所である。また、夫婦寝室も約半数が母親支配だ。イエ全体が、父親が支配するナワバリであり、台所と寝室に女が自分のナワバリを確保しているというイメージだ。

2 夫は外、妻は内の「役割分担型」

二つ目は、「役割分担型」と呼ぶ形態だ。これは、家の大部分を母親が支配しているが、座敷の一部にだけ、父親の支配が表れるパターンだ。父主導型との違いは、核家族サラリーマンが八割と多数を占めることである。これは、家長制を意識しつつも、サラリーマン化により、家は主婦が守るといふ役割分担関係に転化したものと考えられる。その中で、座敷だけに父親の影響が残る。この座敷に父親が寝ることもある。

3 流動層に多い「母主導型」

最も数が多かったのが、「母主導型」で三〇%を占めた。これは、家の大部分を母親が支配している形態だ。核家族サラリーマンが多く、八割以上が「流動層」だ。流動層とは、実家から離れて新しく家を購入した世帯である。主婦は専業も共働きもみられる。

このパターンでは、父親が支配する場がほとんど家庭内がない。ときどき父の名がみつかり、風呂や庭だけ。間取りは、続き座敷をもたない間取りが六割以上を占め、父主導型とは明瞭な違いをみせる。いわゆるnLDK住宅が多い（図二）。

4 少数みられた「平等型」

少数だが、居間のしつらえは父母が話し合っただけという、「平等型」と呼ぶ支配形態があった。家族団らんのイメージにピッタリだが七%と少ない。

以上の結果が示唆することは何だろうか。

おそらく我が国では、産業社会の進展（流動層・被雇用者の増加）により、家長制から平等的な家族像に変化したのではないということだ。家の支配者が、家長から母親に変わっただけで、昔は少なくとも台所や寝室という女のナワバリがあった。それに比べると、流動層のnLDK住宅では、父親のナワバリがどこにもない。それが、今日の多数の現実なのである。

子どもの年齢で異なる親子のナワバリ

次に、親子関係をみてみよう。第一のポイントは、子ども部屋のしつらえを子ども自身が行なっているかどうか。もう一つのポイントは、家族が集まる居間のしつらえに、子どもがどの程度関心をもっているかだ。この二つを組み合わせると、四つの支配形態が導ける（次頁、図三）。調査対象は、ある

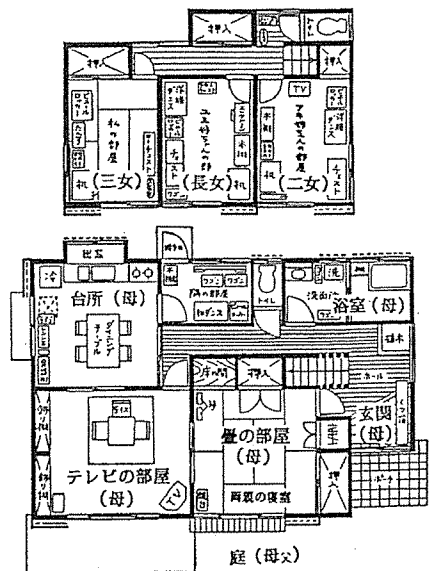
図一 母主導型の間取りの例
() 内は部屋のしつらえの決定者

都市LDK型（折衷型）

居住階層 広域流動層
支配形態 母主導型

立地 栃木県小山市
建築 昭和57年新築
家族 父57、母52、
長女26、二女23、三女18
職業 会社員（専業主婦）

母が主導する現代の典型的な都市住居である。



住宅メーカーの購入者だ(図一4)。

1 子どもの成長により増える「自立」

自立と名付けた形態は、個室が子ども自身の場であることはもちろん、居間にも子どもが関心をもつパターンだ。子どもの年齢をみると、小学校高学年からテラホラ登場し、高校生で約半数を占める。親と子どもが対等のナワバリをもっており、家族の一人一人が自立しているイメージだ。

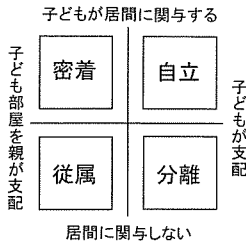
2 幼児は全員が「従属」

従属とは、親が個室のしつらえを決め、子どもは何も言わないパターンで、いわば子どもの自我が未発達で、親に任せきりのイメージだ。図をみると、幼児の段階では、ほぼ全員がこのパターンに属するが、中学生・思春期を境にしてほぼ消滅する。おそらく、子どもの成長が順調ならば、従属から自立へと移行していくものと思われる。

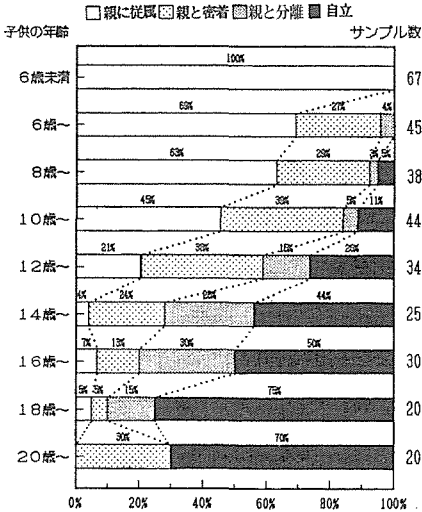
3 中学生・高校生にみられる「分離」

分離とは、個室は子ども自身が支配するが、その一方で、居間に子どもが関心をもたないパターンだ。子どもが個室に閉じ籠もるイメージがあるため、分離と名付けた。中学生・高校生で急激に出現するが、親がけむたく、親が支配する居間には関わりたくないということだろうか。この調査では成人に

図一3 場の支配形態の分類



図一4 子どもの年齢と支配形態



なると消滅していたが、今日では、ニートと呼ばれる存在により増えていることも予想される。

4 大人になっても三割を占める「密着」

密着とは、個室のしつらえは親が決め、その一方で、居間に子どもが関心をもつというパターンだ。親子が一心同体化しているイメージのため、密着と名付けた。年齢を問わず、一定比率を占めることが特徴だ。成人後に三割に増える点が注目される。もしかしたら、母子密着といわれる親子関係が反映しているのかもしれない。

以上の結果から何がわかるのだろうか。

一つは、子どもの年齢によって、ナワバリのあり方が大きく変わることだ。もう一つは、多くの親子は、従属から自立へと順調に成長していることだ。その中であって、注目される点は、中・高校生における分離・閉じ籠もりの出現と、成人後における母子密着関係が少なくなることである。nLDK論は、子どもの年齢に対応した、きめ細かい議論が必要ではないだろうか。

個室群住居は自立家族限定の間取り

もし、親子が「自立」と呼ぶ関係であったならば、個室群住居であれば、今日のnLDK住宅であれ、問題なく住みなせるだろう。子どもは個室を自分のナワバリとして確立し、家族と触れあう場として居間にも積極的に居場所を確保しようとする。親子関係もそれに対応した平等的・友愛的なものだろう。そこでは、個室+コモンの空間構成でありさえすれば、動線、配列、出入口の位置などはあまり関係がない。

「自立」は、子どもが思春期以降で主流になる。してみると、個室群住居は、成長した自立家族にとっては一つの解といえる。しかし、その他の従属・密着傾向にある家族にとっては、果たして適切だろうか。

「従属」あるいは「密着」の段階にある小さな子どもにとっては、親の庇護を感じさせる空間構成が安心感を与えるだろう。このため、個室に出入り

する際に必ず居間を通る「居間中心型」の間取りもうまい解決だ。一方、「分離」傾向にある親子の場合も、それを助長する個室群住居よりは、分離傾向を緩和する可能性がある間取りに共感が集まるだろう。そうしてみると、個室群住居は、自立家族だけが住みこなせる間取りといえそう。

その一方で、個室がない間取りはどうだろうか。今日、すでに順位制集団に必要な気遣いや礼節が減退している。このため、共同生活の摩擦が生じるはずだ。個室を廃止できるのは、小さい頃からそのような住まいで育ち、障子や襖がありさえすれば十分に人間関係を調整する方法を身につけた、気遣いの達人たちの場合だけである。特に、分離傾向の親子においては、個室を廃止すれば、子どもは家の外にナワバリを確保するだけだろう。それよりは、居間中心型の主張の方が、まだ期待がもてそう。

父親の閉じ籠もりが生じる？

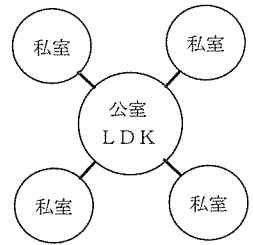
一方、夫婦関係からみるとどうだろうか。

夫婦が平等のナワバリをもつという理念は幻想であった。現実には、父主導から母主導への変化が一般的だ。しかも、それは、主婦の社会進出とは関係なくみられる。

おそらく、男性が家の支配者でいられたのは、家父長制という制度がつくり上げた一種の虚構だと思われる。その制度が崩れ、そして長男がイエを代り継ぐという実態も崩れている「流動層」では、母親と子どもの動物的な関係が優先し、父親は意図的に努力しない限りは、家における役割は低下せざるを得ない。

そのような家族に個室群住居を持ち込むとどうなるだろうか。たぶん、父親の個室への閉じ籠もりが生じる。居間に出ていくと、皆にけむたがれる父親……。そうならないためには、支配者である母親の庇護を受けるべく努力するしかない。そんな父親像が目に見えよう。それよりは、ごく普通のnLDK住宅の方が、俺の個室はないと言いつつながら、父親が居間に居場所をもつ……。？はずだ。

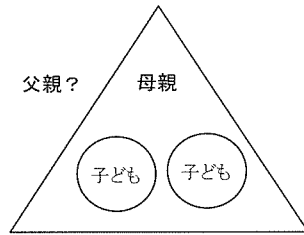
図一五 nLDK住宅の理想的イメージ



おわりに

nLDK住宅の理念を図にすると、家族皆のLDKを中心にして、一人一人の私室があるという構成になる(図一五)。しかし、ナワバリ学が明らかにした実態は違っていた。それを図にすると、家全体が母親の支配下になり、その中に子どもが部屋を与えられるというイメージになる。そして父親の存在感は薄い(図一六)。

図一六 現実のナワバリ構造のイメージ



以前の話だ。nLDKが求めた公私分離の理念は、いっこうに実現していないというべきなのである。

振り返って、日本では大正デモクラシーの時代に、都市サラリーマンの台頭や家族の民主化の動きを背景として、家父長が支配する家の中に、女や子どももプライバシーのある個室を持つべきだという主張が登場した。そして今日、母親が支配する家の中に居場所を求めるのは、誰だろうか。そう、父親だ。皮肉な歴史の巡り合わせというほかない。

nLDK住宅が目指した平等家族の理想は、まだ遠い夢なのである。

小林秀樹／こばやし・ひでき
千葉大学工学部都市環境システム学科教授。
本誌編集委員長。略歴は7頁参照。

〈参考文献〉

- ・小林秀樹『集住のなわばり学』彰国社、一九九二年。
- ・小林秀樹『現代住居における場の支配形態』日本建築学会論文報告集第48号、一九九五年。

記号に過ぎぬnLDKにも水面下の変化

供給局面は軌跡で読むしかない

山本 理

論争をよそに定着するnLDK

nLDKをめぐる議論である。機会をいただいた筆者も、かねてから3LDKばかりの供給には批判的な立場をとっていた。建築計画は、求められる機能を空間的に実現する技術であって、百人百様の生活の容れ物となる住宅が、揃って同じ設計像に収斂するはずはない。ましてや、住む人も見えない段階で、今度は3LDKを何戸つくる、という設計がいい設計であるわけがない、と思っていたのだ。

しかし、住宅供給の現実を直視すると、住む人に合わせ設計される住宅は、むしろ少数に止まることに気付かされる。事業者が先に計画した住宅を現実化し、消費者はそれを選択するだけという局面が多い上に、消費者自らが施主となる場合でも、生産者の提案そのままか、色彩や設備に少々の注文をつけるだけになることも少なくない。その際に参考にする既往例もnLDKばかりという事情もあって、nLDKの拡大再生産が止まらない。

拡散する議論は収斂するか

かくして、寡占状態にあるnLDK型住宅に対する批判や代替提案が展開されてきた。しかしながら、その主張やスタンスは必ずしも一枚岩ではない

ように見える。思いっくだけでも、①誰の住まいも同じ構成という画一性への批判、②繊細な調整を伴わない割り切りのよすぎる室分離への批判、③型式尊重で実生活に適合しない住まい方への批判、④崩壊を含む家族変容を顧みていないという批判、⑤閉鎖的で外に開かれぬ構えへの批判、など多様な議論があったと思われる。時には、⑥自己主張の強い外部デザインによる街なみ景観の混乱までもが、LDK型都市住宅のせいとされたりすることがある。

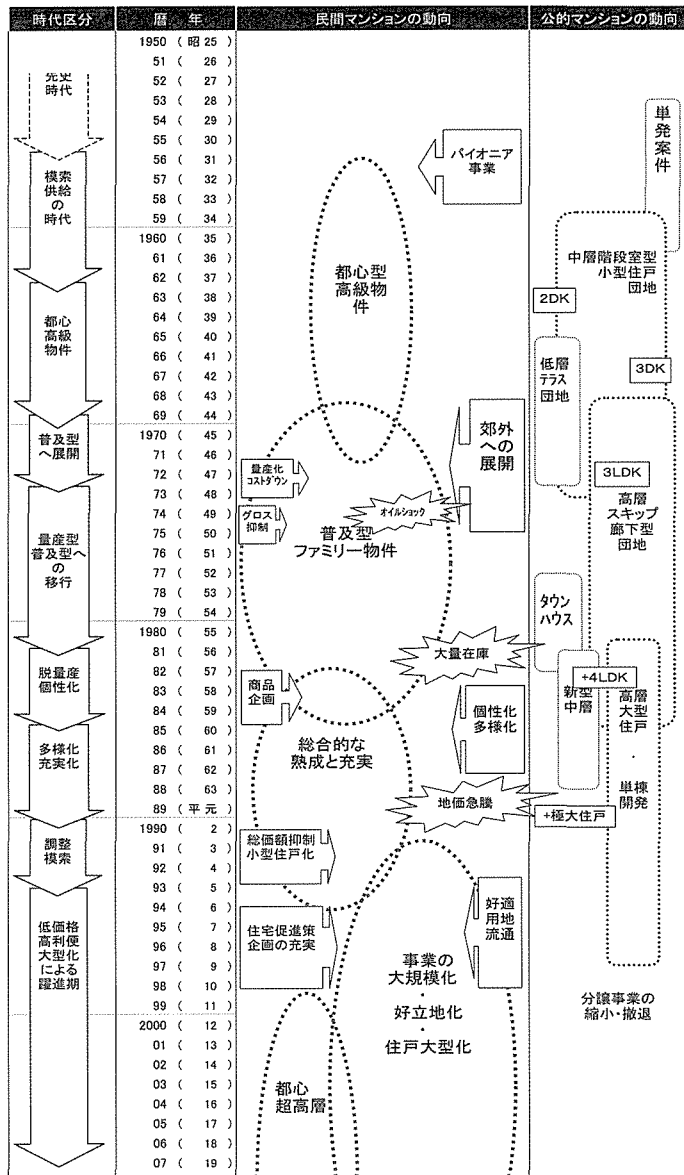
これらの論争は、建築計画への批判に止まらず、nLDK居住に代表される生活像を諸々と受け入れる家庭への批判や、そういった家庭が集積した現代社会への批判までもが加味されているようにも見える。純粹な建築計画としての議論であれば、この機能にはこの空間がネックだとか、この空間が美しくないからこうすべきだ、といった展開もあるはずだが、土俵をあまりに拡げると凡夫の及ぶところではなくなる。識者の整理をお待ちしたい。

そこで本稿では、住宅市場の現実という視点から、nLDKの位置づけを考察することにする。

3LDKを中心に回る市場

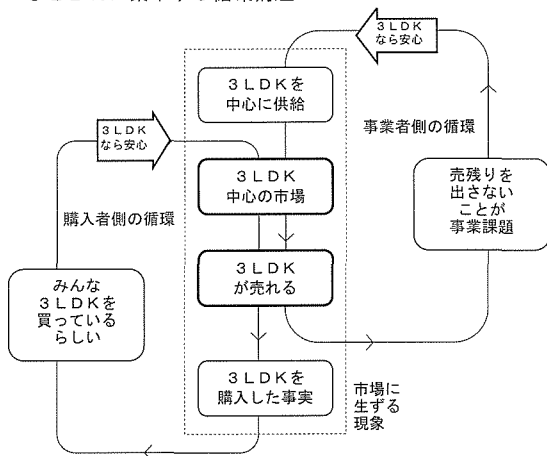
先に述べたとおり、ある時期からの住宅市場は、3LDKを中心としたn

図一 民間・公共マンションの変遷動向



資料：長谷工総合研究所作成

図二 3LDKに集中する循環構造



LDK住宅に席卷されてしまったようにみえる。戦後六〇余年の経過でみれば、半ばにあたる一九七五年前後が一つの節目になりそう。正確な統計ではないが、公的住宅では2DK・3DKなどのDK系列にL型住宅が加わり、民間マンションにおいても郊外化・量産化により3LDK住戸が急速に普及する。戦後供給史の前半は類を見ない急速な水準向上の時期であり、後半がnLDK化を中心とした熟成期にあたると思われる(図一)。

この過程で、特に分譲マンション市場が3LDKタイプに集約され、あたかも「事実上の標準」を構成してしまう循環については、家族員数とのミスマッチも含めて、以前に本誌に報告させていただいた(一九九九年春号)。企業活動による商品住宅として、期間内の完売を至上命題とせざるを得ない事業者側の事情と、横並びに安心感を覚える購入者側の事情が、この循環を定着

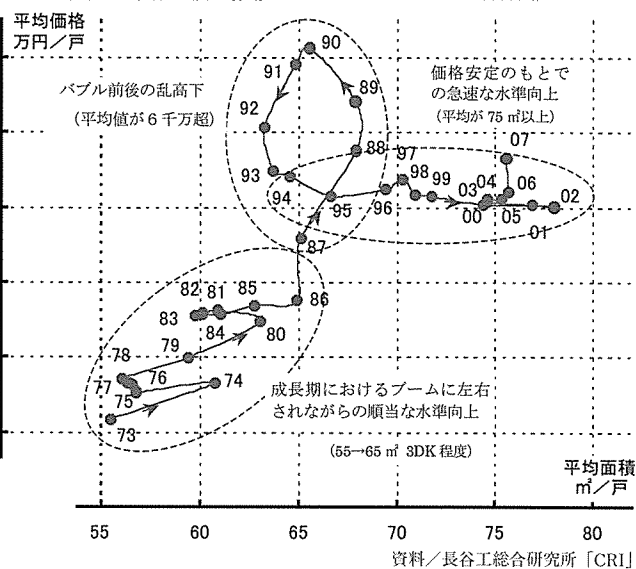
面積は急伸しても同じ表現

させたのである(図二)。

しかしながら、これは、多様な住戸を個室数で読みこんで表現する実務取引上の「記号化の結果」でもあって、実際の供給住戸は千差万別である。このことは、最小面積の中に当時求められた最小限度の空間機能を収容した51C型住戸の空間技法が、必ずしも全ての2DK住戸に継承されてはいないことに似ている。結果的に台所兼食事室+2室の組合せになったからといって、技法や工夫までもが同じではないのに、記号化すれば同じ2DKという表現でひと括りにされてしまうのだ。

任意かつ大量の供給住宅を時間軸をもつ体系に収めることは無謀ではある

図-3 分譲価格と専有面積の推移 (民間分譲マンション・首都圏)



資料/長谷工総合研究所「CRI」

が、首都圏の民間分譲マンションを例にとり、3LDKの普及期から三〇年余の平均住戸面積を平均価格と合わせて追跡を試みる(図-3)。立地など魅力度を左右する要素が加味されず、価格も購入力の考慮抜きだが、その時点における選択肢の中心と理解することにする。

グラフは大きく三つに区分される。最初の三分の一は、高

とつても、住戸プランが建築計画的なアプローチだけで構成されていないことは明らかである。

各時代のプランを見る

数多い事例それぞれは論じられないが、二、三の例を挙げてみたい。

図-4は、初期にあたる一九七三年の民間量産型住宅である。七〇㎡、七八㎡という面積は、図-3に示す平均像に照らしても大きい。郊外に展開したオイルショック前の普及型マンションの典型である。限られた面積に居室を機能的に配置し、と最も低位な個室とリビングが面積調整の要素とされている様子がうかがわれる。

図-5は、中期にあたる一九九一年度のニュータウン内公的分譲住宅である。二戸相当のスパノ一〇四㎡もの面積があるが、機能独立を確保するLDK型住宅のルールの厳正な適用で、居室は必ずしも大きくはない。むしろ各室をつなぐ共用動線が堂々としており、居室とも見まごう玄関やホールの存在に驚かされる。この件も、図-3の動きからはやや乖離しているが、市場動向に追従しにくい公的事业であり、上位計画に支配されたニュータウンでは、このような例が多々見受けられる。例示住戸は4LDK構成だが、3LDKでも九〇㎡前後の面積がとられている。同じ時期に、超一流とされるデベロッパーが五六㎡の3LDKを供給した事例(世田谷区)があり、その差に驚かされた記憶がある。

図-6は、後期にあたる二〇〇四年の民間大規模マンションである。この例では、住戸ごとに複数の平面が用意され購入者の希望で選択できた。例示した九五㎡住戸には、2LDKから5LDKまで三〇通りのメニューが用意された。生産面の裏付けが必要ではあるが、購入者・事業者の双方に多様性を許容する要素と気分が整ってきたことがわかる。

面積への対応と市場の習慣

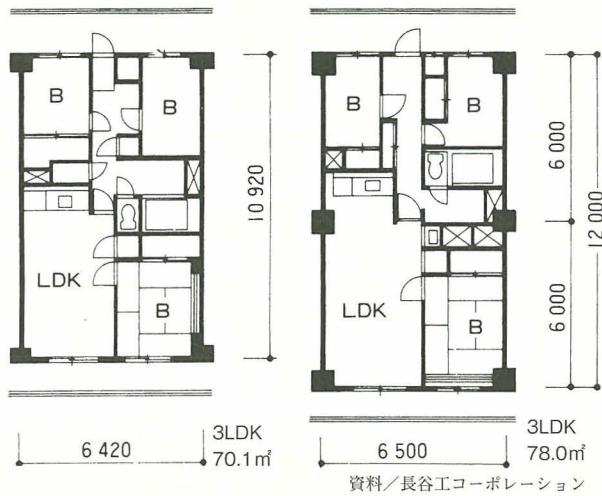
これらの例から理解できることは、①住戸の絶対規模が小さい段階では、

度成長の勢いを延伸し水準が向上した時期だ。オイルショックなど幾度かの後退はあるが、3LDKなみ五五㎡が3LDKが組める六五㎡前後まで成長した。この間、価格上昇が不動産神話にもなり、いわゆるバブルを招いたといえる。

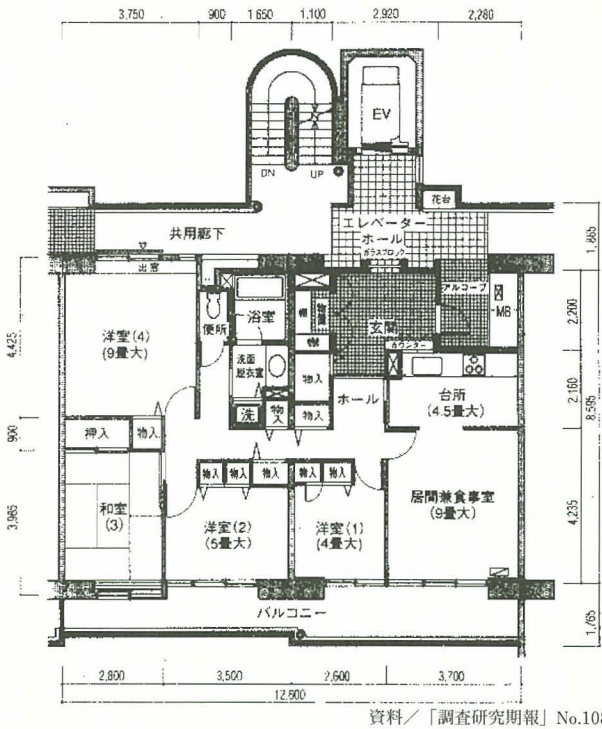
次の三分の一は、バブル前後の乱高下である。面積は伸びないまま六千万円もの高値がつき、市場を縮小させた。この時期には、総価額を圧縮する姿勢から規模水準はむしろ後退している。最後の三分の一がその後の長いブームを支えた規模伸長期である。下げ気味の価格のもとでピークでは一五㎡もの拡大があり、立地も都心寄り、金利も底という買いやすさが継続した。

あくまで平均値ながら、この三〇年間に分譲マンションの専有面積は二五㎡近い伸長を遂げている。その間も3LDKが中心であり続けたこと一つを

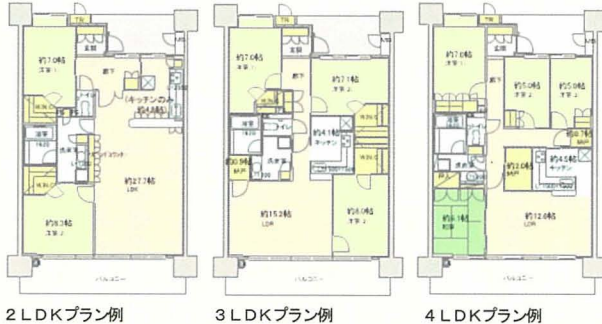
図一4 民間量産型住宅の平面 (1973年)



図一5 公的分譲住宅の平面 (1991年)



図一6 民間メニュー供給事例 (2004年)



所要機能の確保には合理的な設計を必要とするが、面積が拡大されれば計画面は自在になること、②そのような状況においても、取引市場においてnLDKといった呼称が、絶対面積や投入設備等とともに住戸の特性を表象する共通言語として機能すること、の二点である。

①に関しては、少なくともこの三〇年間は、nLDKの代表たる3LDKがミニマムの所要機能とされていた。これは家族像としてイメージしやすい核家族の居住を担保するものであり、資産として意識せざるを得ない二次流通への参加資格でもある。このため、洋風生活や耐久消費財の大型化と量的膨張を収容するに足る八〇㎡程度を大きく下回り、ついには五〇㎡台にも突入する住戸においても、3LDKが組まれてきた。

それらの小型3LDKでは、かつての極小住宅にみられた合理化や空間構成の工夫がしばしば登場する。逆に、拡大した住戸では、面積配分や機能配置の自由度が増し、空間の演出表現や住宅テイストは多様になることになる。

これは、個性の発露でもあり、市場競争の道具でもある。一九九四年以降の安定拡張期において、この傾向は強まっており、画一化批判は必ずしも当を得ていない可能性がある。

②に関しては、あくまで便宜上の表現ながら、個室数で住戸プロフィールを表現する商習慣が市場に定着してしまっている。米国でのベッドルーム数の表示とは定義が異なるが、あくまで国内の事情として、水まわりやリビングなど相応の機能が備わること前提に、個室数を表示することがわかりやすいためである。さらなる拡大があれば、複数のリビングやバスルームなど、この習慣では表示できない要素も入ってくるが、そのような型式は現状ではごく少なく、当面の不都合はないというのが実態であろう。

まだ規格外に冷たい市場

ここまでの考察で、住宅市場が挑戦や工夫のない惰性となりゆきの産物の

図-7 エルスイート住戸



資料/長谷工コーポレーション

これらは、前述の極小住戸における合理化や工夫に共通するもので、例示プランも少数世帯前提の小面積2個室住戸(六△二㎡)である。実際の供給もこの規模で試行されたが、七〇㎡台、八〇㎡台の計画も用意され、面積拡大にも対応

ように見えてしまうとしたり、筆力不足を反省したい。実態はむしろ逆で、さまざまな提案や事業企画が次々投げられ、消長を繰り返した結果が市場の変遷なのである。

これも本誌に報告済み(一九九九年春号)だが、「エルスイート」と命名された住宅タイプを例示する(図-7)。これは、nLDKタイプで一般的な遮断性の高い袋小路の個室や、住戸内の共用空間の面積非効率への対策として、一九九七年に企画され、試行的ながら実際に供給された。

「エルスイート」では、動線にしかならない面積を大幅に削減して生活空間を拡大し、集約したサニタリーに両個室と直結するパスを用意するなど空間機能を拡大強化している。各空間は、密閉性の低い壁や建具で仕切られ、遮断性よりは、生活者相互の気配察知や複数動線による使い分けを目指した。特に、リビングに連続する個室は、壁にも見える大型の吊りパネルで仕切られ、来客時の視線を遮ったり、昼夜で空間規模や機能配置を変更できる。これは、和室の多目的性や、その続き間による空間拡張性にも通じる空間の使い分けである。

していた。実現したら、図-5の対極に位置づけてきただろう

一般住戸に混在しての事業化では、当時の市場局面からマンション全体の分譲に時間がかかり、検討客の嫌好度も両極端に偏った。実際の購入者からは「こういうプランを待っていた」との声が高かったが、全体事業で苦戦したことが、次の事業機会を失わせた。これも市場対応の厳しい一面であり、供給プランが設計思想と技法だけでは成長できない事情を示している。

水面下での微速前進

最後の例は、市場淘汰の厳しさと同時に、生活者への浸透の難しさを示している。事実、供給前に試作された実験モデル住宅でも、視察した住宅系研究者・設計者の間でさえ、趣旨への賛同と、生活者としての拒絶感の両面の感想があり、「理屈を理解しても気持ち追いつかない」可能性を示唆した。

世の中には 一部の先端層の支持を得て緩やかに後続層に浸透する幸せな新規企画もあるが、住宅という高額かつ単品生産の商品では、直感的または爆発的な訴求力がないとスタートすら切れない。リーダーシップをとるためにはある程度の量的規模が必要であるが、公的供給のない現状の業界構造のもとでは、その障壁はことのほか大きい。

しかし、試みの中から市場に生き残り、定着を果たす企画もある。住戸規模が余裕を増す中で、そういった例の採用余地も広がったことが、nLDKを変えつつあるし、批判の幾つかを克服している可能性も信じていいと思われる。供給の局面は渦中にあつては判断すべきでない。nLDKをめぐる論争の交通整理と、現実市場の推移見守りはまだまだ必要と思えるのである。

山本理/やまもと・まこと

(株)長谷工総合研究所代表取締役所長

一九七六年、東京大学工学部都市工学科卒業

市浦都市開発建築コンサルタンツを経て、一

九九一年、長谷工コーポレーション入社。総

合研究所で集合住宅の計画・供給・維持管理

・更新などを調査・研究する。一九九九年よ

り現職。

特集 ● nLDKもわるくない

「2DK」がつくるnLDK

橋本直明

毎日、nLDKという言葉を使っている。というより、自分たちの設計事務所の名前にうっかり使ってしまったものだから、nLDKの呪縛から遠ざかることも和解除することもできずにいる。不覚にも同居してしまっているような感じだ。

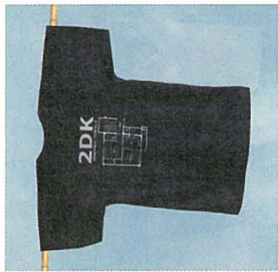
設計事務所名に「2DK」を掲げて五年ほどになる。正確にいうと「有限会社team2DK」。いわば「間取り」というキーワードのもとに集まった設計者による組織。住宅を設計している建築家の個人事務所の複合体として集合住宅を設計する組織をつくった。

nLDKを総括する、とかしないと、野望を掲げて結成したわけではなくて、どちらかといえば偶発的なものだったのだが。

【51C】

きっかけはTシャツ。当時、設計仲間でもオリジナルTシャツをつくるイベントがあった。プリントするグラフィックのネタを探していて、ふと目にとまった住戸プラン「51C」をTシャツに使ったらデザインとしても新鮮な気がして、実際に刷って見たら面白かった。

たかがTシャツだけど、自分の好きな「間取



旗印としての2DK



オリジナルTシャツ2DK

くても、2DKというキーワードなら誰でも知ってる。何よりも間取りの基本単位としての2DKの構成のバランスは、デザインとしてシンプルで美しかった。

そして発見した。nLDKという言葉の魔力を……。

2DKTシャツをつくっていた仲間と共同で設計するチームをつくらうということになったときに、その組織名に2DKというキーワードを採用した

り」を背負う感じは、設計の仕事

をする人間のアイデンティティと

して悪くない。有名な建築家、た

とえばコルビュジエとかミースの

プランを刷るのもそれはそれでカ

ッコいいけれど、建築マニア以外

にとつては、だから何なの？って

いう感じもある。しかし、51Cの

どこにでもありそうなプランの形

は、なぜかTシャツと相性がいい。

別に51Cという「歴史」を知らな

のはごく自然な成り行きだった。誰もが知っている言葉で、具体的でもあり抽象的でもあり、特定のイデオロギーに縛られることもなく、流行に左右されない便利な言葉。とりあえずの旗印としての2DK。

【ポイント】

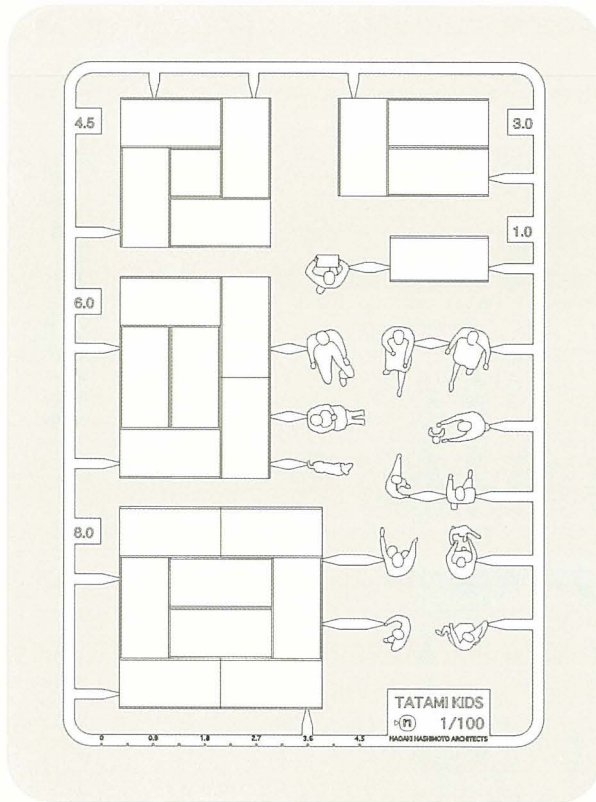
住宅を語る言葉で、nLDKという言葉ほどピュラーなものはあるだろうか。それで住宅を語ってしまうことに対する批判を持ち合わせていたとしても、果たして設計の打ち合わせの場で、その言葉を使わずにどれほどのことが語れるのだろうか。

それこそ、不動産屋さんの店先ではnLDKという言葉を使えば、プランがなくても住戸の基本的な価値が表記できてしまったりもする。LDK12帖、洋8和6洋4.5……というように、極端に省略されたアルファベットと漢字と数字の組み合わせで殆どの住戸のパターンが記述できてしまう。

それで全てが語れるものではないと誰もが知っているけれど、「nLDK」は住宅を探す基本的なキーワードであることは事実だ。

乱暴な言い方をすれば、nLDKという表記が不能な住宅は「検索できない」ということでもある。ネット上で不動産を探すなら、3LDKなのか4LDKなのか、2LDKしかないのか、そこから話は始まる。駅から近いとか、陽当たりがいいとか、使いやすい間取りであるとかは、その後に続く付加価値でしかない。

そうした検索方法、評価



※使用する図面の縮尺にあわせて拡大してお使いください。図は原寸で1/100です。

の仕方を嫌って、脱nLDKを指向するとすれば、不動産的価値基準から外れることを覚悟しなければならない。

グーグルの検索に引っかけられないウェブをつくるデザイナーがいないように、nLDKという検索キーワードを排除した住宅をつくることに、どれほどの意味があるのだろうか。好むと好まざると、住宅も不動産という商品であるからには、知ってもらってナンボな世界の中に建っているのだから。たとえnLDKでは語れないプランをつくったところで、nLDKではないマドリという表記が求められて……。

【タタミ】

住宅を設計していると、「nLDK」以上に「帖数」という単位の影響が大きいに振り回される。部屋数や部屋の物理的な広さが決って豊かさを語るものではないからと、全体の構成と部屋の配置を一生懸命考えて、平面図では語り尽くせない気分を模型に託して、プレゼンしたとする。それを見た

物差し tatami kids

クライアントも、「あー面白いね。この案はいいよ……」などと盛り上がった後で、遠慮がちに質問がくる。「……ところでこの子ども部屋は何帖なの？」建築家が、「えーと……9.2㎡ですから約5.7帖です」などと電卓を叩きながらしどろもどろに答えると、「そうか6帖ないのか……うーん、最低6帖は欲しいから、また違う案を考えてみてもらえませんか？」というように、部屋の帖数がすべてに優先するケースはよくあるというより、nLDKとセットになった「帖数」の数字は絶対的な価値基準として作動するのだ。「nLDK」と「帖」の組み合わせ。これが手強い。12帖のLDKと6帖の子ども部屋はOKだけど、3帖のLD

Kと12帖のnの組み合わせはNGだったりと、問題にすべきは、そこにある。

だから、nLDKという言葉を使っても、畳の枚数で空間の価値を語るには抵抗がある。

「tatami kids」という畳と人間を並べた「物差し」をつくったのはそんな気分からだった。設計したプランにその物差しから切り抜

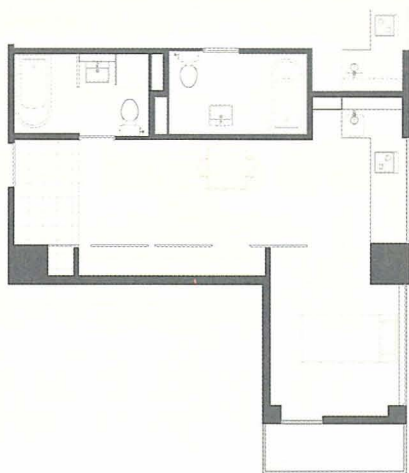
いた畳と人間を並べて広さや使い勝手を体験してもらえればいいと思った。「平米」ではよく分からない空間の大きさが「帖」という畳を基準にした単位に換算すると、とたんに身体的になるから不思議だ。

【-oZ : ASAKUSABASHI】

「team2DK」の設計活動で最初にしたのはワンルームマンションの設計。敷地いっぱいにポリウムを立ち上げて、小さく分割して住戸をたくさんつくる。しかしワンルームだから間取りなんて言ってる場合じゃない。nLDKとしては表記できない、住宅未満の単身者用の生活ユニットの設計。事務所の名前が2DKだから、ワンルームをただつくるのも何か割り切れな

気がして、プランをあこれ考えた。

住戸のユニットは敷地の形状からL型のプランになった。L型が二つ対になってTシャツ型のプランになっている。半チャーハンならぬ半Tシャツ型のプラン。細長く折れ曲がった住戸は、ワンルームと1LDKの中間のような間取り。くびれた部分をゆるやかに仕切れるように収納扉を兼ねた間仕切りパーティションを配置して、なんとなくnLDKのnが0と1の中間にあるようにしてみた。



ASAKUSABASHI



N's Bau

る。しかしここでは、nLDKの構成に住戸毎の個別的なパターンが生成可能ないようにポリウムを設定した。

住戸の基本的な規模設定としては、マンションに標準的な「3LDK」がつけられるスケルトンを設定していた。分譲マンションのマーケットとして一般的なニーズを踏まえて設定するものの、コーポラティブ購買層はDINKSもしくは子どもが一人の三人家族。収容人員的には2LDKで足りてしまう。むしろnは個室の数というような収容人数のことではなく、ライフスタイルや生活シーンの数として求められていたりする。寝室以外のSOHOやAVルームであったりと、ここではnLDKはLDKとn個の生活のパターンをレイアウトする作業になった。

【LDK+a : N's BauH】

コーポラティブハウスの計画のこの住戸は地下住戸であった。採光面の制約から、間取りは比較的普通のマンションに近いものになることが想定されていた。両側に開口部をもつスケルトンを二分割して、その片側をさらに分割してnを並べて、2LDKのプランを計画していた。

nとLDとKの集合としてのオーソドックスな住戸プラン……と、そこま

【LDK+c : N's Bau】

コーポラティブハウスの企画と設計をした、八戸の住戸からなるオーダーメイドの集合住宅。2LDKと4LDKの住戸がつくれるようにさまざまなタイプの住戸ユニットを用意し、戸建的な個別解の集合体の要素と集合住宅的なユニットの分割の感覚の入り交じった建物を計画した。通常のマンションの場合、建物全体を規則的に分割して反復する住戸ユニットをつくり、その中をまた規則的に分割してnLDKの間取りがつけられるようにするのが定石ではあ

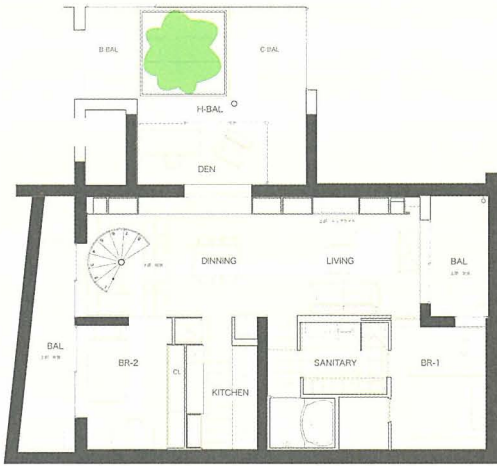
ではよかったのだが、想定外のこと起きた。設計中に建物全体の地下プランの調整を行なうことになり、思わぬところにサンクンガーデンができた。地下住戸の環境改善のために、ピットであった部分がテラスとして利用可能になったのではあるが、そんなことが起こる前に住戸プランの間取りの骨格は固まっていた。相談したところ、新たに利用可能になった、リビングの壁面収納の裏側にあたる部分を書斎として利用したいという話になり、壁面収納の一部をくりぬいて部屋をつくった。

結果としてnLDKに増築された、もうひとつのn。家具の向こうの秘密の小部屋のような空間ができた。個室と並列なnではなく、リビングの収納のユニットが部屋になったような構図が生まれた。

【LDK : KLDK】

三階建ての3LDKの一戸建てを設計している。実は3LDKは難しい。三階建ても難しい。

nLDKとは、そもそも2DKが原点であるように、単位としては三つの部屋の集合体、二つの小さな部屋(n)とそれを統合する大きな部屋(LDK)の組み合わせが基本にあるように思える。だから、一戸建てのニーズとしては3LDK、4LDKがメインではあるものの、nが3以上はあまりいい絵にならないのだ。個室が三部屋以上あると、住戸全体の分割の方法よりも帖数で規定されてしまう



N's Bau - H

ような部屋の集合という側面が強くなるからだ。

三階建てという分割の母数もどこかなじみが悪い。二階建て、3LDKもしくは(子どもが大きくなったら分割可能な)2.5LDKというようなnLDKの定型が、三階建てでは想定されていなかったのだと思う。

単純に考えると、一階に水廻り、二階にLDK、三階に個室を……というパターンになるのだけれど、するとnLDKの同一平面的な構成という家族の関係の図式を描くことはできず、階毎に要素が分断されたテナントビルのような構成になりがちだ。

そこでちよつとnとLDKの組み合わせ方を変えたプランをつくってみた。一階は水まわりだけ、二階はDKと主寝室(和室)、三階はLと子ども部屋(1.5室)。階段吹抜けでつながれた立体的なLDKとnの関係、あるいはDKの+aとしての和室(あるいは主寝室)、Lの+aとしての洋間(あるいは子ども部屋)という、二階の1DK+三階の2Lの3LDKをつくってみた。



3LDK / 3F

nLDKといってもバリエーションはたくさんある……と思いきや、L+a、DK+ aの機能性は好評だったが、LとDKを分割したのが不評でこの案はあっさり没。LとDとKの関係はなかなか難しい。今はLDKを二階に配置したLDKをゆるく四つに分節する案をつくっている。

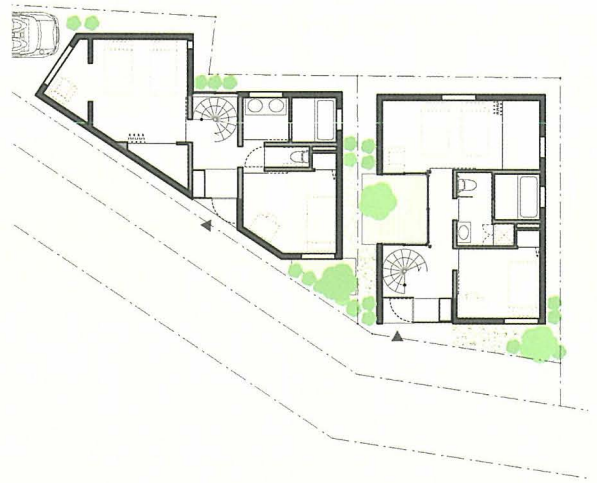
【LDK + CLDK : Cuore Uno】

最近、建売りもやっている。これも企画から関わっているのだけれど、建売り住宅の間

取りは不動産マーケットで流通しやすい3LDK〜4LDK。このプロジェクトでは、nLDK以外のプランを考えるつもりはない。広告を打つてもnLDKで表記できなければ、誰も興味をもってくれない。別な言い方をすれば、広告媒体にnLDKと記述できれば、どんな空間だって気にしてもらえない。

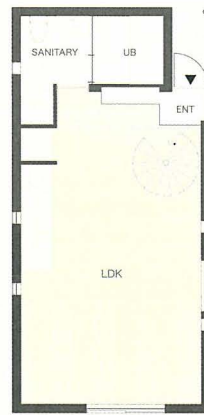
という、ずいぶん醒めたような態度にも見えるかもしれない。それはコーポラティブハウスを手がけた経験が少し影響している。いわゆるnLDKという定型から外れたプランは単体の一戸建てであったり、そのパターンが反復する集合住宅であれば意味がある。しかし戸建ての集合体であるようなコーポラティブハウスという枠組みのなかではひとつひとつのnLDKの解体構築作業に腐心したところで、その集合としてはまるで無力な気がした。微妙な差異にもならない趣向をこらしたビルインのテナント群……のような。建売りも同様だ。複数の住戸が並ぶと、ユニット自体は外壁に囲まれて独立しているものの、全体の敷地分割という論理から見れば集合住宅に近い。スケルトンとしてはビッグワンルームも可能なように、柱の少ない構造体を用意して、ニーズに合わせて仕切ってnLDKに仕立てて、というようなストーリーを用意した。あとはひたすらに売れそうな間取りのパズルをつくっていく。nとLDKに過剰な意味を持たせない。

むしろ、設計の主眼はスケルトンとnLDKの分割パターンによるバグの



Cuore Uno - Mb5

は使い続けるだろう。nLDKというキーワードを無期限、無批判に利用し続けることには留保条件をつけるとしても、ぼくらはまだnLDKというキーワードを使いこなしていないような気がするのだ。それが個室のレイアウトの定型を記述するツールだと思いついて捉えれば、まだまだ有効なツールだと思う。Tシャツに刷って、現在に至る間取りの歴史をひょいと背負うことだってできるのも実験済。



1F



2F

Cuore Uno - Kz4

発生の方やnLDKの住戸群の集合の方、住戸をnという部屋に見立てた、分譲地全体のnLDKというような集合と分割のパターンを探ることにしている。

【LDKはわるくない】

こうしてここ数年の活動を振り返ってみると、(事務所名に2DKを使っている以上に)nLDKという言葉なしに住宅を設計することはできないのではないかと思ったりもする。そしてそれに代わる共通言語が見つからない限り

橋本直明／はしもと・なおあき
建築家。team2DK取締役。
一九九一年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。九三年、同大学院建設工学修士課程修了。九六年、橋本直明建築設計室開設。二〇〇四年、(株)team2DK設立。
戸建て住宅や集合住宅の企画、設計を行なう。

ハウスメーカーから見た

nLDKと脱nLDK

住宅マーケティングの視点から

小間 幸一

はじめに

少子高齢化が進行し、ハウスメーカーが長らくターゲットとしてきたニューファミリー（主に三〇歳代の夫婦と子ども世帯、以下同様）が減少するなか、住宅着工数も減少傾向にある。市場を細分化し直し、新ターゲットの発見と供給のためのnLDK住宅に替わる新しい定型の住宅を開発しなければ、ハウスメーカーの市場は縮小の一途をたどるだろう。

本稿では、ハウスメーカーからみたnLDKとその変化の方向を、業界の競合環境や消費者動向を踏まえ、マーケティングの手法を使って検証し

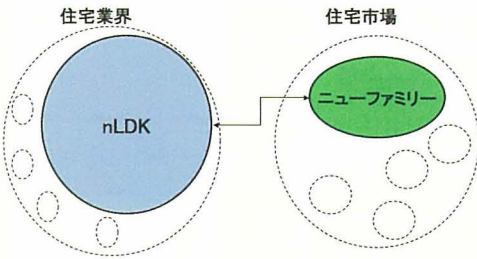
ていきたい。

なお、本稿ではハウスメーカーを「注文住宅のみでなく分譲戸建住宅や分譲マンションを供給する事業者」とする。

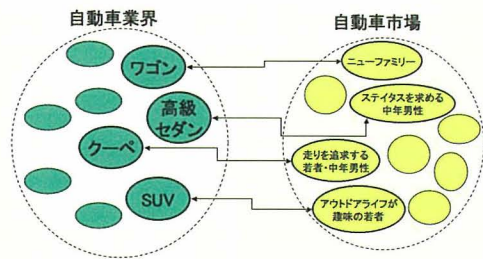
1 ハウスメーカーから見たnLDK

ハウスメーカーはnLDKという住宅を考

図一 住宅業界における定型と消費者の関係のイメージ



図二 自動車の定型と消費者の関係のイメージ



型、いわゆるプロトタイプをどのように見ているのだろうか。この問いは、ハウスメーカー側から答えることは意外に難しい。なぜなら、筆者も含めハウスメーカー側の人間は、当然のようにnLDK住宅をつくり、消費者は当然のように購入するという関係に、埋没してしまっているからである。そこで、全体を俯瞰するために、異業種である自動車の例とも比較しながら検討したい。

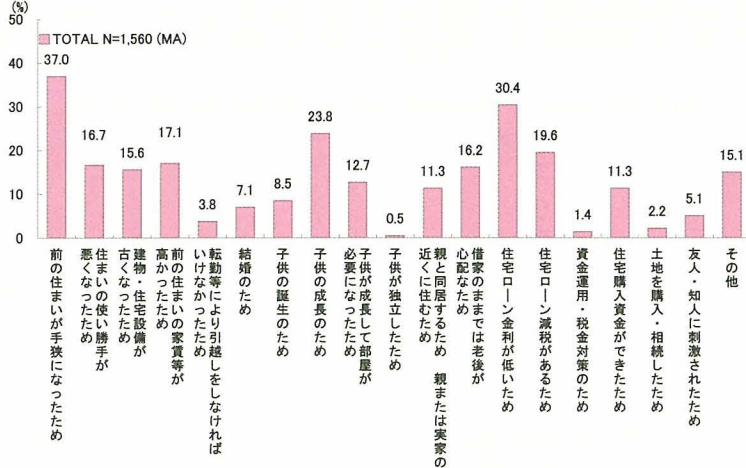
自動車の定型（いわゆるプロトタイプ、以下同様）と消費者の関係をイメージで表現すると図一のようになる。定型は一つではなく、「ワゴン」「セダン」「クーペ」「SUV」等々複数存在するの

があたりまえである。そして、「ワゴン」は「ニューファミリー」、「クーペ」は「走り」にこだわる若者や中年男性」といった具合に、最適と考えられる消費者に対応させている。つまり業界と市場の関係は、「複数定型に複数ターゲット」という状況が成立しているのである。

これに対し、図二は住宅業界における住宅の定型と消費者の関係のイメージである。定型は、消費者が一般的に認識するレベルでは、ほぼ「nLDK」しか存在しない。そして、「nLDK」には主に「ニューファミリー」が主要ターゲットとして対応している。業界と市場の関係は、「一定型に一定ターゲット」という状況である。自動車とは全く異なる特徴を持っている。

では、なぜ、自動車業界のように「複数定型に複数ターゲット」とならないのか。それを明らかに

図一三 住宅購入の理由*1

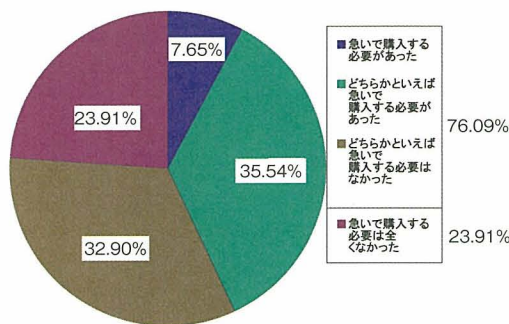


にするために、消費者の事情とそれを供給する住宅業界の事情の二方向から検討したい。

1-1 消費者は「安心」でnLDKを選ぶ

まず、「消費者」の事情である。nLDK住宅の購入者は、都市に流入して定住したニューファミリーが多い。しかも、ほとんどが一次取得層、つまり初めての購入者である。住宅は、最も高額で超長期間使用し、しかも家族全員を満足させなければならぬという難しい製品である。つまり失敗のリスクが非常に高い。そのような住宅を、い

図一四 住宅購入者の時間圧力の実態
(現在の住宅購入は時間的に急を要したか)



安藤和代「急を要する住宅購入者の情報処理行動について」(『住・生活研究』02号所収、東新住建(株)経営研究所、2006年10月)。

つたいどのような思いで購入しているのだろうか。

東新住建(株)経営研究所が二〇〇六年に東名阪一五六〇名の住宅購入者に実施したアンケート*1から、住宅購入の理由を見ると(図一三)、住まいの手狭感(三七%)、住宅ローン金利が低い(三〇・四%)、子どもの成長(二三・八%)がベスト3である。子どもの成長が空間の手狭感を誘発すると考えれば「子ども」が住宅購入の最大の理由となっているのである。

さらに「急いで購入する必要があったか」という問いには、「急いで購入する必要は全くなかった(二三・九一%)」という回答を除き約七〇%を超える購入者が、なんらかの時間的切迫状況の中で購入を決定したという結果が報告されている(図一四)。「子ども」のために「急いで購入する」のが一般的ということである。このような状況では、

失敗のリスクに敏感になり保守的傾向が強くなるであろう。その結果、「わかりやすく、多くの人が購入するnLDK住宅」が「安心」できるので選ばれることは想像に難くない。このような「ニューファミリーを中心とした消費者」の事情が、nLDKという定型の市場への定着を後押ししていると考えられる。

1-2 業界にとってnLDKはあたりはずれのな

い切り札

次に、「住宅業界」の事情を検討したい。住宅業界がnLDKという定型にこだわるのは、上述のように消費者の保守的な選択が関係していることはもちろんだが、ハウスメーカーを含む住宅業界の構造、特に競争関係が大きく関係しているのではないだろうか。

日本の住宅業界(注文戸建住宅、分譲戸建住宅、分譲マンションを含み、貸家を除くものとする)は上位四社の着工数全体に対するシェアがわずか九・三五%しかない。業界を牛耳るほどのマーケットリーダーが存在せず、多数の企業がしのぎを削っている多数乱戦業界である*2

一方、自動車業界は、国内シェア(二〇〇五年新車販売台数(登録車)上位四社(トヨタ、日産、ホンダ、マツダ)で約七九・二四%を占める。その中でもトヨタのトヨタの国内シェアは約四五・九九%もある。住宅業界とは全く様相が異なることがわかる。

このため住宅業界では、年間売上高一兆円という業界トップクラスのハウスメーカーと社員数十

人程度の工務店とが一人の顧客をめぐる競争奪戦をするのは日常茶飯で、業界のプレーヤーの最大の関心は、日々の売上げのための目の前の営業競争に集中しがちだ。その結果、nLDKといういわば当たり外れの少ない「切り札」を積極的に取り込むことで、住宅の定型開発というような成果の見えにくいことを一時棚上げし、日々の苛烈な営業競争に経営資源を集中しがちになるのは自然の成り行きといえるだろう。住宅業界にとってnLDKはわるくない「切り札」であったといえるだろう。

2 主要ターゲットおよびnLDK住宅の変化

このnLDK住宅に、実は大きな転機が訪れている。ここでは、主要ターゲットであるニューファミリー等の各種世帯の動向とnLDK住宅の価格に大きく影響する原価（工事原価および土地原価）の動向を取り上げてみたい。

2-1 ニューファミリーおよび各種世帯の動向

単独世帯、夫婦のみ世帯、夫婦と子ども世帯等、世帯種類別の世帯数の変化を見ると、ニューファミリーを含む夫婦と子ども世帯が減少し、単身世帯が増加していることがわかる。さらに、夫婦と子ども世帯の年代別の変化で、nLDK住宅の主要ターゲットであるニューファミリーの動きを細かくみると、三〇歳代の夫婦と子ども世帯は二〇〇五年を境に激減、驚くことに、二〇〇五年から

二〇二五年までに約四〇%の減少が見込まれるのだ。そして、夫婦と子ども世帯の減少と単独世帯の増加は、一方で世帯規模の縮小というかたちで表面化し始めていると考えられる。二〇〇五年に二・五六人であった平均世帯人員は、二〇三〇年には二・二七人まで減少すると推測されている*。これは、ハウスメーカーにとって衝撃的な事実だ。まぎれもなく市場の縮小を意味しているからである。

一方、住宅購入に避けて通れない収入状況について国税庁の民間給与実態統計調査によると、民間給与所得者の平均給与は平成九年から一貫して下がり続けている。このことが、住宅の購入意欲にマイナスの影響を及ぼすことは想像に難くない。購入予算の低下、購入の検討期間の長期化だけに留まらず、最も懸念されるのは「住宅を購入するより借りる」というライフスタイルを定着させてしまうことである。

国土交通省の調査では、持ち家志向の減少傾向、借家志向の増加傾向が報告されている。上述のようにただでさえ市場の縮小が危惧される住宅市場に、さらなる縮小要因が追い討ちをかけることになるかもしれない。ハウスメーカーには逆風の市場となったといえるだろう。

2-2 nLDK住宅の原価動向

（財）建設物価調査会の建設物価建築費指数によれば、個人住宅および集合住宅の各工事原価も二〇〇五年頃に一旦下がるものの、以後上昇傾向をた

どっている。その理由として、近年の世界的なインフレ傾向と住宅業界が多数乱戦の過当競争であることがあげられる。たとえばこの業界では、各ハウスメーカーは営業力を武器に顧客を常に取り合っている。その結果、顧客が希望するからとA社がやればB社もやる、するとC社もという具合に、「水まわり設備・空調設備・建具・収納等」を新たに付けたり、レベルアップしたりする。さらに、販売時に景品を付けたり、間取りの模倣を連鎖反応的に繰り返す。自ずと過剰品質となり、原価が上昇する。「nLDK住宅の重裝備化」である。

土地価格についても（財）日本不動産研究所の市街地価格指数をみると、平成一八年三月から平成二〇年三月までの半期毎の比較では、六大都市の住宅地では〇・七〜四・七%の間で上昇傾向で、一方、地方の住宅地ではマイナス〇・三〜マイナス一・七%の間で下降傾向にある。まあまあ良い土地は上昇、そうでない土地は下降というまだら模様である。つまり、ハウスメーカーが分譲戸建住宅や分譲マンションのために欲しがるといえる良い土地は全国的に上昇傾向なのである。

このような工事原価や土地原価の上昇傾向は、原価、価格、売上げの關係に変化を引き起こす。つまり市場縮小と平均給与低下という市場の構造的変化の中で、かろうじて維持してきた「原価上昇、その結果、販売価格上昇、にもかかわらず売上高増加（着工数増加）」というハウスメーカーの売上げメカニズムが「売上高減少（着工数減少）」

へと変化し始めているのである。

現実には、注文戸建住宅、分譲戸建住宅、分譲マンション等々の着工数は減少傾向にある。

3 脱nLDK

では、ハウスメーカーは、市場の縮小と売上高減少（着工数減少）に、どのように対応すればよいのだろうか。

3-1 市場細分化

ニューファミリーの減少による市場縮小は、「住宅市場」＝「ニューファミリー市場」という考えが通用しなくなったことを示している。あらためて市場全体を俯瞰し、ニューファミリー市場をターゲットとして押さえながらも、新たな市場を発見することが求められる。その方法として、市場をある切り口で細かく分け（市場細分化＝セグメンテーション）、最も力を発揮できる市場を狙う（ターゲットティング）というマーケティングの手法が有効であろう^{*4}。どのような切り口を選ぶかが重要であるが、図1-5のように、切り口には多様な種類がある。

そこで、この多様な切り口を使って、細分化を試みてみる。たとえば「世帯規模（家族数）」という切り口で、四大家族ではなく「三人家族」という細分化市場を設定してみる。さらに「年収」を切り口に、「職業を持つ主婦のいる家族」、あるいは「住宅購入には収入がやや低めの家族」を市場として再評価するなどということもできるだろう。

それぞれ、市場性の検証は必要ではあるが、切り口を工夫することでユニークな市場が出現するであろう。

3-2 脱nLDKの方向

細分化した市場にどのような住宅を提供すればよいか。nLDKを流用するのか、それとも全く新しい定型を開発するのか。この場合も、マーケティングの概念であるポジショニングが大いに参考になる。簡単に言えば、ポジショニングとは、提供する製品をターゲットからどのように理解してもらおうのかということである。言い換えればターゲットが理解できる他の製品との魅力の違いを考えることである^{*5}。

もう一度、自動車業界にヒントを与えてもらう。この業界では、「セダン」「クーペ」「ワゴン」「SUV」等の多様な定型が存在する。これは市場を細分化し、それぞれの小市場向けに投入されているのである。例えば図1-6（以下5頁）は、「ワゴン」はニューファミリー市場に家族仕様（子どもでも安全に出入りしやすいスライドドア等）でリーズナブルな価格で投入されていることを示している。このポジショニング図では、「ク

図1-5 代表的な市場細分化の切り口

地理的変数	地域、人口密度、気候、都市の規模等
人口統計的変数	年齢、世帯規模、ライフサイクル、所得、学歴、宗教等
サイコグラフィック変数	ライフスタイル、パーソナリティ等
行動的変数	使用機会、使用頻度、ロイヤリティ等

恩蔵直人「マーケティング視点による住宅業界の再考」
〔住・生活研究〕01号所収、東新住建(株)経営研究所、2006年）の図版に、東新住建(株)経営研究所にて一部加筆。

ーペ」は第三象限に位置し、ワゴンがクーペよりもニューファミリー向けの差別化の特徴を圧倒的に持っていることを示している。

では、3-1で述べた「住宅購入には収入がやや低めの家族」という新しい細分化市場には、どのような住宅を提供すればよいのだろうか。

たとえば新しい住宅の定型を次のように考えたのだろうか。2-1で述べた「世帯構成員の減少傾向」「平均給与減少傾向」という消費者動向から、図1-7のように「軽装備」軸と「リーズナブル（価格）」軸といった二軸で表現してみる。一律にフルスペックの「水まわり設備・空調設備・建具・収納等」を装備する「重装備」ではなく、ターゲットの立場で要不要を厳密に検討し、メリハリの効いた設備ラインナップの「軽装備」であれば、価格はリーズナブルになる。「住宅購入には収入がやや低めの家族」という小市場で新しい住宅の定型がポジショニングできる。図1-7を見れば明らかだが、従来の重装備で価格が高めの傾向のあるnLDKとは異なるポジショニングである。

図1-6、7はあくまでポジショニングの一例である。違う軸を見つけ出せばもっとびつたりとしたポジションを設定できるかもしれない。そこは担当者の腕の見せ所である。住宅市場を常に多様な切り口で細分化し直し、新しい定型を創ってあげては差別化を試みる、つまりポジショニングするという行為が重要なのである。このように、従来の単一の市場、単一の定型にこだわらない住

宅マーケティングが、脱nLDKの方向として強く求められるのではないだろうか。ただし、減少傾向とはいえニューファミリーがなくなるわけではなく、一定のポリウムを維持することは間違いない。このことは、従来の重装備のnLDK住宅も市場で一定のポリウムで流通することを意味する。したがって、ここでいう脱nLDKの意味を補足すれば、nLDKが住宅の定型としてオンリーワンからワンオペゼムになったと理解するのが正しいだろう。

本章の最後に、nLDK以外の定型開発のチャレンジングな例を紹介したい。東新住建(株)経営研究所では、東京大学の千葉学准教授と共同研究に取り組んだ^{*)}。ターゲットは単身世帯である。開発された定型のコンセプトは、図18に示すように「単身を起点とする柔軟なライフスタイル」と「コンパクトで選別的な設備や機能」の二軸でポジショニングされるものであった。その「単身世帯向け定型」は、単身のジャスト・サイズ感を維持するという意味で「ジャスト・ハウス」(Just House)、さらに、単身からの居住人数の変化に対応し空間の取りようをadjust(調節)するという意味で「アジャスト・ハウス」(Adjust House)と命名された^{*)}(写真1-1)。

3-3 脱nLDKの困難さ

ここまで述べてきた脱nLDKの定型のコンセプト、たとえば「軽装備で価格がリーズナブル」な住宅を製品化して市場へ投入する場合、容易か

といえそうでない。数々の困難を伴うだろう。困難の本質は、組織の学習棄却(unlearning)および学習(learning)にある。学習棄却とは戦略・戦術が意図したものと結果にギャップが生じた場合、既存の知識や行動様式を捨て去ることを意味し、学習(learning)は、新しい知識や行動様式が探索され既存の知識や行動様式の変更や革新がもたらされることを意味する^{*)}。

これらの概念を使えば、困難の本質は次のように説明できる。ニューファミリーとセットになったnLDKに取り組むことでハウスメーカー内に定着した知識や行動様式は、強い成功体験に裏打ちされている。そのため、定着した知識や行動様式を捨て(学習棄却)、新ターゲットと新定型に取り組むことで新しい知識や行動様式を再度取り込むこと(学習)は、自らの成功体験を否定することにつながると思われやすい。したがって、ハウスメーカーや住宅業界内部の強い抵抗が予想される。ニューファミリー向けのnLDK住宅の供給も同時に行なっているとすれば、その抵抗はなおさらであろう。以下、具体的に困難さを例示する。

①販売単価を低下させることの困難さ

現状のnLDKは重装備化されていて原価が上昇傾向にある。これは、当然売上げ単価が上昇気味であることを示す。ところが過剰品質を廃したリーズナブルな定型を考えざるを得ないとすれば、表面上は、売上げ単価と利益の低下を意味することになる。これには、ハウスメーカーの経営層や

営業現場には抵抗感が強いだろう。しかし、ニューファミリー向けの重装備のnLDK住宅のみでは業界全体を維持できないことは明らかである。適応すべき市場を細分化から発見し、それを手かりに新しい定型の住宅を投入し市場自身を創造していくことが必要なのである。神戸大学の石井淳蔵教授も著書で「創造的適応」^{*)}という概念を提唱しているが、まさにそれに該当するだろう。ポイントは、一見、販売単価と利益の低下に見える施策を、経営者が市場の創造的適応につながると思えられるかどうかにかかっている。

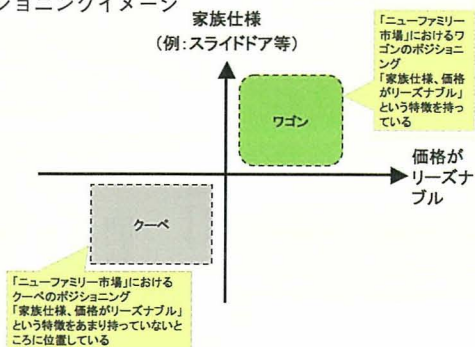
②日常の競争から離脱することの困難さ

全く新しい定型に取り組むとなると、一定期間は集中してゼロから取り組む必要がある。それは、戦力の一部を競合他社との競争から一時離脱させることになる。しかも、新しい定型が定着するかどうかは、長い努力の果てに出る結果である。多数乱戦業界のため、成功してもすぐに模倣される。これらのことは、ハウスメーカーの経営層や営業等、現場側のあせりと呼ぶことになる。しかし各ハウスメーカーがこの苦しい状況に取り組み、新たな切磋琢磨をしなければ、新市場(ターゲット)は創造できない。

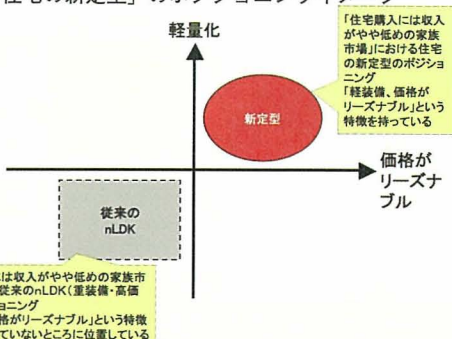
③消費者とのコミュニケーションの困難さ

消費者は、高額で家族の人生がかかった買い物にただでさえ不安を感じている。その上、馴染みのnLDK住宅でない定型の住宅を選ぶことには心理的な抵抗が強いであろう。これに対して、ハ

図一六 「ニューファミリー市場」に向けた「ワゴン」のポジショニングイメージ

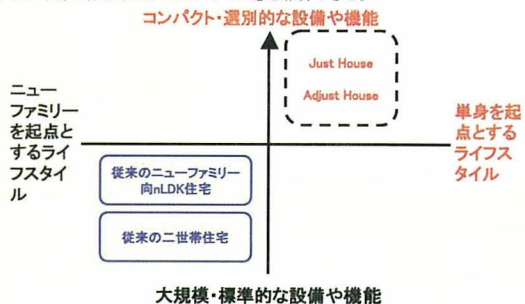


図一七 「住宅購入には収入がやや低めの家族」市場に向けた「住宅の新定型」のポジショニングイメージ



図一八 単身世帯向け住宅の定型 (Just House・Adjust House) のポジショニングイメージ

単身を起点とし、居住人数の変化を伴うライフスタイル変化に対応するため、コンパクトな空間の取りようをAdjust (調節) する機能を持つ住宅のプロトタイプ。単身の体と心のジャストサイズ感を維持できる。



写真一 千葉学+千葉研究室 (東京大学大学院工学系研究科建築学専攻) の単身者向け住宅の定型を具体化した「大小の家」原寸大模型 (発泡スチロール製)。シンポジウム「製品としての新住宅開発」(主催: 東新住建(株)経営研究所・2005年5月13日)の会場前(東京大学・本郷工学部新2号館)で当研究所スタッフが撮影。

ウスメーカー側からの一人ひとりの消費者の将来を見越したわかりやすい説明が欠かせない。たとえば、あなたはnLDKが最適だが、あなたは別の定型の住宅が向いている、といった具合である。消費者も、自分や家族の人生をしっかりと見据え、自らの判断で自分や家族の生活に合った住宅の定型をまわりのトレンドに流されずに選択するのだという覚悟と勇気が必要になる。それらをハウスメーカーがサポートすることが求められるのである。

このように困難を伴う脱nLDKへの試みは、ハウスメーカーに長期間の苦しい戦いを強いことになるだろう。しばらくは自らの存在を賭けた試行錯誤が行なわれるに違いない。しかしこれらは、自動車業界などでは普通に行なわれていることは、自動車を伴う脱nLDKへの試みは、

東新住建(株)経営研究所。
一九八六年、早稲田大学社会科学部卒業。二〇〇四年、放送大学大学院総合文化プログラム修了。大手自動車会社ハウスエージェンシー(広告代理店)等を経て現職。
マーケティング視点から住宅の需給バランスや業界構造、住宅開発等に取り組む。また、住宅開発や住宅購入者動向をテーマにさまざまな大学研究室との産学共同研究も実施。成果は同研究所の研究誌「住・生活研究」に公表している。

小間幸一/こま・こういち
東新住建(株)経営研究所。

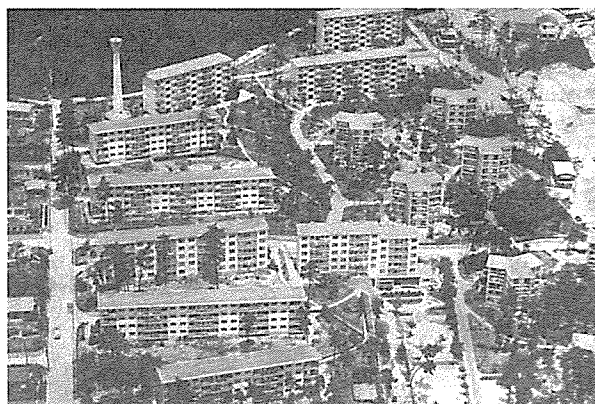
- 〔註〕
- この調査については、「住宅購入者ウエブ調査報告書」(東新住建(株)経営研究所、二〇〇六年)を参照。
 - M・E・ポーター著「競争の戦略」(ダイヤモンド社)で示される「多数乱戦業界」の概念参照。
 - 「日本の世帯数の将来推計(全国推計)の概要」国立社会保障・人口問題研究所、二〇〇八年三月推計。
 - 恩蔵直人「マーケティング視点による住宅業界の再考」〔住・生活研究〕01号、東新住建(株)経営研究所、二〇〇六年。
 - 恩蔵直人「五つの誤解を払拭する(コトラー)に学ぶマーケティング」〔シンク〕No.14、二〇〇五年。
 - 千葉学「新しい住宅に向けて」〔住・生活研究〕05号、東新住建(株)経営研究所、二〇〇七年。
 - 小間幸一「ジャスト・サイズ住宅」(同右)。
 - 「失敗の教訓」(ダイヤモンド社)「失敗の本質」所収。石井淳蔵「マーケティングから見た企業の現在の課題創造の適応とマーケティング・マネジメント」(日本経済新聞社広告局編「経済マイスター」による知力講座)所収。

私のすまいろん

〇DK、団地暮らしもあるくない

—団地族の視点

脇田 健一



写真—1 御影団地



写真—2 御影団地の公園で

昭和三三（一九五八）年、私は、兵庫県神戸市に生まれました。昭和三三年生まれということからもわかるように、私の子ども時代は日本の高度経済成長とともにあった。父は造船業界のサラリーマン。転勤を繰り返した。本社のある神戸からスタートして、下関、小倉、福岡、広島と、西日本にある支店をぐるりと一巡りして、再び神戸の本社に戻った。当然なのだが、私も父の転勤とともに何度も引越すことになった。そして転園と転校を繰り返した。

そのような子ども時代の一歳から一〇歳までの期間、私は、神戸、下関、小倉に建設された日本住宅公団の三つの団地で暮らした。子どもの頃の団地暮らしは一〇歳までだが、その一八年後、私は二回目の団地暮らしを始めることになった。結婚して、奈良の団地で生活をスタートさせたからだ。両親も私も、家庭をもった段階で、ずいぶん団地のお世話になってきた。思うに、団地暮らしは、自分の人生のなかでとても大きな存在を占めているのである。

人生の原点としての団地暮らし

両親は、昭和三二年に結婚し、翌年、私が生まれた。新婚生活のスタートは、団地ではなかった。神戸市東灘区の青木というところにある、二階建て長屋の一階部分からスタートした。間取りは、六畳と四畳半、小さな台所と便所はついているが風呂はなかった。父の話によれば、新婚生活をスタートさせることができそうな住宅を、かなり苦労して探し求めたらしい。当時、住宅事情はまだまだ良くなかったのである。

昭和三四年、我が家は、建設されたばかりの御影団地に入居した。御影団地は、阪急神戸線御影駅から曲がりくねった道路を登りきった六甲山の麓、鴨子ヶ原という場所に建設された。我が家が入居したのは、南側に階段のある五階建・中層集合住宅の四階だった。間取りは、いわゆる2DK。六畳と四畳半の二部屋にDK（ダイニングキッチン）。キッチンの流しは、ステンレス製。トイレは洋式の水洗便所。風呂はガス風呂、風呂桶は木製であった。私の記憶は、この2DKの御影団地での暮らしから始まる。御影団地での暮らしが、私の人生の原点なのだ。

2DKの我が家に、ダイニングテーブルが登場したときのことをよく覚えている。テーブルが届けられる日、そのことを両親から聞かされ、私は朝から楽しみにしていた。配達待ちきれない私は、いつ配達されるのかを何度も両親に尋ねた。

嬉しくて、テーブルを配達してくれた家具店の店員の方とも何か話したように思う。子どもの私には、テーブルでの食事がとても新鮮な出来事だった。このダイニングテーブルは、四分の一が折畳み式になっていた。おそらく、それほど広くない団地のダイニングキッチンに合わせて、このようなタイプのテーブルを選んだのだろう。

当時、三種の神器とよばれた電化製品は、どうだったのか。我が家には冷蔵庫と洗濯機があった。しかし、白黒テレビはなかった。テレビは、ひとつ上の階（五階）の「善樹ちゃんのお家」で見せてもらっていた。母が夕食の準備をしているあいだ、テレビ漫画「Felix the Cat」（黒猫のフェリックス）や、人形劇「チロリン村とくるみの木」などを見せてもらっていた。一方、「善樹ちゃんのお家」に冷蔵庫はなかった。「善樹ちゃんのお家」で残った肉などは、竹の皮に包まれて我が家の冷蔵庫に預けられた。変な話だが、子どもと肉を上下の階でお互いに預かりあっていたのだ。母によれば、同じ階段を共有している世帯とのあいだには、そのような、日常的なちよつとした助け合いがあったという。「善樹ちゃんのお家」でテレビを見ていたのは、六畳の部屋だった。2DKの同じ間取りなのだが、内部の雰囲気は我が家とはまったく違っていた。小さなソファがあり、その横にはスタンドライトが置いてあった。ちよつとお洒落な雰囲気があった。そのことが、子ども心にもなんとなくわかった。「善樹ちゃんのお家」以外にも、それ

ぞれの暮らし方があった。

写真―1は、御影団地の航空写真である。両親がアルバムのなかに保管していたものだ。サンケイ新聞社機から撮影したものらしい。この写真では、九棟の中層集合住宅と五棟のスターハウスが確認できる。住棟のあいだには、高い松の木も確認できる。私は、幼稚園入園前になると、近所の少し年上の子どもたちと、団地のなかにある公園（写真―2）や、高い松の木のあいだにある低木（写真―3）や、高い松の木のあいだにある低木（写真―2）や、高い松の木のあいだにある低木（写真―3）にあたって、インターネットでUR都市機構のサイトを見てみた。御影団地については、「自然地形と現況林を保存した団地整備」が進められてきたことがわかった。この瞬間、団地整備の前提とな



写真―3 建替えられ、御影団地からグリーンヒルズ御影に変わった。

った思想と、私の子ども時代の記憶とが結びつき、なるほどと納得することになった。

御影団地は、平成一四年から一六年にかけて建替えられた。その建替えられた現在の様子も実

際に見てきた（写真―3）。現在は、四、五階建て、一二棟の真新しい集合住宅に建替えられている。また、かつての団地の一部は、老人ホームになっている。当然のことだが、建物は今風のデザインで、いわゆる団地っぽさは微塵も感じられない。しかし、建物とは別に、私の目を引いたものがあった。松の木と地形である。そこには、御影団地の面影があった。しかし、私たちが走り回って遊んだ繁みや公園は、駐車場へと姿を変えていた。御影団地が計画されたとき、日本の一般家庭に現在ほど自家用車が普及するとは、誰も想像していなかったにちがいない。

御影団地のあった鴨子ヶ原のあたりからは、神戸の街や大阪湾が見渡せる。父親の話によれば、御影団地は、風通しもよく快適な暮らしだったようだ。しかし、そのような記憶は私にはない（風景を鑑賞するには、それなりの成長が必要だ）。まだ幼かった私にとって、2DKの部屋と広々とした団地の敷地こそが生活のすべてだったのだ。

山の田団地と城野団地

五歳になる直前、父の転勤で山口県下関市にある山の田団地に引越すことになった。昭和三八年の春のことである。山の田団地は、二階建てのテラスハウス形式の住宅だった。こんどは小さな庭がついていた。両親は早速、糠漬けにするためにナスやキュウリの苗を植え始めた。当時、団地から少し離れると、まだ農地が広がっていた。肥

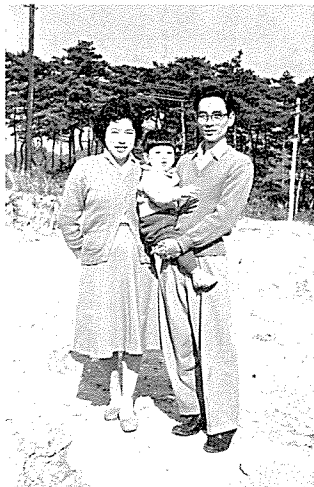
の臭いのする農地を抜けて、響灘（ひびきなだ）に面した堤防まで、家族三人でスケッチもかねたピクニックに出かけることがあった。団地の周囲には、造成したまま空き地になっている土地がたくさんあった。道路に面したところには、特別に広い空き地があった。母親からは、「ここにスーパーマーケットというなんでも売っているお店ができるのだ」と教えられた。時代は、高度経済成長期を突き進んでいた。

翌年の昭和三十九年、下関市の山の田団地から、関門海峡を渡った北九州市小倉区（現在、小倉北区）にある城野団地に引っ越した。テラスハウスの山の田団地の暮らしは、子どもなりに気に入っていたのだが、再び、五階建の中層集合住宅に暮らすことになった。こんどは一階だった。間取りは、四畳半の部屋が二つ、六畳の部屋が一つにキッチンで3Kだった。庭はないが、両親は、窓の下の土地を少し開墾していろんなものを植え始めた（もちろん、それは厳密に言えばルール違反だと思われるが……）。

昭和三十九年といえば、東京オリンピックの年であり、東海道新幹線が開業した年でもあった。そして我が家では、母の弟である叔父がこの3Kの部屋に転がり込んできた年でもあった。叔父は、当時、九州大学農学部四年生だった。祖父（母や叔父の父）は、すでに亡くなっていた。仕送りがないうち、生活費を少しでも安くするために姉の家に転がりこんできたのだ。叔父と私は、南向

きの四畳半の部屋を与えられた。四畳半で大学生と幼稚園児と一緒に寝起きした。ときどき調子に乗った叔父にからかわれて泣きべそをかくこともあったが、私は叔父との暮らしが嫌ではなかった。実姉である母はもちろん、義理の兄である父も家族が一人増えたことを楽しんでた。ただ、そのような生活も、叔父が大学を卒業するまでの一年間だけであった。

城野団地には、テラスハウスも含めて、全部で二七棟の集合住宅があった。以前暮らしした団地の敷地と比較して、かなり広く感じた。団地内部の道路は、子ども用の自転車に乗り始めた当時の私には格好の遊び場だった。また、住棟のあいだのクローバーが生い茂るコモンスペースは、格好の遊び場だった。ドッジボールに野球、女の子たちとはゴム跳びに縄跳び、四季を通じていろんな遊びをした。こんなこともあった。福岡県は、日本海に面しているため、冬になると雪が降ることがある。たまたま大雪だった年、大人たちも少し手伝ってカマクラがつくられた。楽しかった。夏休



写真一4 昭和34年、御影団地そばでの家族の写真。

みには、団地の中央にあるグラウンドで盆踊りや夏祭りが行なわれた。大きなスクリーンが建てられ、子ども向けの映画も上映された。大人たちが参加するバレーボールやソフトボールの大会なども記憶に残っている。

団地暮らしから見えてきたもの

写真一4は両親のアルバムでみつけたものだ。

昭和三十四年、御影団地の東側、宅地造成が進んでいる場所で撮ったものである。三脚でカメラを固定して、セルフシャッターで撮ったものだ。当時、団地族という羨望を込めた呼び方があった。この写真には、我が家も団地族になれたという喜びが表われているように思う（特に、母のほうか……）。決して広くはない2DKという間取りながら、合理的で衛生的かつ快適な暮らしができることに對する喜びが表われている。息子である私の思い込みかもしれないが、そう感じられるのだ。

もちろん、そのような団地の間取りや快適な暮らしの機能は、専門家によって与えられたもの。しかし見落としてはならないことは、与えられた空間を基本条件としながらも、そこに暮らす家族は、自分たちのその時々事情に合わせて柔軟にその条件を使いこなしていたということだ。同じ規格の間取りとはいえ、それぞれの家によって住まい方はずいぶん違っていた。それだけではない。家族の人数や年齢構成に応じて住まい方に工夫があったし、その家の趣味やセンスのようなものが

垣間見えた。同じ規格でありながら、そこには差異や多様性が見られた。自分たち流の暮らし方を
実現するための主体性が存在していた。

そして、そのような部屋の窓から、住棟のあいだに広がるコモンスペースの豊かな緑が見えた。
私には、そのようなコモンスペースの存在が、狭い間取りの延長につながっており、あるいは包み込むように存在しており、結果として暮らしにゆとりや潤いを与えていたように思うのだ。ただし、団地暮らしの豊かさとは、コモンスペースのような物理的空間の豊かさだけに還元されるわけではない。

もうひとつ大切なこと、それはコミュニティの形成の問題だ。我が家の家族写真(写真14)をも一度見てほしい。客観的にみるなら、ここに写っているのは、企業に勤める夫と専業主婦と子どもからなる核家族である。典型的な団地族だ。しかし、洋風のモダンな暮らしを志向した団地族も、その多くは昭和一桁世代ないしは大正末の時代に生まれた人たちだった。言い換えれば、自分たちの根っこに、伝統的なコミュニティの作法や文化をもっている人々なのだ。そして、私が生きた時代に見たこととは、縁もゆかりもない核家族が、そのような作法や文化をベースに、近所同士の助け合いやリクリエーション、自治会活動、子供会活動といった実践を通して、新たなコミュニティを形成しようとする姿であった。このように、私自身の子どもの時代の経験から浮かんでくる団地の

イメージとは、「鉄の扉」に象徴されるような閉ざされた狭い密室や、そのような密室の集積といったようなネガティブなものではない。そうではなく、自分たちなりの工夫が加えられた私的空間として存在しているというイメージになる。そして、その連続性を担保していたものが、そこでの住民の暮らし方であり、コミュニティ形成への意欲だったように思うのである。このような団地暮らしの延長線上には、限られた私的空間に工夫を加えながらシンプルに暮らし、コモンスペース、さらには公共的空間を物理的にも社会的にも豊かなものにしていく、そのようなライフスタイルが微かに見えてくる。しかし、現実はそのようではなかった。

高度経済成長期が進むなか、国による「持ち家政策」を背景に、多くのサラリーマンにとっては、都市郊外に一戸建て住宅を持つことが人生をかけての重要課題となった。我が家の場合も、両親は私が高校二年生のときに神戸の新興住宅地に一戸建てを購入した。一戸建ての住宅を入手して、どのような暮らしを実現するのか、どのようにその後の人生を過ごしていくのか、そのような具体的なライフスタイルの問題や、そこでの暮らしの質をあまり問うことなく、一戸建て住宅を手に入れること自体が目的化してしまっただけのようない戸建て住宅の入手が、一種の資産形成と同一視されてしまうこともあった。「暮らしの幸せ」を、貨幣価値で測定できるような物質的な豊かさだけで

判断する傾向がいよいよ強化されていった。

現在、都市近郊の新興住宅地では、高齢化がハイペースで進んでいるという。経済力のある人たちは便利な都心に回帰することも可能だが、年金をベースに暮らしている人たちの場合、そうはいかない。山を切り崩して開発した新興住宅地などの場合、かつてなんとも感じなかった緩やかな坂道さえ年老いた体には負担になっていく。郊外に一戸建てを持つこと、「暮らしの幸せ」という図式自体が、もはや過去の幻想として消えつつある。おそらくは、今、私たちは、「暮らしの幸せ」とはなにか、それを支える住宅とはどのようなものかを、自分自身のライフスタイルや暮らしの質との関係から真剣に考え、選択していく必要に迫られているのだと思う。

日本の住宅政策が、「持ち家政策」ではなくもつと別のものだったら……。全国各地に生み出された団地での経験や知見がストックとして住宅政策に活かされたら……。そう考えることは意味のないことだろうか。私は、団地暮らしから見えてきたものを再評価し、地域づくりの計画に活かしていくべきものと考えているのだが。

脇田健一／わきた・けんいち
龍谷大学社会学部教授。

一九八八年三月、関西学院大学大学院社会学部
研究科博士課程後期課程単位取得満期退学。
幼い頃と自らの新婚時代を合わせて一七年間
の団地暮らしの経験がある。専門は、環境社
会学。環境政策と環境運動・実践との相互関
係の分析、文化遺産の社会学、まちづくり・
コミュニティビジネス等の研究を進めている。

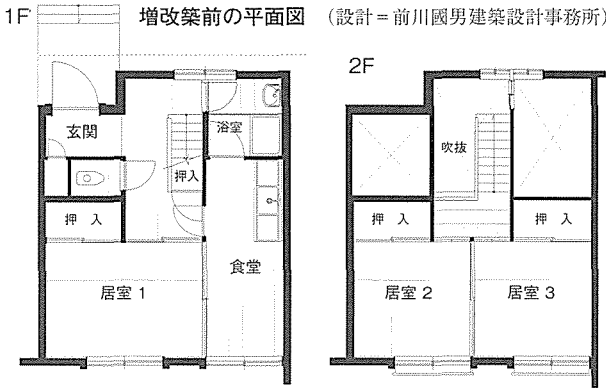
nLDKとそのギャップ

今、私が住んでいる公団阿佐ヶ谷住宅に入居する時、「nLDKプランに住む」ということを自覚しただろうか。答えは否、ほとんど意識しなかった。言われてみれば「うちもnLDKプランだったね」という程度である。

では自分が住宅の設計をする時はどうだろう。プランを説明する際、「3LDKです」と言うことはまずない。ただしダイニングキッチン、ベッドルームといった言葉は使っている。室名は行為や設備と関連づけられるが、あくまで便宜的な言葉でしかなく、空間や住まい方に大きな影響を及ぼすことはない。そもそも「nLDKプランでなくてはならない」という施主に私は会ったことがない。上野千鶴子が指摘した「家族は規範を生きている」ということさえ、もう当てはまらないように思える。家族はとうの昔に定義できないものとなり、イメージや規範も放棄して、一人や血縁によらない共同生活を営む人びとが多くなっている。これは社会的弱者の人口が多くなったマイナス側面と捉えることもできるけれど、一人

暮らしや他者との共同生活が一概にマイナスだとはいえない。暮らし方について「くであるべき論」で考える人が減っているとすれば、nLDKになにがしかの「夢」を馳せる人は少ないのではないか。

上野千鶴子と山本理顕によるnLDK論争で問題とされたのは、住まい手・建築家・供給側、それぞれのnLDKに「ギャップがある」ということだと思う。51C型成立に影響を与えた西



山知三の「食寝分離論」も、当時の住み方の現実を学会に知らしめるところから始まったはずだ。このようなギャップは建築全般にいえることだが、顕著に現れるのが住宅であり、nLDKプランがそれを考えるのに適していたのではないだろうか。

私は、育った家も現在住んでいる家もnLDKプランである。同時につける側としてnLDKをどのように位置づけるかを考えてきたが、先に結論を述べれば、「nLDKは良くも悪くもない」と感じている。住まう側、つくる側のどちらの視点においても、私にとってほとんど問題にならない。それがどういふことか、具体的にそれぞれの視点をみてみよう。

nLDK、住む側の視点

現在、私は公団阿佐ヶ谷住宅のテラスハウスに住んでいる。昭和三十三年、設立三年目の旧・日本住宅公団によるこの団地は、新しい郊外の住まいをつくるべく実験的な要素の高い集合住宅である。団地に一歩踏み込むと、いくつかの変形した緑豊かな広場があり、専有地と共有地の境界がいまに

っている。区分所有法施行以前につくられ、戸建てのように専有地に建つ専有建物として管理されており、住民によってある程度自由に増改築もされている。その点では特異な団地といえる。

このテラスハウスは前川國男建築設計事務所の設計で、nLDKで表現するなら2LDK+庭だ。分譲時、モダンな集合住宅だったとはいえず3㎡しかなく、家族が増えれば面積が足りないと団地のほとんどの家が増築を行なっている。拙宅もオーナーによって増改築がなされ、現在は六五㎡の3LDKであるから、一人暮らしの私には大きすぎるくらいだ。

では私がどのように生活しているかというと、用途で部屋を決めずゆるやかに暮らしている。食事はダイニングテーブルで、和室のちゃぶ台で、晴れた日は庭のデッキで、人が集まった時は床に座って食べる。眠るのも同様に二階の部屋で寝ることが多いが、ベッドがないので好きなところに布団を敷いて寝る。仕事はデスクのある二階で行なうが、ノート型PCを持って一階で仕事することも多い。読書をするのに団地の広場に行つてベンチで読むこともある。部屋の用途はいまいで、流動的でフアジーな暮らし方だ。私の性質もあると思うが、nLDKプランを一人で使えばこういふことになる。

そして空間に余裕があるので人を呼ぶことが非常に多くなった。その極みは、家を現代美術のギャラリーとしてオープンしたことだ。開廊日数一四七日で述べ四〇〇〇人が訪れた。ここでは語りきれないので省略するが、要するに私の仕事場で生活の場であり、人びとが集まって楽しむ空間でもあり、アーティストの制作現場でもあった。

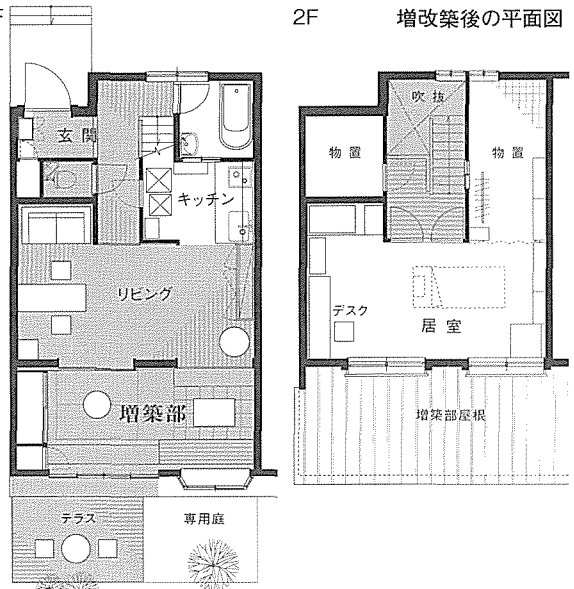
とんでもない要素の盛り込み方だと思う。しかし私はギャラリー運営中も快適に暮らしていたし、家であることが人びとにくつろぎの作用をもたらしていた。期間限定のギャラリーを立ち上げたのは他に理由があつたことだが、団地特有の広々とした屋外空間があり、部屋数がなければできなかった。ここで「用途の特定されない個室がいくつある」と「nLDKである」との違いもポイントだ。その上で私が住む視点から見た時、nLDKであることはあまり関係がない。

nLDK、つくる側の視点

マンション・デベロッパーにとってnLDKは、もはや認識もされない大前提のフォーマットであり商品だ。では、建築家にとつてのnLDKプランとはなんであるうか。

一番大きな影響は、建築家とそれ以外の人びととの間での「共通言語」であることだと思う。nLDK、ダイニ

増改築後の平面図



ングキッチンといった言葉が日常用語になっていくことは大きい。しかし住み手が空間に何を期待するかは、従来のnLDK（夫婦の寝室+子ども部屋+共有スペース）と同じこともあれば、該当しないこともある。「部屋の用途」というのは将来的に流動する可能性がある。そういう意味で「従来のnLDK」はもうひとつの形式でしかない。私の場合、係数nにあたる個室に名前をつけず、「ROOM1」「ROOM2」とつける。だからといって「個室群住宅」のように個室の中身に関与しないわけではなく、必要に応じて手を入れていく。

nLDKの再解釈

それに加えて、キッチンやバスルームのような設備を「家具」のように扱う傾向がある。生活は人の行為に分解されており、インフラや道具がどのように人に影響を与えるかを考える。「部屋＝行為」としない考え方は、都市部でのリノベーションやシェアが日常茶飯事である我々の世代の傾向かもしれない。

今回の本誌のテーマは「nLDKの再解釈」だと思う。その背景はnLDKプランに適合しない人びとの暮らしがあるということだ。単純ではない人間関係があり、働き方も家に求めるものも多様化している。その上、nLDKは数年前から供給過多のしわ寄せが起きている。差別化がないから商品としても価値は下がる。それをどうするの？というところであろう。

しかし正直言って「何故nLDKがそんなに問題になるのか」と私は思う。団地について言えば、おもしろいシステムを持っているし、他の住宅にはな

い固有の財産を持っている。nLDKプランを問題にするよりも、住み方の自由度や共用部分の生かし方を考えるべきであろう。もっと具体的に言えば、管理規約を大きく見直すだけで非常に魅力的なものになるはずだ。過日、来日したグレン・マーカーはこう言った。「社会状況が人びとに自信を失わせているところでは物事がフォーマルになる傾向がある」、そして「カジュアルでいられるということは、この国は大丈夫だということだ。こういう社会において人びとの居場所をつくる時に必要になってくるのはインフォーマリテイ(形式をつくらないこと)である」*註。

すべての問題を解決する普遍的なプランなどない。人が変わるのだから家も変わる。でも逆に、家が変わるから人が変わるという可能性もある。それが住宅の本質だろうと私は考える。今既にここにあるもの、その見方を変えるだけで変化していく。それはnLDKプランも例外ではないはずだ。

大川幸恵/おおかわ・さちえ

一九七九年、神奈川県生まれ。建築家、編集者。ブルースタジオなど設計事務所を経て独立。二〇〇六年「とたんギャラリー」運営、同代表。

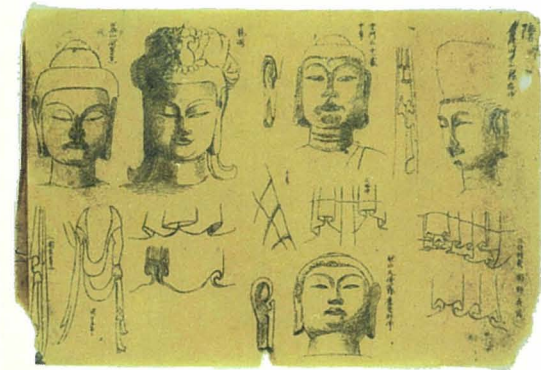
*註

OTTO「ギャラリー間」ウェブサイトのインタビューより。http://www.toto.co.jp/gallery/ma/ex080612/column.htm

角田 真弓



明治42年(1909)、関野貞が調査し最優秀なるものと評価したソウルの南大門。それにより朝鮮総督府から宝物第1号に指定された。関野貞資料には、おびただしい数のこのような乾板写真が残されている。



東京大学大学院工学系研究科建築学専攻には工部大学校・帝国大学工科大学以来の資料が多数所蔵されているが、今回関野貞資料について紹介させていただきたい。

明治期より文化財保護行政に深く関わる

東京帝国大学教授であった関野貞は慶応三年(一八六七)生まれ、同じく教鞭をふるっていた伊東忠太も同年生まれで、実はこの二人、年齢が変わらない。しかし伊東と比べると一般的には知名度は低く、関野の名前が取り上げられるのは、平城宮跡の発見や法隆寺再建非再建論争くらいである。むしろ韓国や中国などの東アジアや、美術史・考古学など異分野での評価が高いといっても過言ではない。しかも、喜田貞吉と繰り広げた法隆寺論争は、若草伽藍跡の発掘により、関野が唱えた非再建論とは異なる結末を迎える。

しかし、関野の功績はこれだけではない。一番の

それは、日本、朝鮮半島、中国を通して行なわれた建築を含む古蹟の緻密な調査であろう。さらに、日本と朝鮮半島においては文化財保護行政の基礎をつくり上げた。伊東が文化財保護政策のパイオニアであれば、関野は実質的な運用者である。明治三〇年(一八九七)の古社寺保存法制定当初より亡くなる昭和一〇年(一九三五)まで、関野は深く文化財保護に関わり続け、関野の評価基準が文化財指定のもととなった。一方で明治三〇年代には奈良県技師として実際の修理にも携わっていた。現在修理が行なわれている唐招提寺金堂の明治修理も技師時代の関野の仕事であり、小屋組にキングポストラスを採用したのも彼である。

この関野貞に関する資料の存在は、一部の研究者の間では知られていたが、いったいどこに何があるのか全体を把握できている者はほとんどいなかった。当事者である大学関係者も、代表的なくつかを除けば、段ボール何箱、棚何段という把握の仕方にする

ぎない。関野貞資料が初めて全貌を明らかにしたのは、二〇〇五年、東京大学総合研究博物館において催された『関野貞アジア踏査』展覧会であろう。ここに至る経緯は「関野貞資料群 保存状況と解説」(関野貞アジア踏査 東京大学総合研究博物館)に書かれているので詳しくふれないが、二〇〇三年に東京大学生産技術研究所藤森照信研究室で保管されていた資料群が総合研究博物館に移管され、ご子息である関野克氏が自宅で保管していた資料が明らかになるなど、数年の間に次々と姿を現したことも大きい。

関野貞資料の内容

資料数があまりに膨大であり、また博物館や資料館、図書館という組織でもないため、所蔵資料の整理・公開作業が十分に進んでいるとはいえないが、全体像と状況を紹介したい。

〈瓦、土器、埴〉

中国・朝鮮半島・日本の古瓦や土器類。総数は二〇〇〇点を超える。特に瓦の文様から展開する編年研究は有名である。なお、もう一人のご子息である関野雄氏が東京大学文学部教授であったことから、一部は文学部に保管されている。

〈模写、拓本〉

当時東京美術学校図案科に在籍した小場恒吉により一九二二年〜一四年に作成された高句麗壁画古墳の原寸大壁画模写。他にも高句麗の広開土王碑や中国山東省の武氏祠漢画像などの拓本類や地図などがある。総数は約七〇〇〇点に及ぶ。

〈ガラス乾板〉

海外調査時を中心に、伊東忠太や塚本靖が撮影したと思われる乾板も含めると、一万二〇〇〇枚を超



教材として使用された仏像のスケッチ。

える。「朝鮮古蹟図譜」等の出版物に使用された写真も含まれ、現時点では約三分の一程度の焼付作成が完了した。

〈調査・研究資料〉

図面、野帳、メモ、スケッチなど。東京大学総合研究博物館に所蔵される「関野貞資料」には、フィールドカードと総称されるキャビネサイズの特製カードに記されたメモ群があり、これに関しては、既に目録が発行され（『関野貞フィールドカード目録』二〇〇四年、東京大学総合研究博物館標本資料報告No.53）、現在公開に向けたデータベースを作成中。

〈日記、個人記録〉

一 高時代に記した『世辞之葉』、明治三十九年（一九二〇）の欧州旅行記である『遊西日記』等の旅行記や、大正三年（一九一四）から亡くなる昭和一〇年（一九三五）七月まで続く日録など。現在、翻刻出版に向けて準備を進めている。

文化財評価の様式理論

次に、いくつかの資料を紹介したい。

関野が生み出した建築を見る方法の一つに、細部の形の変化から様式の変遷を辿ることがある。時代により一貫した様式が存在すると考えた関野は、多くの調査をもとにつくり上げたこの様式理論により、次々と年代を比定していく。後年この年代が根拠となり、文化財指定が進められていくこととなる。この方法は建築のみに留まらず、彫刻や絵画においても同様であった。仏像の耳の形、衣紋の襞、と細部を比較することで、時代特有の様式を見出す。さらに、建築と仏像は単純に形で比較することはできないが、抽象的な形容表現を用いることで、共通した様式観を表現しようと関野は試みていた。

また、先日不幸にも放火の被害にあった韓国ソウルの南大門（崇礼門）。関野が初めてこの崇礼門を調査したのは明治三十五年（一九〇二）である。この調査は東京帝国大学から建築調査のため派遣されたもの

であった。次に訪れるのは明治四十二年（一九〇九）であり、韓国度支部建築所からの依頼で、建築物の調査、特に評価を求められた。この際使用した評価の方法は、日本において明治一〇年代より岡倉天心らにより進められ、関野自身も奈良の古社寺に対して行なった等級評価を応用した「甲、乙、丙、丁」の四段階評価であった。関野は、開城（現朝鮮民主主義人民共和国）の南大門と同様、関野のいわく「簡樸壯重」という高麗時代の特色を持つことから「甲」、すなわち最優秀なるものと評価をしている。それを受け一九三四年、当時の朝鮮総督府により宝物第一号に指定され、その後一九六二年には大韓民国文化財保護法により改めて国宝第一号に指定された。

最後に

東京帝国大学退官後、関野は東方文化学院に研究員として所属し、主に中国の調査を続けている。移管機関である東京大学東洋文化研究所にも、収集資料が多数所蔵されており、これらは公開が進められている。このほかにも、奈良文化財研究所には奈良県技師時代の資料が所蔵されている。

所蔵機関が分散しているとはいえ、これほどまでに多義にわたる資料を残した研究者も少ないであろう。しかも、晩年になっても調査の精度は変わっていない。たとえ理論は踏破されても、いまだ資料的価値を高く評価されているのはこのためである。

角田真弓／つのだ・まゆみ

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻技術専門職員。

筑波大学芸術専門学群建築デザイン卒業。日本建築史専攻。著書に『日本美術史年表』（建築目およびコラム、美術出版社）、『関野貞アジア踏査』（編著、東京大学出版会）など。

建築家にとつて環境エネルギー問題は、延々と続く夏休みの宿題のようなもの。エネルギーバブル以後の生き方、すまい方を探る時宜を得た企画であった。

小泉 雅生



本誌編集委員会より「二〇〇八年夏号」を読んだの感想文を、との依頼である。夏に感想文といわれると、昔懐かし夏休みの宿題といった趣である。

考えてみるに、我々建築設計者にとつて、この号でのメインテーマであるエネルギー問題そのものが、夏休みの宿題のようである。義務感に駆られているが、正直なところそれほど積極的に取り組みたいわけではない。いつかはやらなければならぬし、遠からず夏休みは終わるのだから、早くから計画的にやっておくべきなのはわかるが、気乗りはしないし、とりあえず今日の

ところはいいか……。でもずっと頭の片隅に引っかかっている。大方の設計者にとつてのエネルギー問題はそんなところではないか。まさしく夏休みの宿題である。私にとつても、ご多分に漏れず、大きな夏休みの宿題であったが、一念発起して宿題に取り組もうと四月に行なわれたミニシンポジウムに足を向けたところ、感想文というささやかな宿題を申しつけられたという次第である。

さて、前置きが長くなったが、本号ではいくつもの興味深い論考が掲載されている。中上英俊氏と萩本和彦氏のミニシンポジウムは、エネルギー事情に明るい両氏によつて経緯、課題、展望がもれなく語られていて充実した内容である。小玉祐一郎氏、宿谷昌則氏、堤敦司氏、鹿園直毅氏、岩船由美子氏はそれぞれの専門分野から論を展開しているが、いろいろな分野が一堂に会することで手早く全貌がつかめるところで、野城智也氏というところの大規模で複雑なシステムを理解するために、非常に有意義な誌面構成である。

住まい手、住まい方の視点から興味深い指摘を行なっているのが、石川英輔氏の「私のすまいろん」である。消費エネルギーはなかなか実感を持てるように伝えることが難しいが、石川氏

によると一人一日あたり一〇万キロカロリーを燃焼させているという。我が家は五人家族であるから、風呂を一七℃から四二℃まで加熱しているとする、実に毎日風呂一〇〇杯分を沸かす化石エネルギーを消費していることになる。幼き頃薪で風呂を沸かしていたことを思い起こせば、毎日その一〇〇倍を消費するというのは想像を絶する。江戸時代までさかのぼらずともこの半世紀の間に、いかにエネルギー消費型のライフスタイルに移行したかを思い知らされた次第だ。

私は八〇年代後半のいわゆるバブル期というものを身近に体験した。祭りのような躁状態のただ中において、このような異常な状況が長く続くわけはないと違和感があったことを覚えている。先進国の間で見れば日本は世帯あたりのエネルギー消費が少ないとはいっても、同様の違和感を住まいにおけるエネルギー消費に感じざるを得ない。エネルギーバブル期とでも呼ぼうか。

とあるシンポジウムでクリイタイプダイレクターの榎本了彦氏が「これからは鬱の時代である」と看破していたが、経済とエネルギーの躁状態を経て、「鬱の時代」での立ち振る舞い方・生活の仕方を我々は学ばねばなるまい。

一方、建築関係者へのメッセージと

して強烈だったのは、野城氏の序文の結びである。「大規模で複雑なシステムを対象としているだけに、課題解決のための技術も適材適所、搦め手（なぐめて）いかねばならない。この絡め合わせるという仕事は、アーキテクトの仕事に似ているし、実際アーキテクトが手がけてもいい仕事である。……（中略）……建築・電気・機械といった伝統的なドメインごとの個々別々のプロセス群としてとらえるのではなく、お互いを関連づけたプロセスをデザインしていくことが、今まさに求められているといつてよい……」。二一世紀に生きる建築家として、誠に大きな宿題を出された感がある。

最後に、このような企画を立て実現された野城氏をはじめとする「すまいろん編集委員会」が、さらに宿題(?)という形で論考の機会を与えてくださったことに深く感謝の意を表したい。

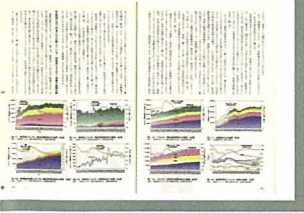
小泉雅生／こいずみ まさお

建築家。首都大学東京准教授。小泉アトリエ主宰。

一九八八年、東京大学大学院修士課程修了。シラカンスを経て、二〇〇五年、小泉アトリエ設立。主な作品に、「アシタノイエ」(〇四年、建築学会作品選奨、サステナブル住宅賞国土交通大臣賞、「千葉市美浜文化ホール・保健福祉センター」(〇七年、千葉市優秀建築賞・グッドデザイン賞)など多数がある。著書に「変わる家族と変わる住宅」(共著、彰国社)など。

を読む

「21世紀のえねるぎ事情」
計、設備設計のお二人に



「すまいろん」

前号(2008年夏号)の特集記事について、読後の感想を、建築設伺いました。



社会のシステムとして新しい価値観・評価が求められる環境問題。豊富な具体的資料でエネルギー問題を掘り下げたミニシンポジウムは、その理解に絶好の記事だ。

岩本 和明



今年、洞爺湖サミットに代表される環境の国際会議が注目を集め、京都議定書の初年度でもあることから、日本の責務をいかに果たすか、京都議定書以降の削減をどう考えるか、行政、民生ともに、議論が高まっています。二〇一〇年に五〇%、二〇二〇年には、二〇~三〇%の削減を行わなければならぬというところは、国際的な世論で固まりつつありますが、かなりの省エネを世界に先行して実現している日本は、京都議定書の六%の削減や、今

後一〇余年のうちに二〇~三〇%の温暖化ガス削減をすることは、急激な社会システムの変革を行なったとしても大変高いハードルであるといえます。

建物に関してみれば、日本の産業の発生するCO₂のうち建物に関するものは四三%という比率になっています。竣工後、使用時のエネルギーは、そのうちの半分以上を占め、生産施設に対する施策や関心が一巡し、民生部門(住宅、商業、事務所等)に注目が集まっている中で、この小冊子の特集(21世紀えねるぎ事情)は、時期を得た企画であるといえます。責任編集者である野城先生の言葉にある「先入観にゆがめられていない本当の話をする」という趣旨のミニシンポジウムでは、中上、荻本両氏の異なった視点から日本の全体像の説明があり、続く複数の分野の方による問題点や主張によりさらに深掘りされ、大変レベルの高い臨場感があるものとなっています。続く論稿では、各執筆者が多方面なテーマをわかりやすく説明しています。

地球環境問題は、人類の大きな課題であることが認識され、個人・企業への環境に対する取り組みは、社会に対する責任を果たす上で必要条件となりつつあります。しかし、地球環境問題と身近な取り組みは、あまりにも大きな

問題とあまりにも身近なものとの両端であり落差が大きく、今回の企画のようにその間を埋めるための情報の開示や評価が今後の環境問題を進めるにあたって、ますます必要となるという感を強くしました。また、少し前までは、学識者や一部のマスコミが取り上げていただけの温暖化やエネルギー問題も社会現象の一部となり、ファッショナブルな話題提供として断片的・一過性なものとして取り扱われてしまい、さまざまな情報が氾濫することが多いなかで、エネルギーという視点で全体像や未来に対する考え方がわかりやすく豊富な資料を基に提示され大変興味深く読ませていただきました。

現在の状況をブレイクスルーするには、さまざまな分野での取り組みや技術革新が必要なことは当然として、客観的な視点による評価や全体像の共有が社会全体のモチベーションを高めるのに重要であることは、いうまでもありません。建築でも環境のためのさまざまな技術開発がなされていますが、日本の中長期の目標に対応した規制を大きく超える環境性能の高い建物の実現には、まだ社会のハードルは高く、これを超えるためには、規制の強化だけでなく、新しい評価や価値観が社会のシステムとして要求されており、

エネルギーやエクセルギーによる放射冷暖房の環境性能評価などの実践の紹介には、新しい可能性が強く感じられます。企業人として環境問題に従事するものにとって普段得がたい視点から各執筆者がさまざまなテーマを指摘、説明されており、情報源として貴重であるとともに、次の業務を考えるのに大変教唆に満ちた内容となっています。「すまいろん」は、各号とも、特徴のあるテーマが選定されかつ質の高い内容となっており、一般的な読者というよりも、専門知識や問題意識のある人にとって面白い企画・内容となっている。そういう意味で大変贅沢な小冊子といえると思います。強いて難点をあげれば、グラフなどの見づらさ、全体の大きい構成の起承転結がややはっきりしないなど些細なことがあります。このようなレベルの高い主義・主張をもった内容が、どのような形で社会に受け入れられ、次に戦略的に展開されていくのか一読者として、気になるところであり、また大いに期待するところでもあります。

岩本和明/いわもと・かずあき

清水建設(株)安全環境本部地球環境部部長
一九七五年、東京大学工学部建築学科卒業。清水建設に入社し、作業所の管理を経て、九八年より建築四部副部長、〇二年より現職を務める。

最近の動き

二〇〇八年度の助成研究者が
一同に会し、交流を深める

昨年度に引き続き「二〇〇八年度研究助成キックオフミーティング」が開催された。研究運営委員会の高田光雄委員長から二〇〇八年度研究助成の審査経過報告と感想が述べられた。続いて、二〇〇七年度研究助成に採択された主査の紹介が行なわれた。引き続き、高田委員長からの趣旨説明の後、二〇〇五年度から設けられた「住総研研究選奨」の表彰式が行なわれた。

休憩を挟み四編の受賞論文に基づく講演が行なわれた。講演会の趣旨が年々浸透し、研究方法や成果についての反省点などが具体的に話され、本年度助成研究者にとって、大きな励みになったと思われる。

2008年

- 7/ 4 第75回すまいろんミニシンポジウム「家族のあり方とnLDK」
- 7/ 11 第123回研究運営委員会
第9回住宅史料委員会
- 7/ 12 第28回住総研シンポジウム「住宅研究はどこから来てどこへ向かうのか」
- 7/ 16 第69回住教育委員会
- 7/ 22 第95回すまいろん編集委員会
- 7/ 30 第17回コレクティブハウジング研究会
委員会
- 8/ 18 第10回住宅史料委員会
- 9/ 4 第27回世界のすまい方フォーラム委員会
第20回世界のすまい方フォーラム「胡同に住むということ」
- 9/ 8 第70回住教育委員会
- 9/ 24 第36回江戸東京フォーラム委員会
- 9/ 26 第18回コレクティブハウジング研究会
委員会
- 9/ 27 第179回江戸東京フォーラム：第5回「東京の地域学を掘り起こす」シリーズフォーラム「幻の日本万国博覧会——月島の地域学」
- 9/ 29 第76回すまいろんミニシンポジウム「災害は地域に何をもたらすのか——文化の再発見、誘導、適用装置」
- 10/1~10/6 住総研連続展覧会東京展「世界遺産をつくった大工棟梁——中井大和守の仕事」
- 10/ 6 「住総研 清水康雄賞」贈呈式および記念講演会
- 10/ 14 第83回図書情報委員会
- 10/11~11/9 住総研連続展覧会大阪展「世界遺産をつくった大工棟梁——中井大和守の仕事」
- 10/ 17 第96回すまいろん編集委員会
- 11/ 6 住総研創立60年感謝の会
- 11/15~12/28 住総研連続展覧会高松展「近代をつくった大工棟梁——高松の大工久保田家とその仕事」
- 12/ 8 第28回世界のすまい方フォーラム委員会
第21回世界のすまい方フォーラム「『建築』と『科学』の融合によるインフラフリー空間への挑戦」

2009年

- 1/ 10 第124回研究運営委員会
- 2/ 21 第10回「住まい・まち学習」実践報告・論文発表会

講演終了後、

新設された天幕下の中庭で交流会が催された。「住まい」に関する研究者が一同に集う機会が少ない中で、若手を中心とした活発な情報交換が行なわれ、名残惜しさを残しつつ閉会された。



キックオフミーティング後の交流会風景。

印刷助成・出版助成決まる

第一二三回研究運営委員会において、印刷助成と出版助成の審査が行なわれた。応募数合計は昨年と同じ一七件となり、厳正な審査の結果、印刷助成一件、出版助

成一二件が採択された。

〈印刷助成〉

・高橋幹夫（文化誌研究家）
「明治の団地——浅草玉姫町東京市公設長屋」

〈出版助成〉

・玉野和志（首都大学東京）
「東京大都市圏の空間形成とコミュニティ」

・池上重康（北海道大学大学院工学研究科）
「住宅——企業がつくった住宅地の近代（仮題）」

・駒見宗信（フリーランス）
「村野藤吾遺稿集——ある日の村野藤吾（仮題）」

・大海一雄（西神ニュータウン研究会）
「西神ニュータウン物語」

・山本茂（NPO千里・住まいの学校）
「ニュータウン再生——住環境マネジメントの課題（仮題）」

・小玉 徹（大阪市立大学創造都市研究科）

「都市再生と社会的排除——欧米からみた日本（仮題）」

・松岡洋子（関西学院大学）
「地域居住（Agng in Place）」と高齢者住宅——日本とデンマークを比較して」

・木下勇（千葉大学園芸学部）
「こどもたちがまちをつくった」

・疋田洋子（奈良女子大学）
「ずっと、この家で暮らす——住まいの管理がつむぐ美しい生活」

・塩崎賢明（神戸大学大学院工学研究科）
「住宅復興とコミュニティ」

・源愛日児（武蔵野美術大学建築学科）
「木造軸組構法の近代化」

*主査名（敬称略）↓所属・題目の順で記載

その他

「すまいろん」は本年秋号より、前号の感想文を掲載することになった。当面は、編集委員会で執筆者を選定する。

創立六〇年記念 住総研シンポジウム

「住宅研究は

どこから来てどこへ向かうのか」

第二八回住総研シンポジウムは創立六〇年記念を冠し、七月一二日に建築会館ホールにて開催された。関係者合わせて一九五人の出席を得て、超満員であった。

例年は、研究運営委員会にて設定したテーマに関し複数の研究者に論文作成を依頼し、当シンポジウムで発表と討議を行ってきた。しかし今年は、創立記念ということもあって、主要事業である研究助成の方向やあり方について考えようという機運が高まったことから、

「住宅研究がどこへ向かおうとしているのか」を昨年の研究運営委員全員に、専門の立場から率直な意見を述べてもらうこととした。

司会者の高田光雄氏（京都大学）からテーマに関する趣旨説明があった。「どこから来て」の解説も含め、住宅はあらゆる建築の原点であること、住宅研究の大



パネルディスカッション風景。

きな発展は住宅と社会との相互関係に依存してきたこと、住宅研究に関する所属の京都大学での歴史、建築学会での住宅関連研究の動向などを概説し、住宅と社会との関係は新局面を迎えていると結んだ。

初見学氏（東京理科大学）からは、新しい発見や解釈、提案をするための計画研究の切り口の紹介があった。

深尾精一氏（首都大学東京）からは、建築工法は学問の対象なのだろうかとの問いと、一般の人が求めているのは予測工学としての住宅研究ではないかとの意見が述べられた。

中島明子氏（和洋女子大）からは人間の尊厳や生活の質の改善に着目して居住空間を構想する必要性と、これからの人口縮小時代は住居管理が居住政策の柱になっていくのではとの意見が述べられた。

福川裕一氏（千葉大学）は、これからのアップグレードな課題である縮小都市の問題に関して提案や参与研究も含めた多方位の研究が必要であると述べた。

加藤信介氏（東京大学）は、人間は多大なエネルギー消費の上に快適と多様性を求めることをやめないが、安全や健康、リスク低減、弱者の立場改善への研究は引き続き必要と述べた。

谷直樹氏（大阪市立大学）は、住まいは歴史の積み重ねによって発展し豊かな個性が与えられてきた、社会的視野を拡大し、比較の視点を持つことが肝要と述べた。終了後、会館中庭で懇親会を開催した。

（記録は本誌別冊を御覧下さい）

市民フォーラム

「暮らしの中の地球温暖化対策」
洞爺湖サミットを前に

二〇〇八年度
第一回「市民フォーラム」が東

京建築士会会議
室で開催された。

このフォーラム
は、東京建築士
会との共催とい
う形で、「住」に
関わる問題を市
民に知ってもらうというこ

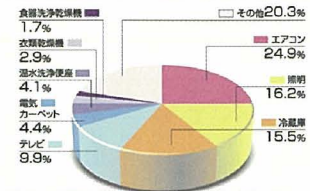
で、毎年一
〜二回程度実施している。

午前中は、東京大学生産技術研究所・岩船由美子氏に、標記の講演をお願いした。暮らしの中のエネルギー消費を中心として、家庭で使用するさまざまな機器との観点から、また、地球温暖化との関連について具体的・詳細に解説された。

産業部門では、省エネはかなり進んでいるが、家庭を含む民生と運輸部門では、エネルギー消費が増えている現状があり、家電製品の増加によるエネルギー消費を抑えるための具体的方策も語られた。

午後は、五時まで建築士（東京建築士会相談委員）と弁護士がペアとなった数組の相談チームで、相談会を実施した。欠陥住宅問題から契約、工事の監理、くらしの問題などさまざまな内容の相談が寄せられ、終日盛況であった。

家庭で消費される電力の内訳（2005）



出所：「電力需給の概要（2005年度想定）」

次号予告
2009年冬号

特集Ⅱ災害と住文化

一月発行

〈焦点〉

災害と住文化

中谷礼仁（早稲田大学）

（ミニシンポジウム）

災害は地域に何をもちたらずのか

―文化の再発見、誘導、適用装置

林 勲男（国立民族学博物館）

牧 紀男（京都大学防災研究所）

司会Ⅱ中谷礼仁（早稲田大学）

〈論考〉

自然災害と地域の再建

―アチエ紛争と二〇〇四年インド洋大津波

西 芳実（東京大学総合文化研究所）

闇市文化論―日本の戦後に現れ消えた町

松平 誠（立教大学アジア地域研究所）

日本統治下の台湾における災害復興

―新たな文化の適用機会としての災害

青井哲人（明治大学）／陳正哲（南華大学）

東京過密街区―復興まちづくりから事前復興へ

佐藤 滋（早稲田大学）

〈すまいるのテクノロジー〉

被災・すまいるの変転・民族の新生

―ピナトウボ噴火とアジア生活世界の激変

清水 展（京都大学東南アジア研究所）

〈私のすまいるん〉

野崎隆一（株遊空間工房）

〈ひろば〉

震災を引き金にして生まれ変わった都市・集落

石岡紘太郎（新潟大学岩佐研究室）

〈すまいる再発見〉

旧神戸ユニオン教会復興とフロインドリーブ家

〈図書室だより〉

東京文化財研究所 関野克資資料

平賀あまな（筑波大学）

〈住総研ニューズレター〉

タイトルは仮題、執筆者は変わることがあります。

「江戸・明治・大正・昭和
住宅史料の新たな発掘」

住総研 住宅史料委員会 企画

「住宅史料委員会」は以下の趣旨で二〇〇六年秋に設けられた。

「近年、登録文化財として『建築物』だけでなく、建築資料も登録の対象となる事例も出てきている折、社会一般も地域の歴史などへの関心も高まっている。

重要文化財クラスの史料でなくても、当時のくらしや、建築の工法・技能等を知る上でその価値は高いにもかかわらず、個人では整理保存ができない史料は散逸し、消滅する可能性が高い。

住総研は、住に関するそれらの史料を位置づけ、整理するための助成と、それらの成果をどのように発信すべきかなど、基本的な方向性を検討する委員会を設ける。

委員会の下に、三つの研究会「大工頭中井家文書研究会」、「高松大工久保田家文書研究会」、「清水建設戦前住宅資料研究会」が設けられ、創立六〇年に向けて資料整理・分析等の活動をしてきた。ようやくそれらの成果をまとめた展覧会を企画、実施する段階となったのでご案内する。

中井家文書は、一三代当主・中井正知氏のご協力を得て、重要文化財の登録の申請を予定しており、広く公開される貴重な機会となる。久保田家文書と清水組彩色図集からは、地方と中央の住宅等の建築生産の違いを窺うことができる。

「世界遺産をつくった大工棟梁
中井大和守の仕事」

・東京展・建築会館 一〇月一日～六日
・大阪展・大阪くらしの今昔館（市立住まいのミュージアム）一〇月二日～十一月九日



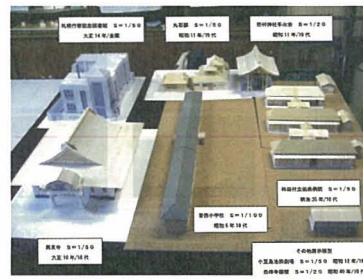
洛東清水寺惣絵図

御所、二条城など京都世帯の多くの建物を手掛けた中井家は、江戸時代を通じて幕府の京都大工頭を世襲した家柄で、初代より三代および三代後見人が大和守に任ぜられ、上方における公儀作事、すなわち御所、幕府関係の城郭、代表的な寺社などの建築工事を家職としていた。中井家に伝来する資料には、これらの建物の造営に関する書状、各種の建築指図、配下の大工組織、中井家の歴代の事績を示す文書などが含まれており、近世建築史を解明する上で、きわめて貴重な資料とされている。

本展覧会は、その成果の中から代表的な資料を選んで公開するもので、近世建築史を代表する著名な建造物や大工組織の解明に大きく貢献するものと考ええる。

「近代をつくった大工棟梁
高松の大工久保田家とその仕事」

・高松市歴史資料館 十一月二日～二月二八日



高松大工・久保田家が手掛けた建物の模型。

久保田家は、高松市の西部、香西本町で代大工を続けてきた家で、江戸後期から昭和三〇年代にかけての建築図面・彫物下絵・仕様書・見積書・賃金台帳など、千点以上にのぼる資料が久保田家から高松市歴史資料館に寄贈され、その研究成果を受けて展覧会が企画された。

久保田家の大工としての活動が確認できているのは、一三代久保田善五郎から一九代富五郎で、一七代専五郎のとき、時代は明治へと変わり、以後一九代にかけて、地域は高松市内から広く香川県内全域へと広がり、さらに岡山・和歌山・福井・北海道でも仕事をできるようになる。建物の種類も、神社や寺院のほか、学校・病院・村役場・個人住宅・図書館・劇場・工場など、多様化していく。

江戸時代に神社・寺院を専門として活躍した大工が明治の変革期を乗り越え、どの

ように近代の新しい時代に対応していったかが見えてくる。

「明治大正 お屋敷ドローイング」

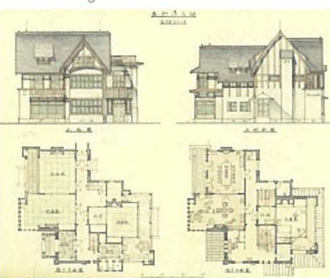
近代住宅彩色図集からみた清水組の仕事

・東京展・建築会館 〇九年四月二日～二〇日
・大阪展・大阪くらしの今昔館 〇九年八月一日～九月六日

清水建設所蔵の設計彩色図集は、明治末から大正期にかけて設計施工で実施した代表的な建物の作品集といえるもので、約六百数十枚が保管されている。

今回、住宅（邸宅）作品（約百二〇枚）に絞り、関連する設計図書、写真、工事記録等の資料収集、整理分析を行なった。彩色図集に収録されている作品（四七件）の出版を企画し、合わせてこれらの貴重な図面の一部を一般公開することになった。細密な図面表現から、写真ではうかがい知れない豊かな空間が鮮明に理解される。

これらの図面は、近代以降の建築変容過程を解明する上でも貴重な学術史料であり、史料の活用により今後の近代建築史研究の発展に貢献すると考えている。



番町清水邸の彩色図面

図書室だより

団地に関する資料

(1)ノスタルジীর対象としての団地

最近、メディアで「団地萌え」という言葉が取り上げられた。団地観賞オタクのブログも話題となり、団地観賞に関する本が出版されている。大山顕『団地の見究』東京書籍、同『団地さん』エンターブレイン、長谷聰・照井啓太『団地ノ記憶』洋泉社、石本馨『団地巡礼』二見書房、『僕たちの大好きな団地』洋泉社を受け入れた。眞形隆之『団地っ子の同窓会』東邦出版は、団地在住経験者ならわかる団地の「あるある」を書いている。青木俊也『団地2DKの暮らし』河出書房新社も昭和三〇年代の暮らしを写した写真が多数掲載されている。

(2)団地再生関連

高度成長期に数多く建てられた団地の老朽化や住民の高齢化等で「団地再生」の必要性が挙げられた。所蔵資料を紹介すると、団地再生研究会・合人社計画研究所『団地再生まちづくり』水曜社、松村秀一『団地再生』彰国社、みかんぐみ『団地再生計画』INAX出版、団地再生研究会『団地再生のすすめ』マルモ出版(二〇〇二年度出版助成)、角橋徹也主査『アムステルダム・ベルマミア高層住宅団地の再生に関する研究』(二〇〇二年度印刷助成)等である。また、二〇〇五年には住総研シンポジウムを「郊外団地の再生」というテーマで開催した。その時の講師の委託論文が『研究論文集No.32』に掲載されている。シンポジウム

の報告については「すまいろん」二〇〇五年秋号別冊を参照いただきたい。

他にも、当財団の『研究論文集』や「すまいろん」には、団地に関する論文や記事が多数掲載されている。「すまいろん」および『研究論文集』の記事検索は、図書室蔵書検索同様ホームページからできるので是非ご利用いただきたい。

<http://www.jusoken.or.jp/search.htm>

図書案内

開室時間：九：三〇～一六：〇〇

(二：〇〇～三：〇〇)は、レファレンスサービス等係員対応業務は休み)

休 室：土・日・祝・当財団の休日、他
利用資格：一八歳以上の方
利用形態：完全開架式(資料貸出はしてありません)

詳細お問い合わせは：
<http://www.jusoken.or.jp/rosyofront.htm>

新刊だより

「住まい・まち学習」実践報告・論文集九

第九回「住まい・まち学習」実践報告・論文公募で寄せられた三〇編の実践報告・論文、発表会の記録等を掲載している。

A4版
二二八ページ

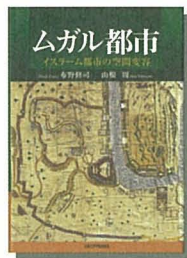


定価二二六〇円(本体二〇〇円)
お申込みは、丸善営業部(03-3272-0521)へ

出版助成による書籍

ムガル都市—イスラーム都市の空間変容
著者：布野修司・山根周
京都大学学術出版会

A5版
四四三ページ
定価五二五〇円(本体五〇〇円)



現代都市のリデザイン—これからのまちづくり心得

編著者：リデザイン研究会
東洋書店

A5版
二六八ページ
定価二七三〇円(本体二六〇〇円)



印刷助成による書籍

明治の団地—浅草玉姫町東京市公設長屋
著者：高橋幹夫

A5版
一二五ページ
定価一二六〇円(本体一二〇〇円)



「すまいろん」のご購読について

●発行は、冬号は一月、春号は四月、夏号は七月、秋号は一〇月です。

●定期購読料は、次の通りです(税・送料含)。
一年間(四冊) 二〇〇〇円
三年間(一二冊) 五〇〇〇円

●購読料は郵便局の振込用紙でお振込下さい。
口座番号 00110103166039
加入者名 財団法人 住宅総合研究財団
通信欄に、購読期間(二年あるいは三年)をご記入下さい。

(当財団から、領収書は発行しません)
●お届け先は、振込用紙の「払込人の住所・氏名」になります。

●購読開始は、購読料受領後の最新号からです。なお、購読料入金の確認に約一週間かかります。

●購読満了時にはお知らせをします。引き続き、ご購読をお願いします。

●購読中止により購読料の返金はいたしません。

●バックナンバーをご希望の方は、在庫の有無と送料を左記財団にご確認下さい。

●次の店頭で販売しています。
(定期購読は扱っていません)

南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21
TEL 03-32991113 3380

財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-18
TEL 03-34484-5381
FAX 03-34484-5794

今井兼次の自邸

快活な家、近代感覚の豊かな家、それでいて日本の住を忘れまいとした家

今井 兼介

父は自宅について新築当時いろいろと記しているのですが、ここに紹介する。

父は早稲田大学学生の頃から牛込区若松町に両親弟たちと住み、卒業と同時に助教授になり、大隈講堂原案、早大図書館等を設計し、また、メテオール建築会を創設した。一九二六年、東京地下鉄嘱託、早大留学生として欧米地下鉄駅の調査研究と近代建築研究のため渡欧した。エストベリ、アスプルンド、ブルーノ・タウト、グロピウス、コルビュジエなどに会い、翌年帰国した。直ちに東京地下鉄上野―浅草間の各駅を設計、翌年、早大演劇博物館を設計し十月には落成、翌十一月、清水静子と結婚した。翌一九二九年十一月、この緑豊かな荏原郡世田谷町下北沢御殿山小路の借地に念願の自宅を建て、私は翌年二月、新築のこの家で生まれた。

幼い頃、庭の櫛にハンモックをかけてもらったり、テラスで三輪車で遊んだ。父は弟子たちと二階の製図室で多摩帝国美術学校、日本中学校などの図面を書き、母は食事を作り台所から二階へ結ぶ伝声管で連絡していた。浴室のガス銅釜は下北沢駅前石黒風呂店で購入したが、私は桜新町の母の実家の五右衛門風呂の柔らかな暖かさが好きであった。

戦時中、庭に父と二mの防空壕を掘ったが、関東ローム層の土壁は崩れず地盤の良さに驚いた。壕内に父は母のためにニッチを造り、マリア像を置いた。五月二五日の空襲では、漆黒瓦が照明弾によって鏡のように光るので心配した。焼夷弾により五軒先まで焼失した

【私の新居】

―三千元の低利資金で建てた建築家の住宅

今井兼次

この秋を迎えて郊外生活の有難さを覚えたのはこの新居に移ってからです。場所は山の手の繁栄を奪う新宿駅から小田急線にのって十分間、七つ目の下北沢駅で降りて北方約四、五分下北沢の住宅地の中心をなすところです。御殿山の松林の四季を通じて清新な情景を展開していることも私がこの場所を選んだ動機の一つでありました。

早稲田の理工学部の先生連中十名でS住宅組合を組織しまして、東京府の三千元低利資金に加入することが、その数年後の昨年春にできたわけでありました。私がこの土地を決めましたのが十月の中頃でした。施工時期としては甚だ具合の悪い時であります。これも組合の関係でこれ以上起工日を遅らせることが不可能であったのですから仕方がありません。もちろん三千元と申ししても、給水・配線・家具類を除いて約三十五坪に対して三千六百円ばかりかかりました。外観は御覧の通り明快にして直截な姿で扱ったつもりであります。僅七十五坪の敷地に日光、通風、眺望等の諸問題を考えますと、結局図のようなプランとなつてしまいました。敷地の東側は道路、他の三面は隣家で、頗る開放的すぎる低い垣で境してありますので、前面道路は恰も私の庭の一部のようにとり入れられたのは成功であったと思います。茶の間、居間から往来を通る人達が終日絵巻物の様に動いて行くのが眺められます。お隣の萩も門も低い生垣も

私の庭の延長であり、私の家のケヤキもススキもお隣からは自分のお庭のようだといつてよろこんでもらっています。

白と黒の階調は日本の伝統精神を持つものと思ひまして、屋根と腰廻りの下見板に黒を用い、その他の大部分の壁体はシマンタリーの白亜を粗面に使用しました。日本民家に観る現象を新しい洋風の中に幾分でもとり入れることができたように自分は思っております。二階の出窓の東側下見張りのみはスカイブルーの色で塗りましたので、黒白の調子の裡に近代性の軽快なテンポを与えることができました。私の新しい試みはまた屋根の瓦にもあることを申し添えましょう。漆のようにしたたる黒さを持つ光沢瓦を採用して見たことであります。これを私は漆黒瓦と呼んでいますが、古い友人、なじみの勝さんに相談して大いに考えてもらったものです。朝夕の色は露をふくむような純黒さに見えますので、壁面の白に対し十分の落ちつきを与えることが出来ました。満月の夜はかく別に浮き出てこの住宅地の環境を明るくものにさせているように思われます。

室内に移りますが、丸窓のある応接室をモダンな調子で扱ひまして、色彩も出来るだけ面白く使ってみました。ドアは鮮明なスカイブルーの色で染め家具の色と同色にまとめました。棚の部分には欧州の旅から持ち帰ったスペインの壺、ロシアの工芸、壁にはスイスの画家ホドラー氏の「春」と題した絵を入れています。フィンランド婦人のシマの布地で作ったクッションを椅子の上に使って居りますが、結構裝飾的でもあり、使いやすいものであります。いずれにしてもこの室は外部の明るい現象をそのまま



井路側を全ア窓の丸を
今道へ正面
のてから開
在るた
右増築は左景プロ
増築は左景プロ
増築は左景プロ



上/応接室前のテラス。2階に書斎と仕事場などがある。

が、樹木により助かった。母は近くの松林へ避難したが焼け残ったわが家を見て、水をかけて家を守った父と私に深々と頭を下げ感謝した。この家だけが財産であり、母の気持がよくわかった。この爆撃により、近くの水道道路から新宿の伊勢丹が見えるほどの焼け野原となり、大原で焼け出された母の妹一家三人はしばらくこの応接間で生活していた。

戦前、戦中、戦後を通じ、この家には岸田国士、内藤多仲、村野藤吾、丹下健三、淀井敏夫、宮柁二、ラサル神父ほか多くの方々が訪れた。私の結婚の時、バルコニーに和室を増築し外装の一部を変えたが、現在近所で建替えていないのはわが家だけとなった。

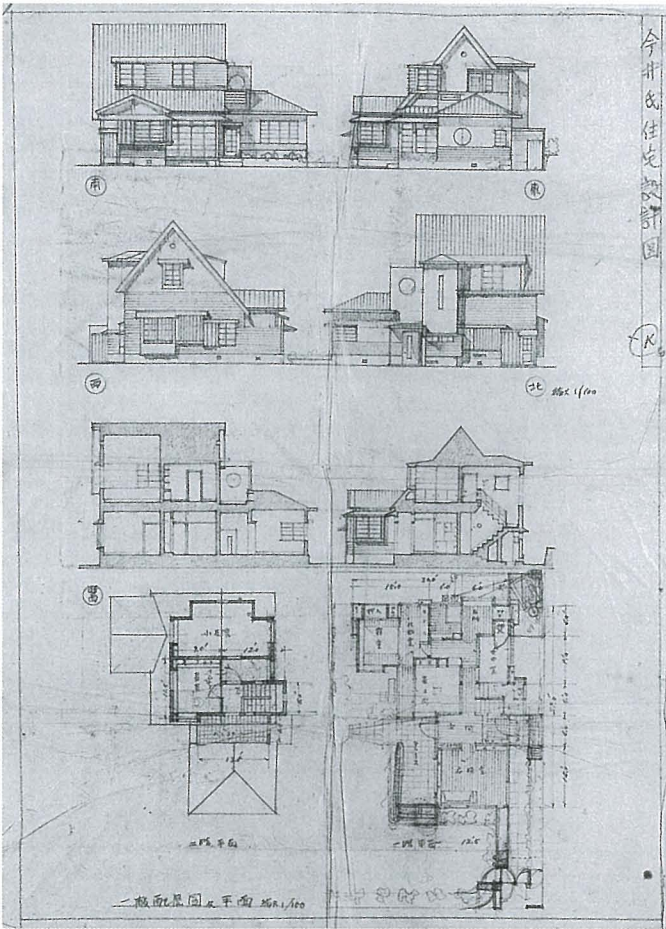
今井兼介/いまい・けんすけ

一九五六年、早稲田大学院修士課程(建築計画専修)修了。村野・森建築事務所で設計に携わるなか、関東学院大学非常勤講師を務める。現在、多摩美術大学 今井兼次共同研究会会員。

《今井兼次が自宅について記したもの》

- ・「今井氏邸」、「新建築」第六卷一九九号、一九三〇年。
- ・「和蘭風の軽快な中流住宅」、「初めて家を建てる人に必要な住宅の建て方」所収、主婦の友社、一九三一年。
- ・「建築家のお宅拝見(九)」、「東京朝日新聞」一九三三年七月四日。
- ・「吾が家を語る」、「建築家の家」所収、洪用社、一九三四年。

《付記》
『今井兼次著作集 作品論』(多摩美術大学 今井兼次共同研究会編)が二〇〇八年出版予定。また、展覧会「建築家 今井兼次の世界Ⅲ」を多摩美術大学美術館で二〇〇九年開催予定。



今井兼次邸の平面図・断面図・立面図 1932年

うつつしているつもりです。茶の間は四畳半の和室で台所とはハッチで食事時のサービスが出来るようにしました。居間は寢室を兼ねていますので、約四畳半弱の畳を一段上げて板間の一部に敷きました。タンス類もそこに置きました。家内の化粧部屋にもなっておりますので、私の家で一番都合よく使われています。畳が板間より上がっておりますので家庭のものや親しいものは、この畳に腰をかけて朝のお茶や夕の雑談にふけることが出来、一方和洋服の整理に好都合のことがしばしばあります。隣りは湯殿でガス風呂を用いて居ります。台所は一坪あります。アイロン台を折タタミ式にして利用したのが異色と言えましょう。

二階には書斎と主婦のミシン室及び私の仕事場であるアトリエがあります。アトリエは最近まで物置き小屋であったものに壁を塗って図面のような一室に仕上げたものです。階段室から松林を一連にのぞむ二坪余りのバルコニーに出られますので家庭のものには健康な場所として悦ばれて居ります。

私の最近の試みとして快活な家、近代感覚の豊かな家、それで日本の住を忘れまいとしたもの一つと思います。フラグ・ポールにはブル一とイエローの私の旅行旗が時折翻翻として白壁の前に高く昇ります。前の往来が急に明るくなるように思われます。(一九三〇・一〇・一四)

—「住宅」一九三〇年十一月号所収

編集後記

nLDK論が関心を集めるようになってから、すでに二〇〇年ほどが経過している。本誌の一九九九年春号でも「リビングルームのゆくえ」と題して特集しており、編集委員会で企画案を説明したときも、「またか」という雰囲気であった。

今回の特集の契機は、鈴木成文・上野千鶴子・山本理頭の三先生による論争が話題を呼んだことだが、しかし、それを繰り返すだけでは「またか」になる。そこで、逆の立場から発想してみた。つまり、これまでは住宅の近代化への懐疑から、もっぱらnLDKへの批判を取り上げてきた。しかし、現実はどうだろうか。nLDKはますます隆盛だ。とすれば、逆に、それを前向きに受け入れるのも、「わるくない」かもしれない。こうして、やや強引に編集側のテーマ設定が決まった。

偏ったテーマ設定にもかかわらず、ミ

ニシンボの北浦・祐成の両先生、原稿を依頼した皆さんは快く引き受けてくださり、また内容も濃いものになった。この場をお借りして、改めて感謝する次第だ。

異分野がクロスするミニシンボの面白さ、山本氏や小間氏が描くマーケットの論理など、実に読み応えがある。また、私が印象深かったのは、団地暮らしを経験した脇田氏や、建築家の橋本氏・大川氏が、nLDKに対して批判でも擁護でもなく、肩肘張らない自然体で接していることであった。原稿を拝見していると、諸先輩のnLDK批判が、遠い出来事のように思えてくる。この感覚は、何だろうか。

もしかしたら、誰もが自然体になれることが、nLDKの本質かもしれない。つまり、万人に共通の記号でありながら、画一性の息苦しさを感じさせない。自分の絵を描ける無地のキャンパスの性格も持っている。特集テーマを変えるべきか……「nLDK、恐るべし」。

(本号責任編集 小林秀樹)

住宅総合研究財団（略称「住総研」）は

昭和二三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「住宅総合研究財団研究論文集」等を発刊、また住に関する専門図書室・セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業に努めております。

この「すまいるん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行（季刊）されているものです。ご利用のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

季刊 **すまいるん** 2008年秋号

二〇〇八年一〇月二〇日発行

頒価 500円

発行 財団法人 住宅総合研究財団

発行人 岡本 宏

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8

TEL (03) 3484-5381

FAX (03) 3484-5794

E-mail: jusoken@mx.mesh.ne.jp

URL: <http://www.jusoken.or.jp/>

編集委員 *

片山和俊（東京芸術大学建築科教授）

小林秀樹（千葉大学工学部教授）*

中谷礼仁（早稲田大学理工学術院准教授）

服部岑生（千葉大学大学院名誉教授）

野城智也（東京大学生産技術研究所教授）

制作 建築思潮研究所

印刷 製本 慶昌堂印刷株式会社